特別支援学校
自立活動ガイド

令和２年３月

秋田県教育庁特別支援教育課

ガイド発刊に当たって

このたび、本県特別支援学校における自立活動の指導の改善・充実のため、「特別支援学校自立活動ガイド」を発刊しました。

秋田県教育委員会では、平成３０年度から第三次秋田県特別支援教育総合整備計画に基づき、特別支援教育推進のための体制を整備するとともに、幼稚園・保育所、小・中学校、高等学校等における特別支援教育及び特別支援学校における教育の充実を図るため、様々な取組を進めています。

特別支援学校については、基本方向１として「専門性の高い教育の充実」を掲げており、自立活動の指導は、専門性として特に重要なものと言えます。具体的には、重点施策「幼児児童生徒の多様な実態と教育的ニーズに対応した教育課程の編成」の施策内容「発達の段階を踏まえた自立活動の改善・充実」として、平成３０年度から２か年、自立活動の「授業改善プロジェクト」に取り組んできました。

「授業改善プロジェクト」では、各校の担当者が、新学習指導要領に基づいて自立活動の指導を基礎・基本から見直し、特に、個別の指導計画の作成、改善に重点を置いた研修を重ねました。また、授業提示校３校の協力によって、授業検討会・授業研究会を実施し、実際の授業づくりを踏まえて「自立活動の指導の改善・充実に当たっての要点」を整理することができました。

本ガイドでは、「基礎編」として新学習指導要領に基づいた自立活動の指導の基礎・基本と、「実践編」として「授業改善プロジェクト」の授業提示校の実践を紹介しています。また、「資料編」には、「授業改善プロジェクト」担当者の実践記録に加えて、「２０１９年度特別支援教育に関する実践研究充実事業」研究協力校の研究資料の一部も掲載しています。

本ガイドが積極的に活用されることにより、各校において自立活動の重要性が再認識され、子ども一人一人の教育的ニーズに丁寧に応える自立活動の指導の更なる充実につながることを期待しています。

令和２年３月

秋田県教育庁特別支援教育課
課長　新 井　敏 彦

目　　次

ガイド発刊に当たって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅰ　基礎編

１　自立活動とは
（１）自立活動の必要性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
（２）教育課程上の位置付け・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
（３）自立活動の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
（４）自立活動の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
（５）自立活動の指導の特色と進め方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
（６）自立活動を主とした指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
（７）知的障害特別支援学校における自立活動・・・・・・・・・・・・・・・・・13
２　個別の指導計画の作成
（１）個別の指導計画の作成手順・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
（２）幼児児童生徒の実態把握・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
（３）指導目標の設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
（４）具体的な指導内容の設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
（５）評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
（６）実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例（流れ図）　・・・・20
３　自立活動の指導の展開
（１）指導方法の創意工夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
（２）自立活動の指導体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
（３）個別の支援計画の活用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

Ⅱ　実践編

１　平成３０年度・令和元年度「授業改善プロジェクト」の概要　・・・・・・・・・・28
２　自立活動の指導の改善の実際～授業提示校の実践～・・・・・・・・・・・・・・30
３　自立活動の指導の改善・充実に当たっての要点・・・・・・・・・・・・・・・・・37

Ⅲ　資料編

資料１　平成３０年度・令和元年度「授業改善プロジェクト」関係資料
　１　平成３０年度・令和元年度「授業改善プロジェクト」担当者名簿・・・・・・40
　２　「授業改善プロジェクト」授業研究会関係資料・・・・・・・・・・・・・・・41
　３　自立活動の指導　各担当者の実践記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
資料２　２０１９年度特別支援教育に関する実践研究充実事業「自立活動の授業改善」に係る研究協力校　研究関係資料
　１　県立視覚支援学校　研究関係資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
　２　県立支援学校天王みどり学園　研究関係資料・・・・・・・・・・・・・・・・84

Ⅰ　基礎編

基礎編では、次の資料に基づいて、自立活動の基礎・基本を確認します。

・「特別支援学校幼稚部教育要領」　平成２９年４月告示　文部科学省
・「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」　平成２９年４月告示　文部科学省
・「特別支援学校高等部学習指導要領」　平成３１年２月告示　文部科学省
・「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」　平成３０年３月　文部科学省

基礎編における表記等については、次の点に注意してください。

・学習指導要領等については、小学部・中学部学習指導要領を中心に取り上げています。幼稚部については、「指導目標」を「ねらい」と読み替えてください。
・「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」を「解説」と表記しています。
・各ページのタイトルの上部に記した「解説ｐ○～○」は、関連する内容が解説のどのページに記載されているかを示すものです。

1　自立活動とは

（１）自立活動の必要性

特別支援学校の教育は、幼児児童生徒の人間として調和のとれた育成を目指すものであり、自立活動の指導は、その基盤を培う役割を担っています。

特別支援学校の目的（学校教育法第７２条）

特別支援学校は、視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者、肢体不自由又は病弱者（身体虚弱者を含む。以下に同じ。）に対して、幼稚園、小学校、中学校又は高等学校に準ずる教育を施すとともに、障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けることを目的とする。

特別支援学校の教育においては、障害のある幼児児童生徒を対象として、小・中学校等と同様に、学校の教育活動全体を通じて、幼児児童生徒の人間として調和のとれた育成を目指しています。

しかし、障害のある幼児児童生徒の場合、その障害によって、日常生活や学習場面において様々なつまずきや困難が生じることから、小・中学校等の幼児児童生徒と同じように心身の発達の段階等を考慮して教育するだけでは十分とは言えません。そこで、個々の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導が必要となります。

このため、特別支援学校においては、小・中学校等と同様の各教科等に加えて、特に自立活動の領域を設定し、それらを指導することによって、幼児児童生徒の人間として調和のとれた育成を目指しているのです（図１）。

心身の調和的発達の基盤を培う自立活動の指導は、各教科等において育まれる資質・能力を支える役割を担っています。

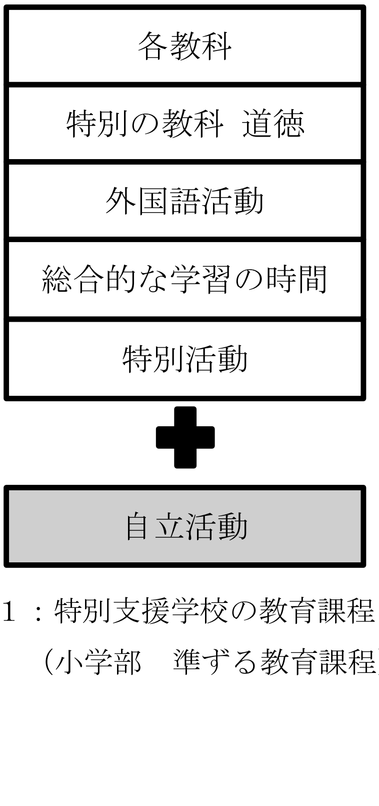


図１：特別支援学校の教育課程
（小学部　準ずる教育課程）

解説ｐ22～23、44～46

１　自立活動とは

（２）教育課程上の位置付け

自立活動の指導は、自立活動の時間はもとより、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものです。

小学部・中学部学習指導要領（第１章第２節の２）

（４）学校における自立活動の指導は、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、自立し社会参加する資質を養うため、自立活動の時間はもとより、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする。特に、自立活動の時間における指導は、各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動と密接な関連を保ち、個々の児童又は生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を的確に把握して、適切な指導計画の下に行うよう配慮すること。

小学部・中学部学習指導要領の総則では、自立活動の指導の重要性に鑑み、学校の教育活動全体を通じて行うことが示されています。

自立活動の指導に当たっては、次の点にも留意が必要です。

・個々の児童生徒の実態に応じて、自立活動の指導の授業時数を適切に設定すること。

・自立活動の時間における指導は、各教科等における指導と密接な関連を保って行うこと（図２）。

・自立活動の時間における指導を設けない場合でも、学校の教育活動全体を通じて自立活動の指導を行うこと（図３）。

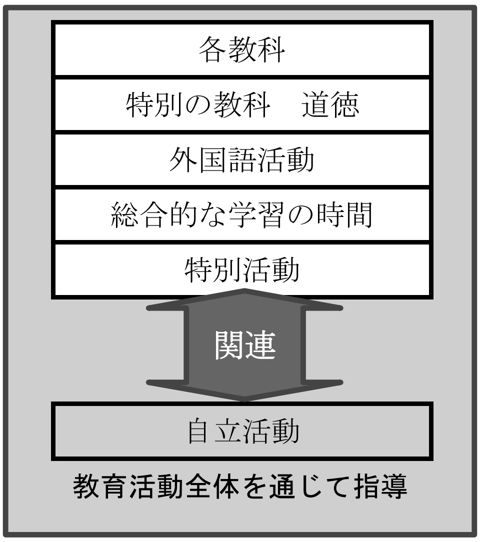


図２：自立活動の時間を設ける場合
（小学部　準ずる教育課程）

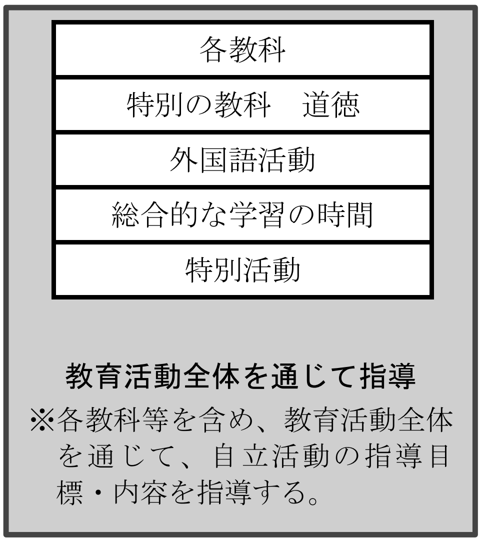


図３：自立活動の時間を設けない場合
（小学部　準ずる教育課程）

解説ｐ48～49

1　自立活動とは

（３）自立活動の目標

自立活動の目標は、個々の幼児児童生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な力を養い、心身の調和的発達の基盤を培うものです。

自立活動の目標（小学部・中学部学習指導要領第７章第１）
　個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。

＊文中の下線は、本ガイドによるものです。

　自立活動の目標に用いられている文言の意味を確認し、目標を正しく捉えて指導に当たりましょう。

○「自立」とは

・幼児児童生徒がそれぞれの障害の状態や発達の段階等に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすること。

○「障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服する」とは

・幼児児童生徒の実態に応じ、日常生活や学習場面（幼：遊び）等の諸活動において、その障害によって生ずるつまずきや困難を軽減しようとしたり、また、障害があることを受容したり、つまずきや困難の解消のために努めたりすること。
・「改善・克服」については、改善から克服へといった順序性を示しているものではないこと。

○「調和的発達の基盤を培う」とは

・一人一人の幼児児童生徒の発達の遅れや不均衡を改善したり、発達の進んでいる側面を更に伸ばすことによって遅れている側面の発達を促すようにしたりして、全人的な発達を促進すること。

解説ｐ24～26、50～51

１　自立活動とは

（４）自立活動の内容

学習指導要領等に示す自立活動の内容は、個々の幼児児童生徒の実態に応じて必要な項目を選定して取り扱うものであることに、十分留意する必要があります。

学習指導要領等に示す自立活動の内容は、各教科等のようにその全てを取り扱うものではなく、個々の幼児児童生徒の実態に応じて必要な項目を選定して取り扱うものであることに、十分留意する必要があります。

また、自立活動の指導に当たっては、自立活動の内容と具体的な指導内容の関係を整理しておくことが重要です。

【自立活動の内容】

・学習指導要領等における自立活動の内容は、「健康の保持」、「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「環境の把握」、「身体の動き」及び「コミュニケーション」の六つの区分の下に、２７項目を分類・整理したもの（ｐ１０参照）。

・２７の項目は、多くの具体的な指導内容から、人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素と、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素として抽出された、代表的な要素。

【具体的な指導内容】

・個々の幼児児童生徒に設定される具体的な指導内容は、指導目標を達成するために、学習指導要領等に示されている内容から必要な項目を選定し、それらを相互に関連付けて設定するもの。

※解説の「第６章自立活動の内容」では、２７項目について、次のような構成で解説しています。

①この項目について（各項目で意味していることの解説）

②この項目を中心として設定した具体的な指導内容例と留意点

③他の項目と関連付けて設定した具体的な指導内容例

②、③では、それぞれの内容を具体的にイメージすることができるように、様々な障害や障害の状態を踏まえて、数多くの例が挙げられています。この例示については、各項目で示された障害種のみが指導の対象となるものではなく、他の障害であっても学習上又は生活上の困難が共通する場合には参考にすることができること、項目の関連付けについても例示したものに限らないことに留意が必要です。

新学習指導要領では、連続した多様な学びの場において、障害の重度・重複化や発達障害を含む多様な障害に応じた指導や、自己の理解を深め主体的に学ぶ意欲を一層伸長するなどの発達の段階を踏まえた指導を充実するため、項目の見直しが行われました。１（４）は追加、４（２）（４）は改められた項目です。

自立活動の内容（６区分２７項目）

1　健康の保持

(1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。

(2)病気の状態の理解と生活管理に関すること。

(3)身体各部の状態の理解と養護に関すること。

(4)障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること。〔追加〕

(5)健康状態の維持・改善に関すること。

2　心理的な安定

(1)情緒の安定に関すること。

(2)状況の理解と変化への対応に関すること。

(3)障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。

3　人間関係の形成

(1)他者とのかかわりの基礎に関すること。

(2)他者の意図や感情の理解に関すること。

(3)自己の理解と行動の調整に関すること。

(4)集団への参加の基礎に関すること。

4　環境の把握

(1)保有する感覚の活用に関すること。

(2)感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること。〔改〕

(3)感覚の補助及び代行手段の活用に関すること。

(4)感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること。〔改〕

(5)認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。

5　身体の動き

(1)姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。

(2)姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること。

(3)日常生活に必要な基本動作に関すること。

(4)身体の移動能力に関すること。

(5)作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること。

6　コミュニケーション

(1)コミュニケーションの基礎的能力に関すること。

(2)言語の受容と表出に関すること。

(3)言語の形成と活用に関すること。

(4)コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。

(5)状況に応じたコミュニケーションに関すること。

解説ｐ23～24、40～41

１　自立活動とは

（５）自立活動の指導の特色と進め方

自立活動は、個々の幼児児童生徒の実態等に即して、個別の指導を行うことが基本となることから、個別に指導目標・内容を定めた、個別の指導計画を作成することが求められます。

【自立活動の指導の特色】

自立活動の指導は、個々の幼児児童生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服しようとする取組を促す教育活動です。よって、個々の幼児児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に即して、個別に指導を行うことが基本となります。

このため、指導に当たっては、個別に指導目標・内容を定めた、個別の指導計画が作成されています。個別の指導計画に基づいた指導は、個別指導の形態で行われることが多いですが、指導目標を達成する上で効果的である場合には、幼児児童生徒の集団を構成して指導することも考えられます。しかし、自立活動の指導計画は個別に作成されるものであり、最初から集団で指導することを前提とするものではないことに十分留意することが重要です。

【自立活動の指導の進め方】

個別の指導計画に基づく指導は、計画（Plan）－実践（Do）－評価（Check）－改善（Action）のサイクルで進めます（図４）。

※個別の指導計画は、幼児児童生徒一人一人に対する自立活動のきめ細やかな指導を組織的・継続的に行うために重要な役割を担っています。進学や転学の際、幼児児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等や自立活動の学習状況等を踏まえた継続的な指導が行われるよう、個別の指導計画の引継ぎや活用についての考え方や留意点を明確にしておくことが必要です。

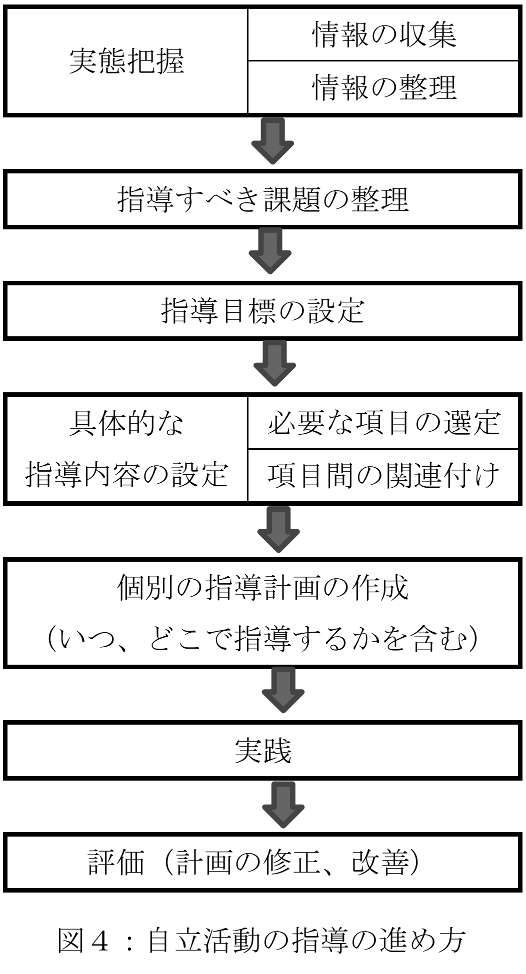


図４：自立活動の指導の進め方

解説ｐ46～47、122

1　自立活動とは

（６）自立活動を主とした指導

自立活動を主として指導を行う場合は、全人的な発達を促すために必要な基本的な指導内容を、個々の実態に応じて設定し、系統的な指導を展開できるようにします。

小学部・中学部学習指導要領（第１章第８節）

４　重複障害者のうち、障害の状態により特に必要がある場合には、各教科、道徳科、外国語活動若しくは特別活動の目標及び内容に関する事項の一部又は各教科、外国語活動若しくは総合的な学習の時間に替えて、自立活動を主として指導を行うことができるものとする。

小学部・中学部学習指導要領（第７章第３）

４　重複障害者のうち自立活動を主として指導を行うものについては、全人的な発達を促すために必要な基本的な指導内容を、個々の児童又は生徒の実態に応じて設定し、系統的な指導が展開できるようにするものとする。その際、個々の児童又は生徒の人間としての調和のとれた育成を目指すように努めるものとする。

【自立活動を主として指導を行う場合の留意点】

・障害が重複している、あるいはそれらの障害が重度であるという理由だけで、各教科等の目標や内容を取り扱うことを全く検討しないまま、安易に自立活動を主として指導を行うことがないこと。
・道徳科及び特別活動については、その目標及び内容の全部を替えることができないこと（図５）。
・取り上げた指導内容を相互に関連付けて総合的に取り扱い、段階的、系統的な指導を展開すること。
・個々の幼児児童生徒の発達の遅れや不均衡を改善したり、発達の進んでいる側面を更に伸ばすことによって遅れている側面の発達を促すようにしたりして、全人的な発達を促進すること。
・自立活動の指導の結果を評価する際には、各教科等を自立活動に替えることとなった理由との関連に着目しながら、再度、各教科等の目標及び内容の取扱いについての検証に努めること。

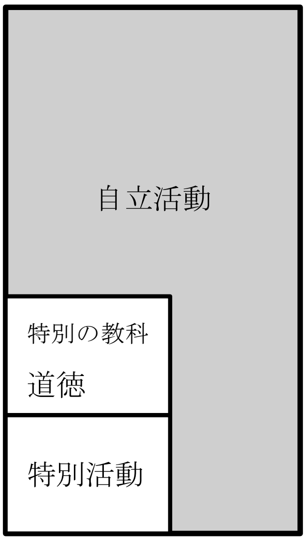


図５：自立活動を主とした指導

1　自立活動とは
（７）知的障害特別支援学校における自立活動

知的障害のある幼児児童生徒には、言語、運動、動作、情緒、行動等の特定の分野に、顕著な発達の遅れや特に配慮を必要とする様々な状態が知的障害に随伴して見られます。

小学部・中学部学習指導要領総則では、知的障害特別支援学校においても、全ての児童生徒に、各教科等とともに自立活動を履修させることを明示しています。（第１章第３節の３の（１）のカ）

【知的障害のある幼児児童生徒の学習上又は生活上の困難】

知的障害のある幼児児童生徒には、「全般的な知的発達の程度や適応行動の状態に比較して、言語、運動、動作、情緒、行動等の特定の分野に、顕著な発達の遅れや特に配慮を必要とする様々な状態が知的障害に随伴して見られる」ため、そのような困難の改善等を目指して自立活動の指導を行う必要があります。

顕著な発達の遅れや特に配慮を必要とする状態の例
〔言語面〕発音が明瞭でない。言葉と言葉を組み立てて話すことが難しい。
〔運動や動作面〕走り方がぎこちなく、安定した姿勢を維持できない。
衣服のボタンを掛け合わせることが思うようにできない。
〔情緒や行動面〕失敗経験が積み重なり、何事に対しても自信がもてない。
新しいことに不安を示し、参加できない。

【各教科等の指導の基盤を整えるために必要な自立活動の指導】

各教科等の指導を効果的に進めるためにも、自立活動の指導が必要です。

○小学部国語科の例
〔内容〕１段階「教師の話や読み聞かせに応じ、音声を模倣したり、表情や身振り、簡単な話し言葉などで表現したりすること。」
〔実態〕教師の音声を模倣して言葉で表現しようとするが、発音がはっきりしない。
〔背景要因〕呼気と吸気の調整がうまくできない。母音や子音を発音する口の形をつくることが難しい。
〔自立活動の指導〕コミュニケーションの区分における「（２）言語の受容と表出に関すること。」などの項目を関連付けた指導が必要。

【各教科等を合わせた指導を行う場合の個別の指導計画】

各教科、特別の教科　道徳、外国語活動、特別活動及び自立活動の一部又は全部について、合わせた指導を行う場合においても、自立活動について個別の指導計画を作成し、指導目標や指導内容を明記する必要があります。

解説ｐ103～105

２　個別の指導計画の作成

（１）個別の指導計画の作成手順

個別の指導計画は、個々の幼児児童生徒の実態の的確な把握に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、指導目標・内容を設定します。

小学部・中学部学習指導要領（第７章第３）

1　自立活動の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等の的確な把握に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、指導目標及び指導内容を設定し、個別の指導計画を作成するものとする。その際、第２に示す内容の中からそれぞれに必要とする項目を選定し、それらを相互に関連付け、具体的に指導内容を設定するものとする。

自立活動の指導における個別の指導計画の作成は、個々の幼児児童生徒の実態把握に基づき、指導すべき課題を整理し、指導目標を明らかにした上で、自立活動の内容の中から必要な項目を選定し、それらを相互に関連付けて具体的な指導内容を設定するものと示されています。

個別の指導計画の作成の手順や様式は、それぞれの学校が幼児児童生徒の障害の状態や発達の段階等を考慮し、指導上最も効果が上がるように考えるものです。解説では、小・中学部の場合の手順の一例を次のように示しています。

①　個々の児童生徒の実態（障害の状態，発達や経験の程度，生育歴等）を的確に把握する。
②　実態把握に基づいて指導すべき課題を抽出し，課題相互の関連を整理する。
③　個々の実態に即した指導目標を明確に設定する。
④　小学部・中学部学習指導要領第７章第２の内容の中から，個々の指導目標を達成するために必要な項目を選定する。
⑤　選定した項目を相互に関連付けて具体的な指導内容を設定する。

解説ｐ106～108

２　個別の指導計画の作成

（２）幼児児童生徒の実態把握

自立活動は、個々の障害による学習上又は生活上の困難の主体的な改善・克服を目標とするため、実態を的確に把握することが重要です。

小学部・中学部学習指導要領（第７章第３の２）
（１）個々の児童又は生徒について、障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境などの実態を的確に把握すること。

【実態把握の具体的な内容】

・幼児児童生徒が困難なことのみを観点にするのではなく、長所や得意としていることも把握すること。

病気等の有無や状態、生育歴、基本的な生活習慣、人やものとのかかわり、心理的な安定の状態、コミュニケーションの状態、対人関係や社会性の発達、身体機能、視機能、聴覚機能、知的発達や身体発育の状態、興味・関心、障害の理解に関すること、学習上の配慮事項や学力、特別な施設・設備や補助用具（機器を含む。）の必要性、進路、家庭や地域の環境等

【実態把握の方法】

・直接的な把握（観察法、面接法、検査法等）
・保護者からの聞き取り
・関係機関からの情報収集（心理学的な立場、医学的な立場からの情報や福祉施設等からの情報等）
・学習の記録の活用（前の学年までの個別の指導計画等）

【実態把握に当たっての留意点】

・自立活動の指導を行う観点から、実態把握の内容や範囲を明確に整理すること。
・生育歴や家庭生活の状況等について、保護者に話を聞く際には、その心情に配慮し共感的な態度で接すること。
・個人情報の保護の観点から、情報の適切な管理についても十分留意すること。

２　個別の指導計画の作成

（３）指導目標の設定

実態把握に基づいて得られた指導すべき課題相互の関連の検討を基に、長期的・短期的な観点から指導目標を設定します。そして、指導目標を達成するために必要な指導内容を段階的に取り上げます。

小学部・中学部学習指導要領（第７章第３の２）
（２）児童又は生徒の実態把握に基づいて得られた指導すべき課題相互の関連を検討すること。その際、これまでの学習状況や将来の可能性を見通しながら、長期的及び短期的な観点から指導目標を設定し、それらを達成するために必要な指導内容を段階的に取り上げること。

①　指導すべき課題相互の関連の検討

【実態把握で収集した情報を整理する際の視点】

・学習状況

幼児児童生徒の「できること」「もう少しでできること」「援助があればできること」「できないこと」などを明らかにする。

・困難の背景要因

幼児児童生徒の現在の状態に着目するだけではなく、その生育の過程の中で、現在の状態に至った原因や背景を明らかにする。

・数年後の姿

数年後の幼児児童生徒の学びの場や生活の場などを想定し、そこで必要とされる力や目指す姿を明らかにする。

【指導すべき課題を整理する際の視点】

・収集した情報からの課題の抽出

幼児児童生徒の困難の背景や、学校で指導可能な残りの在学期間、数年後や卒業後までに育みたい力との関係などから、指導開始時点で課題となることを抽出する。

・中心的な課題の導き出し

指導すべき課題として抽出された課題について、課題同士の関連、指導の優先、指導の重点の置き方等について検証する。一つ一つの課題は、単独で生じている場合も考えられるが、相互の課題が関連している場合もある。こうした

因果関係等の整理により、他の多くの課題と関連している課題の存在や、複数の課題の原因となっている課題の存在などに注目しやすくなる。また、中心的な課題に対する発展的な課題の見通しなどももちやすくなる。

※幼児児童生徒の課題の分析や指導すべき課題の整理を適切に進めていくために、複数の教師で検討する学校のシステムを構築していくことが望まれます。

②　指導目標の設定と目標達成に必要な項目の選定

【指導目標の設定】

・導き出された中心的な課題を踏まえて、各部の在学期間、学年等の長期的な観点に立った指導目標とともに、当面の短期的な観点に立った指導目標を定めること。

・段階的に短期の指導目標を達成し、長期の指導目標の達成につなげるという展望をもつこと

・個々の幼児児童生徒の障害の状態等は変化し得るものであるので、特に長期の指導目標については、今後の見通しを予測しながら、指導すべき課題を再整理し、指導目標を適切に変更し得るような弾力的な対応をとること。

【目標達成に必要な項目の選定】

・長期的な観点に立った指導目標の達成に向けて、必要な指導内容を段階的、系統的に取り上げること。

・幼児児童生徒の将来の可能性を限定的に捉えるのではなく、技術革新や社会の発展を考慮した上で、現在の発達の段階において育成すべき具体的な指導目標とそれを達成するために必要な項目を選定すること。

※幼稚部、小学部、中学部、高等部と継続的に指導していく過程で指導内容の重複や欠落がないように、個々の幼児児童生徒の個別の指導計画に基づく指導記録を適切に管理し、それまでの指導を生かすようにすることが重要です。

解説ｐ111～117

２　個別の指導計画の作成

（４）具体的な指導内容の設定

具体的な指導内容を設定する際は、幼児児童生徒が主体的に取り組むことができるような指導内容等の設定に配慮が必要です。

自立活動の指導に当たっては、自立活動の内容の６区分２７項目の中から必要な項目を選定し、それらを相互に関連付け、具体的な指導内容を設定することとなります。学習指導要領には、その際の配慮事項が６点示されています（幼稚部教育要領においては、①、③、④の３点)。⑤、⑥は新学習指導要領で新たに示された配慮事項です。

①　主体的に取り組む指導内容

幼児児童生徒が、興味をもって主体的に取り組み、成就感を味わうとともに自己を肯定的に捉えることができるような指導内容を取り上げること。

②　改善・克服の意欲を喚起する指導内容

児童又は生徒が、障害による学習上又は生活上の困難を改善･克服しようとする意欲を高めることができるような指導内容を重点的に取り上げること。

③　発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容

個々の幼児児童生徒が、発達の遅れている側面を補うために、発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容を取り上げること。

④　自ら環境を整える指導内容（幼：自ら環境と関わり合う指導内容）

個々の児童又は生徒が、活動しやすいように自ら環境を整えたり、必要に応じて周囲の人に支援を求めたりすることができるような指導内容を計画的に取り上げること。（幼児が意欲的に感じ取ろうとしたり、気が付いたり、表現したりすることができるような指導内容を取り上げること。）

⑤　自己理解・自己決定を促す指導内容

個々の児童又は生徒に対し、自己選択・自己決定する機会を設けることによって、思考・判断・表現する力を高めることができるような指導内容を取り上げること。

⑥　自立活動を学ぶことの意義について考えさせるような指導内容

個々の児童又は生徒が、自立活動の学習の意味を将来の自立と社会参加に必要な資質･能力との関係において理解し、取り組めるような指導内容を取り上げること。

２　個別の指導計画の作成

（５）評価

幼児児童生徒の学習状況や指導の結果の適切な評価によって、個別の指導計画や具体的な指導の改善に生かすことが重要です。

小学部・中学部学習指導要領（第７章第３の２）
（４）児童又は生徒の学習状況や結果を適切に評価し、個別の指導計画や具体的な指導の改善に生かすよう努めること。

自立活動の個別の指導計画は、当初の仮説に基づいて立てた見通しであり、幼児児童生徒にとって適切な計画であるかどうかは、実際の指導を通して明らかになるものです。したがって、幼児児童生徒の学習状況や指導の結果に基づいて、適宜修正を図る必要があります。

評価は幼児児童生徒の学習評価であるとともに、教師の指導に対する評価でもあります。教師には、評価を通して自分の指導の在り方を見つめ、幼児児童生徒に対する適切な指導内容・方法の改善に結び付けることが求められます。

評価に当たっては、次の点に注意が必要です。

○具体的な到達状況の捉え

・指導目標を設定する段階において、幼児児童生徒の実態に即し、その具体的な到達状況の捉えを明確にしておくこと。

○日常的な評価

・幼児児童生徒が目標達成に近付いているか、教材・教具などに興味をもって取り組んでいるかなどの視点で、幼児児童生徒の学習状況を評価すること。

○多面的な評価

・教師間の協力の下で、適切な方法を活用して進めること。
・必要に応じて外部の専門家と連携を図ること。
・保護者に、幼児児童生徒の成長の様子を確認してもらうこと。併せて、学習で身に付けたことを家庭生活でも発揮できるよう協力を求めること。

○幼児児童生徒の自己評価

・幼児児童生徒が、障害のある自分を知り、受け止め、それによる困難を改善しようとする意欲をもつことができるよう、自立活動の学習前、学習中あるいは学習後に、幼児児童生徒の実態に応じて、自己評価を取り入れること。

解説ｐ28～31、108～109

２　個別の指導計画の作成

（６）実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例（流れ図）

「流れ図」は、新たに導入された、指導すべき課題を整理する手続きを加えて、個別の指導計画の作成の手順の例として示されているものです。

【「指導すべき課題の整理」とは】

自立活動の個別の指導計画を作成する上で、最も重要な点が、実態把握から指導目標を設定するまでのプロセスにあります。自立活動については、教科のように目標の系統性は示されていないため、個別の指導計画を通して、目標設定に至る考え方を指導担当者間で共有し、指導の継続性を確保することが求められます。

そのため、新学習指導要領においては、個別の指導計画の作成の手順の中に、実態把握から指導目標を設定する過程において、指導すべき課題を整理する手続きが導入され、指導目標を設定するに至る判断の根拠を記述して残すことが示されました。

【「流れ図」とは】

解説で示されている、「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例（流れ図）」（ｐ２１図６参照）は、新たな手続きである「指導すべき課題の整理」を含む、個別の指導計画の作成手順の例です。

「流れ図」を活用することによって、幼児児童生徒の実態の捉え方、指導目標設定に至る考え方を指導担当者間で共有することや、根拠が明らかな指導を行うことが期待できます。自立活動の指導目標・内容を根拠のあるものにするために、「流れ図」の考え方（ｐ２２～２３参照）を知り、参考にすることが有効です。

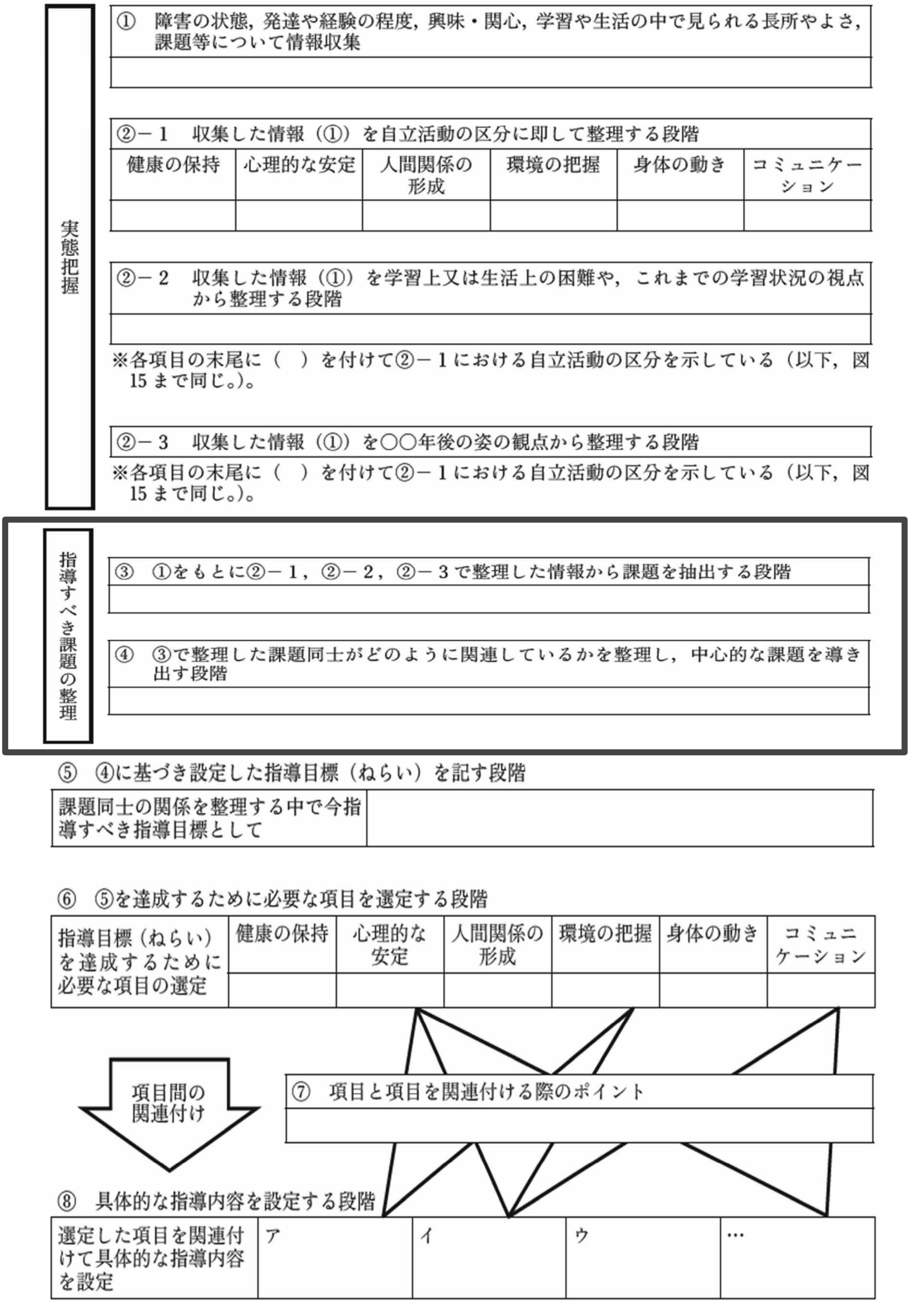


図６：「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例（流れ図）」
※新たに加えられた「指導すべき課題の整理」を、枠で囲んで示しています。

【「流れ図」で用いられている観点や考え方】

実態把握

① 障害の状態，発達や経験の程度，興味・関心，学習や生活の中で見られる長所やよさ，課題等について情報収集

②－１ 収集した情報（①）を自立活動の区分に即して整理する段階

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

②－２ 収集した情報（①）を学習上又は生活上の困難や，これまでの学習状況の視点から整理する段階

※各項目の末尾に（ ）を付けて②－１における自立活動の区分を示している（以下，図15まで同じ。）。

②－３ 収集した情報（①）を○○年後の姿の観点から整理する段階

※各項目の末尾に（ ）を付けて②－１における自立活動の区分を示している（以下，図15まで同じ。）。

＜実態把握＞

① 障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題等について情報収集

・実態把握のために必要な情報を収集する。

・できないことばかりに着目するのではなく、できることにも着目する。

※参照：解説　第７章の２　「（１）幼児児童生徒の実態把握」（実態把握の観点、実態把握の具体的な内容、実態把握の方法）

②－１　収集した情報（①）を自立活動の区分に即して整理する段階

・障害名のみに頼って特定の指導内容に偏ることがないよう、対象となる幼児児童生徒の全体像を捉えて整理する。

※参照：解説　第６章「自立活動の内容」（６区分２７項目の解説）

②－２　収集した情報（①）を学習上又は生活上の困難や、これまでの学習状況の視点から整理する段階

・学習上又は生活上の困難の視点で整理する。

・これまでの学習状況を踏まえ、学習上または生活上の難しさだけでなく、既にできていること、支援があればできることなども記載する。

②－３　収集した情報（①）を○○年後の姿の観点から整理する段階

・①で収集した情報を、幼児児童生徒の生活年齢や学校で学ぶことのできる残りの年数を視野に入れて整理する。

・幼児児童生徒の「○○年後の姿」をイメージしたり、卒業までにどのような力を、どこまで育むとよいのかを想定したりして整理する。

＜指導すべき課題の整理＞

③　①をもとに②－１、②－２、②－３で整理した情報から課題を抽出する段階

・②で整理した情報の中から、指導開始時点で課題となることを抽出する。

④　③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階

・課題同士の関連とは、例えば「原因と結果」や「相互に関連し合っている」などの観点や、発達や指導の順序等が考えられる。

※参照：解説　第７章の２の（２）「ア　指導すべき課題相互の関連の検討」

＜指導目標の設定＞

⑤　④に基づき設定した指導目標を記す段階

・④で導き出した中心的な課題を基に、今指導すべき指導目標を設定する。

・自立活動の指導の効果を高めるため、学年等の長期的な目標とともに、当面の短期的な目標を定める。

※参照：解説　第７章の２の（２）「イ　指導目標（ねらい）の設定と目標設定に必要な項目の選定」

＜具体的な指導内容の設定＞

⑥　⑤を達成するために必要な項目を選定する段階

※参照：解説　第７章の２の（２）「イ　指導目標（ねらい）の設定と目標設定に必要な項目の選定」

⑦　項目と項目を関連付ける際のポイント

・関連付けの根拠を示す。「⑤の指導目標を達成するためには、こんな力を育てる必要がある。したがって、区分○○○の項目○○と区分□□□の項目□□とを関連付けて指導する。」等、④で行った課題同士の関連や整理を振り返りながら検討する。

⑧　具体的な指導内容を設定する段階

・⑥で選定した項目同士を関連付けて、具体的な指導内容を設定する。

※参照：解説　第７章の２の「（３）具体的な指導内容の設定」

解説ｐ120～121

３　自立活動の指導の展開

（１）指導方法の創意工夫

自立活動の指導の効果を高めるためには、個々の実態に応じた具体的な指導方法を工夫し、意欲的な活動を促すことが必要です。

小学部・中学部学習指導要領（第７章第３）

３　個々の児童又は生徒の実態に応じた具体的な指導方法を創意工夫し、意欲的な活動を促すようにするものとする。

自立活動の指導の効果を高めるためには、児童生徒が積極的な態度で意欲的な学習活動を展開することが必要です。このためには、個々の児童生徒の実態に応じた、具体的な方法を創意工夫することが求められます。

【児童生徒一人一人の実態に応じた指導方法】

児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等は多様である。よって、特定の方法を全ての児童生徒に機械的に当てはめるのではなく、個々の児童生徒の実態に適合した方法を創意工夫すること。

【意欲的な活動を促す指導方法】

児童生徒が興味や関心をもって主体的に取り組み、成就感を味わうことのできるような指導方法を工夫すること。教師からの一方的な働き掛けに終始する方法や画一的な方法にならないよう留意すること。

児童生徒自身が、指導目標に照らした課題に自ら取り組むことができるように、指導の課題や段階を児童生徒の実態に即して細分化し、それに応じた方法の適用を工夫すること。

※自立活動の指導に適用できると思われる方法又は方法の裏付けとなっている理論が幾つか想定されますが、それらの理論・方法は、自立活動の指導という観点から成り立っているわけではありません。よって、それをそのまま自立活動の指導に適用しようとすると、無理を生じることとなります。これらの点を十分に踏まえた上で、特定の指導に有効であると思われる方法がある場合には、それを自立活動の指導に適合するように工夫して応用することが大切です。

解説ｐ123〜125

3　自立活動の指導の展開

（２）自立活動の指導体制

学校として、自立活動の指導を全教師の協力の下に実施する体制や、外部の専門家との連携協力体制を整えることが必要です。

小学部・中学部学習指導要領（第７章第３）

５　自立活動の指導は、専門的な知識や技能を有する教師を中心として、全教師の協力の下に効果的に行われるようにするものとする。

【教師の協力体制】

- 専門的な知識や技能を有する教師を中心として全教師の協力の下に、一人一人の幼児児童生徒の個別の指導計画を作成し、実際の指導に当たること。
- 複数の障害種別に対応する特別支援学校では、それぞれの障害別に十分な対応ができるよう、教師の専門性の向上を図るための研修等を充実させること。その際、他の特別支援学校との連携協力を図ること。

小学部・中学部学習指導要領（第７章第３）

６　児童又は生徒の障害の状態等により、必要に応じて、専門の医師及びその他の専門家の指導・助言を求めるなどして、適切な指導ができるようにするものとする。

【専門の医師等との連携協力】

- 専門の医師をはじめ、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、心理学や教育学の専門家等外部の各分野の専門家との連携協力をし、必要に応じて、指導・助言を求めたり、連絡を密にしたりすること。
- 連携に当たっては、自立活動の指導を外部の専門家にゆだねてしまうことのないよう、外部の専門家の助言や知見などを指導に生かすという考え方で取り組むこと。

３　自立活動の指導の展開

（３）個別の支援計画※の活用

※秋田県では、「個別の教育支援計画」を、関係部局・機関との連携の強化と協働を推進する観点から「個別の支援計画」と表記しています。

自立活動の指導の成果が進学先等でも生かされるように、個別の支援計画等を活用した関係機関等との連携が重要です。

小学部・中学部学習指導要領（第７章第３）

７　自立活動の指導の成果が進学先等でも生かされるように、個別の教育支援計画等を活用して関係機関等との連携を図るものとする。

新学習指導要領では、自立活動の指導の成果が就学先や進学先等でも生かされるように、個別の支援計画等を活用して連携を図ることが新たに示されました。

【就学先や進学先における活用】

・就学先や進学先では、新たな学習上又は生活上の困難が生じたり、困難さの状況が変化したりする場合がある。そのため、個別の支援計画等により、本人、保護者を含め、専門の医師及びその他の専門家等との連携協力を図り、当該幼児児童生徒についての教育的ニーズや長期的展望に立った指導や支援の方針や方向性等を整理し、学校が自立活動の指導計画の作成に活用していくこと。

【卒業後の進学先や就労先等における活用】

・自立活動の指導の成果が進路先での支援に生かされるように、個別の支援計画等を活用して情報を引き継ぐこと。
・進路先との連携に当たっては、個人情報保護に十分留意し、連携の意図や引継ぐ内容等について保護者の理解を得ること。

※各学校には、個別の支援計画と、個別の指導計画との関係を整理することが求められます。自立活動の指導目標として、卒業後に必要とされる力をそのまま当てはめている場合は、卒業後に必要とされる力を分析し、自立活動の指導すべき課題としての扱い方を検討することが必要です。

Ⅱ　実践編

実践編では、平成３０年度・令和元年度「授業改善プロジェクト」の授業提示校の実践と、実践から整理した「自立活動の指導の改善・充実に当たっての要点」を紹介します。

１　平成３０年度・令和元年度「授業改善プロジェクト」の概要

１　目的

（１）自立活動の指導の基礎・基本の理解と実践の充実を図る。

（２）自立活動の指導の基礎・基本に基づく実践の推進において、中心的役割を担う人材を養成する。

２　実施期間　　平成３０年度～令和元年度（２年間）

３　担当者　　　各校推薦の教諭、特別支援教育課担当指導主事

４　活動内容

（１）平成３０年度

１年次の研修では、自立活動の基礎・基本と個別の指導計画の作成に焦点を当てた研修を行った。授業研究では、自立活動の時間における指導を取り上げた。

①　基礎研修会Ⅰ（６／１３　県庁第二庁舎）

・講義・演習「自立活動の基礎・基本～新学習指導要領の理解～」

・協議「自立活動の指導の課題とその改善策について」

②　基礎研修会Ⅱ（８／７　県庁第二庁舎）

・実践報告「自立活動の指導の実際」
（栗田支援学校、ゆり支援学校道川分教室、特別支援教育課）

・協議「『実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ図』の作成について」

・協議「『流れ図』の作成に当たっての要点について」

③　授業検討会（１１／２　A校、１１／７　B校）

・授業研究会で提示する授業の学習指導案、対象児童生徒の個別の指導計画等の検討

④　授業研究会（１１／２１　A校、１１／２７　B校）

・授業参観

Ａ校：小学部　自立活動
「きいて・みて・さわって・のばして～自分の気持ちをつたえよう～」

Ｂ校：中学部　自立活動
「板書の書き取りのプロになろう」

・協議「自立活動の時間における指導の授業づくりについて」

・協議「自立活動の個別の指導計画の作成に当たっての要点について」

⑤　１年次のまとめ

・「平成３０年度特別支援学校授業改善プロジェクト実践記録～自立活動～」の発行

（２）令和元年度

２年次の研修では、個別の指導計画における自立活動の指導目標・内容等の改善に焦点を当てた研修を行った。授業研究では、各教科等の指導における自立活動の指導を取り上げた。

① 基礎研修会Ⅰ（６／１３　県庁第二庁舎）

・講義・演習「自立活動の個別の指導計画の作成に当たっての要点」

・講義「学校の教育活動全体を通じて行う自立活動の指導」

・協議「各教科等の指導における自立活動の指導について」

② 基礎研修会Ⅱ（８／７　県庁第二庁舎）

・協議「個別の指導計画における自立活動の目標、内容等の改善について」

・情報提供及び協議「知的障害特別支援学校における自立活動の指導」
（情報提供：比内支援学校かづの校）

・事例提供及び協議「各教科等の指導における自立活動の指導について」
（事例提供：支援学校天王みどり学園）

・演習「各教科等の指導における自立活動の指導について」

③ 授業検討会（１０／２１　Ｃ校）

・授業研究会で提示する授業の学習指導案、対象児童生徒の個別の指導計画等の検討

④ 授業研研究会（１１／２８　Ｃ校）

・授業参観
Ｃ校：中学部　作業学習（エコグループ）
「『油スイトールン♪』の製作〜いとく販売会に向けて〜」

・協議「各教科等の指導における自立活動の指導の要点について」

・協議「自立活動の指導目標や指導内容等の改善に向けて」

⑤ ２年次のまとめ

・「特別支援学校　自立活動ガイド」の発行

２　自立活動の指導の改善の実際～授業提示校の実践～

平成３０年度・令和元年度の「授業改善プロジェクト」では、自立活動の指導目標・内容を適切なものにするために、個別の指導計画の作成、改善・充実に重点を置いて研修を進めました。

授業研究会の授業提示校３校は、「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ図」の考え方を用いて中心的な課題を導き出したことによって、自立活動の指導目標・内容を修正し、個別の指導計画を改善しました。

また、改善した個別の指導計画に基づいて、自立活動の時間における指導、各教科等における自立活動の指導の授業改善に取り組みました。

次ページからの事例１～３で、各校における個別の指導計画の改善のポイント、授業づくりのポイントを紹介します。

なお、提示授業の学習指導案、対象児童生徒の個別の指導計画等は、資料編に掲載しています。

（１）事例１

① 個別の指導計画の改善

対象児童生徒（障害の種類・状態等）	小学部（知的障害、脳性まひ）
指導すべき課題の整理（中心的な課題の導き出し）	
人との関わりが好きで、身近な人に何かをしてもらうことを期待して待ち、してもらったことに対して笑顔や声で応えるという、やり取りの経験をこれまで多く積んできた。そのことによって、自分が応えることで、相手がまた自分の好きなことをしてくれるということが分かってきている。一方で、関わりにおいて受け身になりがちで、自分から相手に働き掛けることは少なかった。自分から周りに働き掛けていくためには、慣れた好きな活動の中で「もっとやりたい」という気持ちを声や視線で伝え、相手が受け止めて返すというやり取りの経験を繰り返すこと、相手に伝わる本人なりの要求行動を確立していくこと、好きな物を自分で選ぶことが必要である。 また、相手に分かる要求行動を広げるためにも、身体の緊張をゆるめて、欲しい物を注視したり、現在できる手の動きを活用して目的のある手の動きを増やす必要がある。そのことで、今後、本人が伝えられる人や場所なども広がってくると考える。	
自立活動の指導目標	
・身近な人とのやり取りの中で、発声や視線、手の動きなどの自分にできる方法で、自分から気持ち（要求）を相手に伝える。 ・身体の緊張をゆるめ、手や頭の意図的な動きを増やす。	
具体的な指導内容	
・好きな活動を「またやってほしい」ことを、視線や表情で教師に伝える。 ・自分の欲しい玩具等を選び、手を伸ばして握り、自分の身体の近くに持ってくる。 ・体操やマッサージなどで､身体の力を抜いたり、頭部を持ち上げたりする。	

【個別の指導計画の改善のポイント】

・「好きなこと」や「できていること」､「できるようになってきたこと」についての情報を収集した。

・「困難なこと（自分から対象物に手を伸ばすことが難しい)」の背景を整理することによって、解決のために必要な指導内容を「身体の動き」の区分にとどまることなく検討した。

・「好きなこと」であり､「できるようになってきたこと」である、人とのやり取りを現段階での中心課題とし、その中で育てたい要求表現の一つとして、手の意図的な動きを位置付けることとした。

②　授業づくり（自立活動の時間における指導）

題材名	自立活動 「きいて・みて・さわって・のばして～自分の気持ちをつたえよう～」
題材目標	・身近な人とのやり取りの中で、自分が好きなものを伝えるために、視線や声で伝えたり、手を伸ばしてつかもうとしたり、握り続けたりする。 ・身体の緊張をゆるめたり、ウォーカーに乗った状態で頭部を上げたりする。
主な学習活動	ふれあい体操、好きな楽器の選択、玩具の保持・操作

授業づくりのポイント

- 本人の主体的な活動を引き出し、「できるようになってきたこと」の確実な習得に結び付けるため、「好きなこと」、「できるようになってきたこと」を学習活動の中心に据えた。
- 児童が「～したい」という気持ちになることができるように、興味・関心をもてる教材を準備するとともに、自発的な動きを引き出すための提示の方法や位置を工夫した。
- 身近な担任とのやり取りを確立することができるように、児童の視線や声、表情、手の動き等の十分な観察や、児童からの発信に対する受け止めや応答を丁寧に行った。
- 「時間における指導」で取り上げたやり取りを実生活で定着させるため、他の学習における自立活動の指導内容の扱いを明確にした。

配付版には写真を掲載しています。

〔ふれあい体操〕
気持ちの発信と受け止めを重視した時間

〔楽器遊び〕
自分の手の動きで好きな楽器を鳴らす活動

（２）事例２

①　個別の指導計画の改善

対象児童生徒（障害の種類・状態等）	中学部（弱視）
指導すべき課題の整理（中心的な課題の導き出し）	
授業では、積極的に単眼鏡を活用しているが、板書書写に時間がかかったり、漢字の書き取りが不正確だったりすることが多い。本生徒もこのことに課題意識をもっているが、改善方法を見いだせずにいる。また、外出したい気持ちはあるが経験が少なく、公共施設や建物の構造、交通機関の利用の仕方を理解していないため、積極的に外出するには至っていない。そこで、小３まで実施していた弱視レンズ訓練プログラムを再開し、単眼鏡の効果的な使い方を習得することで、各教科等の授業における活用状況の改善を図るとともに、校外での活用を促す。中学部卒業後の進路として、高等学校への進学も視野に入れていることから、通学や学習への適応として、この課題を早期に解決することが必要である。 視覚障害のない人と自分の見え方の違いにも気付き始めている。見えにくさによって、物を探したり、取り出したりすることが不得手であることも自覚しているが、状況の改善には至っていない。整理・整頓や物の配置の工夫などを通して、自分で学習や生活しやすい環境を整備する力を育むこと、併せて、漢字の読み書きなど、見えにくさに起因した苦手な学習を、自分に合った方法で習得する力を育む必要がある。	
自立活動の指導目標	
・単眼鏡を用いてスムーズに板書を読み取ったり、書き取ったりする。 ・自分の見えにくさを補う学習方法や環境整備のよさが分かり、実行する。	
具体的な指導内容	
・単眼鏡を動かして、見ようとするものを継時的に認知し全体像を捉える。 ・単眼鏡の使用技術を、各教科等の学習場面で積極的に取り入れる。 ・自分にとって効果的な整理・整頓や漢字学習の方法を考え、実行する。	

【個別の指導計画の改善のポイント】

・自己理解の状況や本人のニーズ、単眼鏡に関するこれまでの学習状況について、情報を収集したことにより、「単眼鏡の効果的な使い方」が、生徒本人にとって必要感をもてる課題であることを確認した。
・本人の進路希望状況を踏まえて、課題の優先順位を検討した。
・三つの課題（単眼鏡の効果的な活用、整理・整頓、漢字学習の方法）を解決するために、「自分にとってよい方法を見いだす」という視点が、共通して必要であることを導き出した。

②　授業づくり（自立活動の時間における指導）

題材名	自立活動「板書の書き取りのプロになろう」
題材目標	・単眼鏡を適切に使用し、早く正確に板書を書写する。 ・漢字の誤写や誤読に気付いたり、修正したりすることを通して、自分に合う学習方法を身に付ける。 ・身に付けた単眼鏡の技能の必要性を理解し、学校生活で生かそうとする。
主な学習活動	単眼鏡による板書書写、自己採点、自己評価
授業づくりのポイント	
・「弱視レンズ訓練プログラム」という既成のプログラムを活用した学習であるが、意欲をもって活動できるよう、生徒の興味・関心に応じて板書書写用の文章を準備した。 ・学習に対する生徒の目的意識が明確になるよう、自立活動の時間に習得した単眼鏡の使用技術を、各教科の授業で活用するという視点で、授業全体を構成した。 ・「自分にとってよい方法を見いだす」という姿勢が身に付くように、自己採点や自己評価の活動において、自らの取組を評価・分析し、改善方法を考える時間を設けた。 ・他の授業における単眼鏡の使用状況が把握できるように、教科担任との情報交換を密に行い、共通理解に基づいて一貫した指導を行うことを確認した。	

配付版には写真を掲載しています。

〔単眼鏡を使用した板書書写〕
教科学習と同じ環境（書見台等）で実施

〔自己採点の実施〕
自分の間違いの傾向とその対策を検討

（３）事例３

①　個別の指導計画の改善

対象児童生徒（障害の種類・状態等）	中学部（精神運動発達遅滞）
指導すべき課題の整理（中心的な課題の導き出し）	
人との関わりが好きであるが、歌ってほしい、言葉遊びをしてほしいという気持ちが強く、その要求が通らない状況で気持ちを切り替えることが難しい。身近な教師とのやり取りを楽しみながら活動に取り組むが、活動そのものの理解が不十分なため、意欲をもって取り組んだり、達成感を得たりした経験が少ない。また、個別に言葉掛けや支援を受けて活動に向かうことが多く、自分自身で判断したり切り替えたりすることが少なかったため、受け身になってしまっている。 そこで、意欲をもって自分から行動することができるようになるために、自分で行うことが分かって活動に取り組み、自分でできたという達成感を積み重ねることが必要だと考えた。自分で行うことが分かるようになるために、情報を受け止めやすい環境で教師と丁寧にやり取りすることを重視し、その中で言葉の理解や意思表示方法の習得を促していく。	
自立活動の指導目標	
・教師とやり取りしながら、自分から活動に取り掛かったり、気持ちを切り替えたりして活動に取り組む。	
具体的な指導内容	
・情報を受け止めやすい落ち着いた環境で、必要なことに意識を向けて課題に取り組み、できたことに対する達成感をもつ。 ・教師とのやり取りを通して、理解できる言葉を増やしたり、身振りやカードの選択等で意思を表出したりする。 ・場所や人の名前、手に持っている物を手掛かりにして、目的の位置へ移動する。	

【個別の指導計画の改善のポイント】

・困難として挙げられたことの背景要因を検討し、指導の改善の視点を見いだした（「意欲をもって活動に取り組んだり、達成感を得たりした経験が少ない」という実態の背景に、「活動そのものの理解が不十分」という要因がある等）。
・長期的な目標「意欲をもって自分から行動することができるようになる」の達成のために、現段階で中心となる課題「自分で行うことが分かって活動に取り組むこと」と、そのために必要な手立て「情報を受け止めやすい環境で教師と丁寧にやり取りすること」との関係を整理した。
・理解できることを増やすために、教師とのやり取りの中で指導すること（言葉の理解、意思表示方法等）を、具体的な指導内容として明確にした。

②　授業づくり（各教科等における自立活動の指導）

<table>
<tr><td>題材名</td><td>作業学習「『油スイトールン♪』の製作～いとく販売会に向けて～」</td></tr>
<tr><td colspan="2">対象生徒の作業学習の目標</td></tr>
<tr><td colspan="2">・活動の流れに沿って、道具を手掛かりにして行うことが分かり、自分から取り掛かる。
・自分から報告の場所へ向かい、発声やできたものを手渡すことによって、報告を行う。</td></tr>
<tr><td>主な学習活動</td><td>道具の準備・片付け、綿づくり（パルプをミキサーにかける）、報告</td></tr>
<tr><td colspan="2">授業づくりのポイント</td></tr>
<tr><td colspan="2">・教師とのやり取りの分かりやすさ、活動への集中のしやすさという視点で、机の配置等を考慮し、集団の中での学習環境を整えた。
・自立活動の時間における学習で「できていること」、「できつつあること」を踏まえて、工程や手順を検討した。
・言葉の理解を促すために、繰り返す動きに言葉や身振りを添えて伝えるように配慮した。
・活動の流れや内容を理解する上で、手掛かりにできる教材を準備し、提示の仕方は生徒の様子に応じて変えた。</td></tr>
</table>

配付版には写真を掲載しています。

〔活動のしやすさを考慮した学習環境〕
集団と個のバランスを考えた机の配置

〔活動の手掛かりになる教材の準備〕
写真と容器を手掛かりとした移動場面

３　自立活動の指導の改善・充実に当たっての要点

「授業改善プロジェクト」の実践から、自立活動の指導の改善・充実に当たっての要点を、次のように整理しました。各校において、自立活動の指導の取組状況を確認する際に活用してください。

①　実態把握

□「困難なこと」だけではなく、「好きなこと」や「興味・関心があること」、「障害の理解に関すること」等も把握しているか。

□自立活動の内容の６区分を基に、幼児児童生徒の全体像を捉えているか。

□これまでの学習状況についての情報を収集、整理しているか。

□「困難なこと」が主障害によるものか、その他の要因によるものであるかを分析できているか。

□数年後の姿をイメージし、数年後までに育みたい力を想定しているか。

②　指導すべき課題

□課題となっていることの背景要因を、幅広い視点から検討しているか。

□課題同士の関連を検討し、複数の課題に共通する背景要因や、他の課題の原因となっている課題等を見いだしているか。

□数年後の姿に向けて必要なことを整理し、段階的に指導するという視点で、現時点での中心的な課題を検討しているか。

□幼児児童生徒が主体的に取り組むことができるよう、本人のニーズや「できるようになってきたこと」に着目して、課題検討を行っているか。

③　指導目標

□中心的な課題と指導目標が整合しているか。

□長期的な視点を踏まえ、今指導すべき目標を設定しているか。

④　指導内容・方法

□複数の要因が関わっている課題に対して、自立活動の内容から必要な項目を選定し、項目同士を関連付けた指導内容を設定しているか。

□自立活動の時間における指導と各教科等の指導との相互関連を図っているか。

□各教科等の目標を達成する上で、児童生徒に学習における困難がある場合は、それを補う手立てを準備し、学習の基盤を整えているか。

□幼児児童生徒が主体的に環境や状況を整える態度を養うことができるように、個々の学習状況に合わせて指導内容や指導方法を工夫しているか。

□合理的配慮と、自立活動として指導する内容を整理しているか。

⑤　評価

□実際の指導を通して、個別の指導計画の指導目標や内容を評価し、修正や改善を行っているか。

□教師間の協力の下に、複数の目で自立活動の指導を検討する体制があるか。

Ⅲ　資料編

資料１　平成３０年度・令和元年度「授業改善プロジェクト」関係資料

１　平成３０年度・令和元年度「授業改善プロジェクト」担当者名簿
２　「授業改善プロジェクト」授業研究会関係資料
３　自立活動の指導　各担当者の実践記録

資料２　２０１９年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
「自立活動の指導の改善」に係る研究協力校　研究関係資料

１　県立視覚支援学校　研究関係資料
「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ（流れ図）記入の仕方」
２　県立支援学校天王みどり学園　研究関係資料
「『子ども理解シート』記入の仕方」

各研究協力校では、自立活動の指導の改善を目指して、個々の実態に即した的確な個別の指導計画の作成と実践に取り組みました。資料編では、２校の研究関係資料を、個別の指導計画の改善を図るための取組の例として紹介します。

各特別支援学校においても、個別の指導計画の作成手順や考え方を改めて確認し、検討することが求められます。

〔資料Ⅰ－Ⅰ〕平成３０年度・令和元年度特別支援学校「授業改善プロジェクト」担当者名簿

平成３０年度

No.	学校名	職名	氏名	備考
1	視覚支援学校	教諭	内藤聡子	
2	聴覚支援学校	教諭	照井純子	
3	秋田きらり支援学校	教諭	永井純子	～９月
		教諭	佐藤 篤	１０月～
4	比内支援学校	教諭	菅 一聡	
5	比内支援学校かづの校	教諭	鈴木 陽	
6	比内支援学校たかのす校	教諭	畠山智子	
7	能代支援学校	教諭	藤原真美	
8	支援学校天王みどり学園	教諭	齊藤舞子	
9	栗田支援学校	教諭	大友 信	
10	ゆり支援学校	教諭	下村志穂	
11	ゆり支援学校道川分教室	教諭	菊池知恵子	
12	大曲支援学校	教諭	内藤稚子	
13	大曲支援学校せんぼく校	教諭	田中拓弥	
14	横手支援学校	教諭	赤川由美	
15	稲川支援学校	教諭	松井祐美子	
16	附属特別支援学校	教諭	工藤麻恵	

令和元年度

No.	学校名	職名	氏名	備考
1	視覚支援学校	教諭	金 葉月	
2	視覚支援学校	教諭	内藤聡子	
3	聴覚支援学校	教諭	照井純子	
4	秋田きらり支援学校	教諭	佐藤 篤	
5	比内支援学校	教諭	菅 一聡	
6	比内支援学校かづの校	教諭	鈴木 陽	
7	比内支援学校たかのす校	教諭	畠山智子	
8	能代支援学校	教諭	齊藤舞子	
9	支援学校天王みどり学園	教諭	栗田彩子	
10	支援学校天王みどり学園	教諭	永井英男	
11	栗田支援学校	教諭	藤原真美	
12	栗田支援学校	教諭	大友 信	
13	ゆり支援学校	教諭	下村志穂	
14	ゆり支援学校道川分教室	教諭	菊池知恵子	～７月
15	大曲支援学校	教諭	内藤稚子	
16	大曲支援学校せんぼく校	教諭	田中拓弥	
17	横手支援学校	教諭	藤田亜貴子	
18	稲川支援学校	教諭	松井祐美子	
19	附属特別支援学校	教諭	鈴木暢子	

特別支援教育課　指導主事　中村 素子
　　　　　　　　指導主事　佐々木朋広

〔資料Ⅰ－２①〕　Ａ校「授業改善プロジェクト」授業研究会関係資料

Ａ校　小学部〇年　自立活動　学習指導案

日　時　平成３０年１１月２１日（水）
３校時　１０：４５～１１：３０
場　所　小学部〇年教室

１　題材名　きいて・みて・さわって・のばして　～自分の気持ちをつたえよう～

２　題材目標　※【　】内は、自立活動の内容の６区分の頭文字を記入。以下、同様。

（１）身近な人とのやり取りの中で、自分が好きな物を伝えるために、視線や声で伝えたり、手を伸ばしてつかもうとしたり、握り続けたりする。【心・人・環・身・コ】

（２）身体の緊張をゆるめたり、うつ伏せやウォーカーに乗った状態で頭部を上げたりする。【健・環・身】

３　児童と題材

（１）児童について

本児童は、小学部〇年で脳性まひである。昨年度より、医療的ケア（胃ろうによる水分補給と経管栄養）を受けている。排痰が難しいため、咳き込みがひどく呼吸が苦しそうな時は、活動を中止して教師と一緒に呼吸を整えたり、活動量を調整したりするなどの対応を行っている。身体の緊張の強さや姿勢保持の難しさがあり、習得している基本動作は少ないが、周りからの働き掛けに応じて自分で首を上げようとする動きが出てきている。

人との関わりが好きで、教師や身近な友達の動きや話し声などに反応をよく示し、歌や手遊び、マッサージなどの活動では、笑顔や声を出して嬉しい気持ちを表すことができる。名前を呼ばれると、口を動かしたり、声を出したり、手を動かしたりして応える。音がする方向に視線を向けたり、身近な人の動きを追視したりすることも増えてきている。音の出る玩具や絵本なども好きでよく見たり聞いたりするが、自分から手を伸ばして触ろうとすることは少ない。しかし、慣れている体操や玩具、絵本に対しては、期待する表情が見られ、視線や声で訴えるようになってきている。

物への関心も育ちつつあり、仰向けで、手をバタバタさせ自分の周りにある物を探る動きが見られるようになってきた。普段の学習の中で使用している輪を提示すると、握って引っ張ろうとすることから、繰り返し行うことで、自分で操作すると何かが起こるという関係性が分かるようになっていると考える。

（２）題材について

本題材は、人との関わりが好きな児童の良さを生かして、教師との個別のやり取りを大切にする中で、児童の気持ちや要求を引き出し教師が受け止める経験を重ね、児童の要求行動に結び付けていくことを目指している。視線や声、手の動きなどで、自分の気持ちが周りの人に伝わることが分かり、相手に伝わった喜びを実感することによって、自分から気持ちを表出することが増えるのではないかと考えた。

自分が欲しい物を視線や声で相手に伝えたり、手でつかんだりするためには、①児童の「やってみたい」という意欲を高め、児童の発信を要求行動として意味付けていくことや、②対象物に向かうための安定した姿勢の保持や緊張をゆるめることが必要になってくると考えられる。本題材では、これら２つの側面から児童の目指す姿を引き出せるように学習内容を設定した。「のばしてにぎってみよう（好きな物を選ぶ、手を伸ばして握る等）」と「からだをうごかそう（緊張をゆるめる体操やマッサージ、うつ伏せやウォーカーなどでの様々な姿勢の経験等）」を組み合わせて行う。

児童が伝えたいという気持ちを高め、その方法を身に付けることが、物に対する興味・関心の広がりや、日常生活全般において安心して関わることができる人や場所、活動の幅の広がりにつながると考え、本題材を設定した。

（３）指導に当たって
・緊張の状態や、痰絡みなど、体調に十分留意しながら学習を進め、体調に応じて活動量を調整する。
・安心して取り組むために、児童が慣れ親しんだ運動や玩具、好きな歌などを継続して扱い、新しい素材や音、動きなどは少しずつ取り入れるようにする。
・児童の相手に伝わったという気持ちを高められるように、児童の表情や声、視線などから気持ちを受け止めたり、称賛する言葉を精選したりする。また、児童の反応を読み取って、言葉に置き換えて児童に伝える。
・児童の発信を要求行動として明確なものにするために、児童のできる方法を使ったやり取りを繰り返す。
・自分から手を伸ばしたり、つかもうとしたりできるように、対象物を提示する位置を調整したり、手を身体の前方に向ける動きを支えたりする。
・児童が自分の身体を意識できるように、動かす部位の名称を話しながら手を当て、ゆっくり動かす。

４　指導計画（時間における自立活動として、年間を通じて実施している内容）

活動計画		時数	具体的な活動内容
医療的ケアの時間	○元気なからだ （ゴックン、いただきます）	122	・安定した姿勢でリラックスしながら、水分や栄養を摂取する。
	○絵本をよもう		・教師の読み聞かせや手遊び歌を聞いて、自分から声を出して応えたり、手を伸ばしたりする。 ・様々な手遊び歌や絵本の中から、自分の好きな物を、声や表情等で伝える。
きいて・みて・さわって・のばして　～自分の気持ちをつたえよう～	○のばしてにぎってみよう	35 （本時 12／35）	・自分が好きな物を、視線や声、手の動きで伝える。 ・音の出る玩具や楽器などを、引っ張ったり鳴らしたりして遊ぶ。 ・数㎝の輪を数分間握り続ける。 ・提示された様々な素材に自分から手を伸ばし、感触を楽しむ。
	○からだをうごかそう		・緊張をゆるめるマッサージや体操をする。 ・うつ伏せの姿勢で、数分間肘を立てて、頭部を持ち上げる。 ・ウォーカーに乗って、教師の支持を受けて、足を前に出す。

※医療的ケアの時間は、毎日２校時と４校時に設定しており、その際は、「元気なからだ」と「絵本を読もう」を実施している。
※本題材「きいて・みて・さわって・のばして　～自分の気持ちをつたえよう～」は、週１回４５分間の設定の中で、太線で囲んだ活動内容を組み合わせて実施している。

５　本時の計画

（１）目標

・自分の好きな楽器を視線や声、手の動きなどで選んだり、再度やりたいことを伝えたりする。【心・人・環・身・コ】

・座位保持の状態で、提示した指人形や玩具に手を伸ばし、握って自分の身体の近くまで引っ張ったり、遊んだりする。【環・身・コ】

（２）展開

時間(分)	学習活動	指導上の留意点及び手立て	準備物
5	1　あいさつをする。 活動内容を知る。	・学習の始まりが意識できるように、名前を呼んでから児童の口の動きに合わせて、ゆっくり「はじめます」と話したり、顔の前に手を出してタッチするのを待ったりする。 ・見通しをもって安心して学習に取り組めるように、本時で使う玩具や写真などを提示する。	
１５	2　ふれあい体操をする。	・自分の身体の動かす部位を意識できるように、部位の名称を伝えてから身体に触れる。 ・自分の気持ちが伝わったという気持ちを高められるように、表情や声などをよく観察し、反応が出るまで待ったり、反応が出たらすぐに応えたりして、やり取りを大切にしながら進める。 ・手の緊張をゆるめたり、可動域を広げたりするために、腕を上げるなど補助的な運動をする。	CD ラジカセ
１０	3　自分の好きな楽器を選んで鳴らしたり、好きな歌に合わせて声を出したりする。	・期待感を高めて遊べるように、ボックスに楽器を入れておき、揺らして音を出したり、「なにかな」などと話したりする。 ・自分の好きな楽器を選べるように、提示する位置を調整したり、視線や声などの反応が出るまで待ったりする。 ・「(好きな歌を) もう１度聞きたい」という気持ちを声や手の動きで伝えられるように、１曲終わるごとに「もう１回聞く？」と尋ね、何回か繰り返す。	ボックス マラカス ウィンドウチャイム 音の出る絵本
１０	4　指人形を引っ張ったり、玩具に触れて音を出したりして遊ぶ。	・欲しい物を見つめて手を伸ばして取れるように、児童の好きなすもうの指人形を提示し、「どすこい」「のこった、のこった」と話しながら指を動かす。 ・満足感を高められるように、表情や口の動きを見ながら「まる」「じょうず」などと伝え、がんばりを称賛したり、タッチをしたりする。	指人形 玩具
5	5　あいさつをする。	・楽しかった気持ちを共有できるように、使った玩具や指人形を提示して、好きな物を声や視線で伝える時間を確保する。 ・終わりが意識できるように、児童の口の動きに合わせて「おわります」と話す。	

（３）評価

【児童】・自分の好きな楽器を選んだり、自分の気持ちを視線や声、手の動きなどで伝えたりしたか。
・対象物（楽器や玩具）に、自分から手を伸ばして、自分の身体の近くに引き寄せたり、遊んだりしていたか。

【教師】・児童が、興味・関心をもって見たり握ったりしたい教材の準備や提示の仕方ができたか。
・視線や声、表情、手の動きなど児童の気持ちの表れを十分に受け止め、気持ちに添って支援ができたか。

A校「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ図」

学部・学年	小学部
障害の種類・程度や状態等	知的障害、脳性まひ
指導の概要	自分から相手に気持ちや要求を伝え、相手に伝わる要求行動を広げていくための指導

実態把握

① 障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題等について情報収集

ア　医療的ケア（胃ろうによる水分補給と経管栄養）を受けている。
イ　排痰が難しく、「ゼロゼロ」という呼吸音になることが多い。吸引は実施しておらず、咳き込んで呼吸が苦しそうな時は、学習活動を途中で止め教師と一緒に呼吸を整えたり、様子を見ながら学習内容を変更したりする。
ウ　ＰＴとＯＴのリハビリを受けているが、回数が少なく、不定期である。
エ　自分の側で歌や手遊び、絵本の読み聞かせをしてくれるのを見たり聞いたりすることが好きで、笑顔や声を出して喜ぶ。繰り返し行っているものは、視線で、再度やってくれるように訴えることがある。
オ　音がする方向へ首を回し視線を向ける。音がどこから聞こえるか、身体をよじりながら確かめようとする。
カ　身近な教師や友達の動きを追視する。自分の視界から見えなくなるまで、追視したり見続けたりすることが増えた。
キ　初めての物に対しては一瞬見つめたり、逆に視線を外したりする。
ク　音の出る玩具、揺れている棒状の物、紐などが好き。物より、操作している手や、声を聞いて喜ぶことが多い。
ケ　時々首が右前に倒れることがあるが、教師が左側で手遊び歌や手を叩きながら言葉を掛けると、自分で首を上げようとする動きが見られる。
コ　学習活動の中で繰り返し使用している特定の輪を提示すると、引っ張れば何かが起きるという仕組みが分かり、輪を握って引っ張ることができる。
サ　提示された玩具や絵本などを見たり聞いたりして笑顔になったり声を出したりするが、自分から手を伸ばして触ろうとしたり、自分で遊ぼうとしたりすることは少ない。
シ　横になった状態では、自分の周りにある物を探るように手を伸ばす。
ス　顔の前に手を出すと、タッチしようとする。
セ　体調が安定しない時や、初めての場所、大きい音が聞こえる場所、色々な音が混ざって騒々しい場所などでは、身体の緊張が強くなり、表情もこわばったり、眉間にしわを寄せたりする。特に、左足の緊張が強く突っ張りやすい。
ソ　うつ伏せにすると、頭を上げたり足を上げたりしようとする。
タ　名前を呼ばれると、口を動かしたり、声を出したり、手を動かしたりして応える。
チ　座位保持装置で座位の際は、左側の方が視線を向けやすい。
ツ　左手の方が、握る時間が長く引っ張る力が強い。右手は、たたいたり物に指を引っかけたりしようとする動きが多い。
テ　静かな所では、「いないいないばぁ」を楽しんだり、隠れた物がまた出てきて喜んだりするようになってきている。

②－１　収集した情報(①)を自立活動の区分に即して整理する段階

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
ア　医療的ケアを受けている。 イ　排痰が難しく、呼吸が苦しそうな時は、呼吸を整える働き掛けや様子に合わせた学習活動の変更・中止を行っている。 ウ　ＰＴとＯＴのリハビリを受けているが、回数が少なく、不定期である。	エ　自分の側で歌や手遊び、絵本の読み聞かせをしてくれるのを見たり聞いたりすることが好きである。 サ　提示された玩具や絵本などを見たり聞いたりして笑顔になったり声を出したりする。 セ　体調が安定しない時や、苦手な場所では、身体の緊張が強くなり、表情もこわばったり、眉間にしわを寄せたりする。	カ　身近な教師や友達の動きを追視する。自分の視界から見えなくなるまで、追視したり見続けたりすることが増えた。 ク　物より、操作している手の動きや、声を聞いて喜ぶことが多い。 タ　名前を呼ばれると、口を動かしたり、声を出したり、手を動かしたりして応える。 テ　「いないいないばぁ」を喜ぶ。	オ　音がする方向へ視線を向ける。 カ　身近な人が視界から見えなくなるまで、追視したり見続けたりする。 キ　初めての物を一瞬見つめたり、逆に視線を外したりする。 ク　音の出る玩具、揺れている棒状の物、紐などが好き。 コ　学習活動の中で繰り返し使用している特定の輪を提示すると、引っ張れば何かが起きるという仕組みが分かる。 シ　横になった状態で、周りの物を探るように手を伸ばす。 テ　隠れた物がまた出てきたことを喜ぶようになってきた。	ケ　首が右前に倒れることがあるが、左側からの刺激によって、自分で上げようとする動きが見られる。 コ　特定の輪を握り、引っ張ることができる。 サ　自分から手を伸ばして触ろうとすることが少ない。 シ　横になった状態で、自分の周りにある物を探るように手を伸ばす。 ソ　うつ伏せにすると、頭を上げたり足を上げたりしようとする。 チ　左側の方が視線を向けやすい。 ツ　左右で手の使い方が違う。	エ　嬉しい気持ちを笑顔や声で表す。繰り返し行っているものは、視線で、再度やってくれるように訴えることがある。 サ　提示された玩具や絵本などを見たり聞いたりして笑顔になったり声を出したりする。 ス　顔の前に手を出すと、タッチしようとする。 タ　名前を呼ばれると、口を動かしたり、声を出したり、手を動かしたりして応える。

②－２　収集した情報(①)を学習上又は生活上の困難や、これまでの学習の習得状況の視点から整理する段階

・自分の近くで、教師や友達が自分に何かをしてくれると、発声や表情、手を動かすなどして応えたり、視線を向けたりして人との関わりを楽しんでいるが、物への興味・関心が狭い。（心・人・コ）
・慣れている歌や玩具などを使った活動では、身近な教師と繰り返しやり取りする中で、視線や声などで､「歌ってほしい」「遊びたい」という気持ちを伝えることが増えてきた。（心・人・コ）
・繰り返し使用している補助具（引っ張りやすい輪）を使う活動では、自分で引っ張れば何かが起こるという関係性が分かり、輪を握って引っ張るという目的をもった手の動きができている。（環・身）
・身体の緊張の強さや姿勢保持の難しさにより、学習活動がスムーズに進まない状況があるが、働き掛けに応じて自分で首を上げようとする動きが出てきている。（環・身）

②－３　収集した情報(①)を３年後の姿の観点から整理する段階

・学級や小集団（高学年）の中で、自分の気持ちを伝える相手が増えたり、やり取りする中で興味・関心の幅を広げたりしてほしい。（心・人・環・コ）
・緊張をゆるめて安定した姿勢で活動に向かえる時間が伸びてほしい。（健・環・身）

指導すべき課題の整理	③ ①をもとに②－１、②－２、②－３で整理した情報から課題を抽出する段階
	・周りの人の声や動きを聞いたり見たり、または自分に対して何かしてもらったりすることは好きで、表情や声で応えるが、自分から何かを要求する人や場面は限られている。（心・人・コ） ・自分から選んだり、自分から周りに働き掛けたりする経験が少ない。（心・人・環・コ） ・緊張の強さや、関節の硬さから、対象物に向かおうとするための姿勢保持が難しい。（環・身）
	④ ③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階
	人との関わりが好きで、身近な人に何かをしてもらうことを期待して待ち、してもらったことに対して笑顔や声で応えるという、やり取りの経験をこれまで多く積んできた。そのことによって、自分が反応するこで、相手がまた自分の好きなことをしてくれるということが分かってきている。一方で、関わりにおいて受け身になりがちで、自分から相手に働き掛けることは少なかった。自分から周りに働き掛けていくためには、慣れた好きな活動の中で「もっとやりたい」という気持ちを声や視線で伝え、相手が受け止めて返すというやりとりの経験を繰り返すこと、相手に伝わる本人なりの要求行動を確立していくこと、好きな物を自分で選ぶことが必要である。 また、相手に分かる要求行動を広げるためにも、身体の緊張をゆるめて、欲しい物を注視したり、現在できる手の動きを活用して目的のある手の動きを増やす必要がある。そのことで、本人が伝えられる人や場所なども今後広がってくると考える。

⑤ ④に基づき設定した指導目標を記す段階	
課題同士の関係を整理する中で 今指導すべき指導目標として	・身近な人とのやり取りの中で、発声や視線、手の動きなどの自分にできる方法で、自分から気持ち（要求）を相手に伝える。 ・身体の緊張をゆるめ、手や頭の意図的な動きを増やす。

指導目標を達成するために必要な項目の選定	⑥ ⑤を達成するために必要な項目を選定する段階					
	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	（５）健康状態の維持・改善に関すること。	（１）情緒の安定に関すること。	（１）他者とのかかわりの基礎に関すること。	（１）保有する感覚の活用に関すること。 （４）感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること。	（１）姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。 （２）姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること。	（１）コミュニケーションの基礎的能力に関すること。

⑦ 項目と項目を関連付ける際のポイント

・〈自分から要求を伝えるために〉（心）（１）と（人）（１）と（コ）（１）とを関連付けて設定した具体的な指導内容が、⑧アである。

・〈手や頭を意図的に動かすために〉〈心〉（１）と（人）（１）と（環）（１）と（身）（１）と（身）（２）と（コ）（１）とを関連付けて設定した具体的な指導内容が、⑧イである。

・〈適度な緊張状態で動作を行うために〉（健）（５）と（環）（１）と（環）（４）と（身）（１）と（身）（２）を関連付けて設定した具体的な指導内容が、⑧ウである。

選定した項目を関連付けて具体的な指導内容を設定	⑧ 具体的な指導内容を設定する段階			
	ア　好きな玩具や慣れた活動を繰り返し、「またやってほしい」ことを視線や表情で教師に伝える。 【時間における自立活動】 【遊びの指導】	イ　自分の欲しい玩具や楽器や遊びたい玩具を選び、手を伸ばして握り自分の身体の近くに持ってくる。 【時間における自立活動】 【生活単元学習】 【遊びの指導】 【音楽】	ウ 体操やマッサージなどで、身体の力を抜いたり、頭部を持ち上げたりする。 【時間における自立活動】 【日常生活の指導】 【生活単元学習】 【遊びの指導】 【音楽】	

A校　個別の指導計画　後期

※「流れ図」の考え方を用いた検討を行ったことにより、自立活動の時間における指導の目標が整理されました。さらに、他の学習場面における自立活動の指導の内容や手立てが明確になりました。

学部・学年	小学部	氏名

重点目標（小学部高学年で伸ばしたい力）

①教師の介助を受けながら、いろいろな感覚や身体の動きを経験し、自発的な動きを増やす。
②いろいろな人と関わり、自分がやりたいことや使いたい物などを相手に伝わるように、発声や目、手の動きなどで伝える。
③いろいろな学習や行事で生活経験を広げ、安心して活動に参加する。

指導の形態	後期目標	内　容	手立て
（略）			
遊びの指導	①様々な素材の感触に触れ、自分の好きな感触に気付く。 ①②③友達の誘い掛けに、表情や声で気持ちを表したり、自分の好きなコーナーを視線などで伝えたりする。 ①③ボールプールやトランポリンなどの揺れや振動を楽しむ。	「作って遊ぼう②」 ・造形遊び 「ダンボールランドであそぼう」 「お話あそびをしよう」 「雪となかよし」 「いーなランドであそぼう②」 ・コーナー遊び	○好きな感触に気付けるように、触れる範囲を少しずつ増やしたり、形状を変化させたりする。 ○友達の様子が見えるような配置にする。 ○安心して活動に参加し、気持ちを伝えられるように、「○○さんだよ」と本人の近くで話したり、コーナーで使っている教材を取り出して見せたりする。 ○「楽しいね」「気持ちいいね」など、本人の気持ちを代弁する。 ○本人の表情を見ながら、活動量を調整する。
（略）			
自立活動	①②絵本の読み聞かせを聞いて、自分の興味のある部分で声を出したり、手を伸ばして好きな絵や登場人物に触れようとしたりする。 ①②うつ伏せの姿勢やウォーカーに乗った姿勢で、数分間頭部を持ち上げる。 ①②座位の状態で、提示された玩具やかごの取っ手に手を伸ばし、両手で数分程度握り続ける。	「絵本を読もう」 「身体を動かそう」 「伸ばして握ってみよう」	○色がはっきりしていたり、光ったりする絵本や、繰り返しのフレーズが多い絵本を準備する。 ○絵本を拡大したり、ペープサートで提示したりする。 ○うつ伏せの状態の際に、姿勢が安定するように、脇の下にバスタオルやクッションを入れて位置を調整する。 ○頭部を持ち上げる時間を延ばせるように、玩具を提示したり、提示する距離を少しずつ離したりする。 ○自分の身体の前方に手を運べるように、始めは教師が手の動きを補助する。 ○自分から手を伸ばせるように、音の出る玩具や顔写真を貼っておく。 ○握り続けることができるように、取っ手の太さや感触を調整する。

・自立活動の視点を取り入れた目標や手立てを［網掛け］で示しています。
・「自立活動」の部分は、「時間における自立活動」で主に取り扱う内容を記載しています。

〔資料Ⅰ－２②〕　Ｂ校「授業改善プロジェクト」授業研究会関係資料

Ｂ校　中学部第〇学年 自立活動 学習指導案

日　時：平成３０年１１月２７日（火）
１０：５５～１１：４５
場　所：中学部〇年教室

１　題材名　　板書の書き取りのプロになろう

２　題材の目標

（１）　単眼鏡を適切に使用し、速く正確に板書を書写する。
（２）　漢字の誤写や誤読に気付いたり、修正したりすることを通して、自分に合う学習方法を身に付ける。
（３）　身に付けた単眼鏡の技能の必要性を理解し、学校生活で生かそうとする。

３　生徒と題材

（１）生徒の実態

ア　眼疾患名及び視力、視野等に関わる見え方の特徴

学年	遠距離視力	近距離視力	最大視認力	備　考
〇年	右 0.07（0.08） 左０（０）	右 0.1（0.1） 左０（０）	0.5／２ｃｍ、右	〇〇による視力障害、眼振、羞明あり

イ　主な学習状況

本学級は〇名からなり、教科の学習においては、一緒に学習している。一斉学習では互いにライバル意識をもち、意欲を高めることができ、個別学習では、集中してじっくり取り組める良さがある。そのため自立活動の時間における指導においては、題材によって一斉学習と個別学習とに分けて行っている。本題材は生徒１名が対象となる。

本生徒は、準ずる教育課程で標準サイズの教科書を用い学習をしている。読み書きは、ルーペを用い辞書等の細かい文字を読んだり、単眼鏡を使用し、板書を読んだり書字したりする習慣が身に付いている。通常の大学ノートに書字することができるが、自身の書いた文字をスムーズに読むことが難しくなるため、１ｃｍ幅の大学ノートに書字している。

書字については、きれいな字で丁寧に書くことができ、ノートにまとめることを好む。また、国語は好きな教科の一つで、作文を書いたり、文章を読んだりすることを得意としている。しかし、漢字の読み書きは苦手としており、板書書写に時間を要したり、漢字の誤りが多く見られたりする。そのため、主要教科においては、プリントを穴埋めにしたり、必要最低限の書字に留めたりするなどの配慮を行っている。

やや注意力散漫なところがあり、関心事が他に移り、他人の発言を聞いていなかったり、学習中に思いつくまま発言をしたりすることが見られるものの、好奇心が旺盛で知的要求は高く、学習に期待感をもって意欲的に取り組んでいる。最近の発言から、自分の見え方と視覚障害のない人の見え方の違いに気付き始めたところだと考える。

（２）題材観

本題材「板書の書き取りのプロになろう」は、学習場面や日常生活において、単眼鏡を用いて、必要な情報を速く正確に得る方法を身に付けることをねらいとした、単元「めざせ！単眼鏡の達人！」（弱視レンズ短期訓練プログラム）の中の一つの題材である。プログラムにおいては、学習場面において、板書した文字を速く正確にノートに書字することをねらいとしている。

本生徒は小１より単眼鏡を所持し使用している。低学年時は自立活動の時間に単眼鏡の訓練プログラムを行っていた。以降は本人に使用を任せられていたが、日常生活においても興味のあるものを、単眼鏡を使って見ていた経験があり、使用に対する抵抗感はない。そのため、学習場面において単眼鏡を使用し、黒板や掲示物の文字を読む習慣が身に付いている。しかし、板書をノートに書写するスピードは遅く、誤字脱字も多いため、授業の進度に影響をきたすことも多い。そのことを本生徒も自覚しており、速く正確に書く力を身に付けたいと考えている。

そのため、本題材に取り組み、単眼鏡の効果的な使い方のポイントを押さえることによって、すばやく正確に書字するためのスキルと習慣が身に付くと考える。プログラムでは、漢字を正確に読み書きする必要があるため、自分に合った漢字の学習方法を確認する機会とすることもできる。また、本生徒は中学部の卒業後の進路として、一般高等学校進学も視野に入れている。板書の書写能力が高まることによって、高等学校でのスムーズな授業参加が可能になる。よって、本生徒の学習や進路選択に対する自信を育てることにもつながると考え、本題材を設定した。

（３）学習指導における留意点

ア　単眼鏡使用に必要な基礎的能力を育てるために

（ア）教室の環境整備**【視点：環境】**

気候や天気、場所が変わると光の反射によって見えにくさが生じる。常に一定の条件で学習を行えるよう、日光を遮光し、教室灯で調節するようにする。また、他の視覚刺激や聴覚刺激が入らないように、余計な掲示物を除いたり、周囲の音が入らないようにしたりするなどの配慮を行う。生徒も自身が見えにくさを判断することができるよう、生徒の意見を聞き、取り入れる場面を設定する。

（イ）速く書写するためのポイントの指導**【視点：活動、環境】**

板書を速く正確に書くためには、ある程度のまとまった文章を一度に読み取り、記憶して書字する力が必要である。「板書の書き取りのプロになろうⅡ」の導入時に、本生徒が一度の目視で板書内容を記憶して書字する適切な方法を判断できるように、①２～３文節ごとの読み取り書字、②３～５文節ごとの読み取り書字、③４～６文節ごとの読み取り書字の３つの方法で速さと正確さを測定する。

イ　漢字の読み書きの力を高めるために

（ア）正確な漢字の書き方の指導**【視点：言葉、活動】**

本生徒は漢字を苦手としており、特に４～６年生相当の配当漢字に誤りが多い。漢字に誤りが見られた場合は、（例：「哀」は「なべぶた、くち、表の下」）のように、部品の組み合わせを言葉で説明するよう促す。また、漢字が正確に書けたか自分で確認できるように、正答と自分で書いた文字を比べ、自己チェックする場面を設定する。

（イ）漢字の読み方の指導**【視点：活動】**

正確な漢字の読み方を身に付けられるように、板書書写の後に漢字の音読を促し、誤読を修正する場面を設定する。

ウ　身に付けた技能を学校生活で生かすために

（ア）各教科等における適切な板書量や漢字の指導法の共通理解と一貫した指導**【視点：環境】**

板書書写で習得した技術を各教科等の学習で実践することは、生徒の書字能力を高め、効果的に学習を進めることにつながる。本生徒の最も適切な書字方法や板書書写のスピード、書字における誤字傾向を各教科等の担当と共有し、１時間の授業における適切な板書量や部品の組み合わせによる漢字の指導を共通理解して指導を進める。

エ　主体的に学習に取り組むために

（ア）数値での明確化**【視点：言葉、活動】**

板書書写の正確さやスピードの結果がすぐに数値で表れ、グラフで比較できることは、動機付けや意欲の継続につながるだけでなく、自身の変化を推測するきっかけにもなる。数値の変化を一緒に肯定的に捉える場面を設定することで、本生徒の自信と自覚が育つよう支援する。

（イ）読み教材の工夫**【視点：活動、環境】**

生徒が、「文章を読みたい」、「丁寧な字で書きたい」、という意欲をもてるよう、生徒の好きな教科である理科、社会の歴史分野、国語、道徳などの要素を含んだ内容を取り入れるようにする。また、「板書の書き取りのプロになろうⅡ」では、連続性のある文章も取り入れ、文章の続きを期待して取り組めるようにしたい。

（ウ）学習場面での活用**【視点：言葉、活動】**

板書を速く正確に書くことを各教科で実践できるよう、書字方法や書き取りのスタイルを統一するよう担当者間で共通理解を図りたい。さらに各教科において、板書書写のスピードや正確さが向上したり、自身の自立活動での取組を取り入れた行動や発言が見られたりした場合は、生徒の取組を称賛し、意欲的に取り組めるよう支援していきたい。

４　指導計画（総時数７時間）※各ミッションの達成度によって、予定時数は変更する。

<table>
<tr><th colspan="2">内　　容</th><th>ねらい（プログラム評価基準）</th><th>時　間</th></tr>
<tr><td rowspan="3">ミッション５
「板書の書き取りのプロになろうⅠ」</td><td>理科編</td><td rowspan="3">単眼鏡で板書を見ながら、文の意味のまとまりを意識して音読し、９０％以上正確に書写することができる。（20～50 字程度、文節の途中で行替えされているもの）</td><td>1</td></tr>
<tr><td>道徳編</td><td>1</td></tr>
<tr><td>映画編</td><td>1</td></tr>
<tr><td rowspan="4">ミッション６
「板書の書き取りのプロになろうⅡ」</td><td>道徳編
（導入編）</td><td>単眼鏡で板書を読み取る際の正確性を、次の⑴～⑶の方法で測定し、一度の目視での適切な書字方法を判断する。（50～80 字程度、文節の途中で行替えされているもの）
⑴ ２～３文節ごとの読み取り書字
⑵ ３～５文節ごとの読み取り書字
⑶ ４～６文節ごとの読み取り書字</td><td>1</td></tr>
<tr><td>映画編</td><td rowspan="3">単眼鏡で板書を見ながら、９０％以上の正解率でかつ、2.5 秒／字以上の速さで書写することができる。（50～80 字程度、文節の途中で行替えされているもの）</td><td>1
（本時
1／1）</td></tr>
<tr><td>社会編</td><td>1</td></tr>
<tr><td>理科編</td><td>1</td></tr>
</table>

5　本時の指導

（１）本時の目標

ア　自分に合った書字方法で、９０％以上正確に、かつ、2.5 秒／字以上の速さで板書書写することができる。

イ　漢字の読み書きの正確さを意識し、誤読や誤字に気付いたり、修正したりすることができる。

（２）展開

ア時間	学習活動	イ　教師の働きかけと留意点	ウ準備物
１０分	1　前時の活動を振り返り、今日の学習について知る。 (1)　ウォーミングアップ（板書の音読） (2)　板書書写（黙読） (3)　採点 (4)　(2)～(3)の繰り返し (5)　振り返り	（ア）３～５文節ごとの読み取りが得点が一番高く自分に合った書字方法であることを確認するために、前時の活動を振り返る。 （イ）本時の目標（自分に合った書字方法を使って、速く正確に書字する）を確認することで、学習の意義を理解し、意欲をもって取り組めるようにする。 （ウ）自立活動の時間だけでなく、各教科で取り組むことが大切であることに気付くことができるよう、各教科ではどのように板書書写しているか、前時の活動結果を受けて、実践したかを質問する。	自立活動ファイル
5分	2　板書書写のウォーミングアップをする。	（エ）本時では、映画のパンフレットの見出しの板書書写をすることを伝え、期待感をもって取り組めるようにする。 （オ）３～５文節ごとの読み取りで文章を読んでいるかを確認するために、ウォーミングアップを行うことを伝える。その際に方法について説明する。（方法：文章を黙読し、単眼鏡を目から外して下を向き、書字する真似をして暗唱すること。） （カ）見えやすい環境で活動に臨むことができるよう、単眼鏡のピントの確認や、机と電子黒板の配置、日光の遮断、蛍光灯の反射などの見え方に配慮した環境整備を生徒と相談しながら行う。	映画のパンフレット 電子黒板 ＰＣ 書見台 筆記用具
３０分	3　板書の書写と採点をする。 (1)　ピント合わせをする。 (2)　「ようい、ドン」の合図で文章を書写する。 (3)　文章を音読する。 (4)　結果を採点し、点	（キ）計算式を用いて得点化することを伝える。目標をもって取り組むことができるように、前時（ミッション６の導入時）の書字速度（2.7 秒／１文字）であれば誤字による減点は３つ以内が、合格に必要な基準であることを伝える。 （ク）書写の速さだけでなく、正確に書くことも意識できるように、減点の対象となる７つのポイントは何か質問する。答えられない場合は、ミッション５の記録表を見てよいことを伝える。（７つ	ストップウォッチ ノート

	数を出す。 ⑸　(1)～⑷をもう一度繰り返す。	のポイント：誤字、脱字、余字、消し残し、句読点、写し間違い、はみ出し） （ケ）合格には速さが求められるため、分からない漢字があった場合は、平仮名で書いてもよいことを伝える。 （コ）書写する意欲が高まるよう、活動２のウォーミングアップで提示した文章の続きを提示する。 （サ）正確な漢字の読み方を理解できるよう、書写した文章の音読をするよう促し、間違いがあった場合は、修正する場面を設定する。 （シ）生徒が自分で文字の間違いに気付けるよう、電子黒板に提示した文章を印字したプリントを配付し、ノートと比較できるようにする。（間違いが予想される漢字：飼、探、旅、納得、訪ねる） （ス）得点算出シートにすぐに記入できるように、減点となった文字を７つのポイント毎に、正の字でメモし数値を記入するよう伝える。 （セ）間違って理解している漢字があった場合は、正しく漢字を習得できるよう、漢字見本表を提示し、字の部品の組み合わせを言葉で説明するよう伝え、確認する。（例：「飼」は「しょくへん、司」）	文章が書かれたプリント 採点記録表 タブレット型端末
５分	４　振り返りをする。	（ソ）自己評価ができるよう、自分に合った読み取りを意識して活動した感想や気付き等を確認する。 （タ）振り返りを基にして、次時の目標や各教科の学習場面で活用できることを考える場面を設ける。 （チ）次時への期待感がもてるよう、良かった点や、前回から変化が見られた点、課題について整理して伝える。	

（３）評価

ア　生徒

（ア）　活動３：３～５文節ごとの読み取りが自分に合った方法であることが分かり、速く正確に板書書写ができたか。

イ　教師

（ア）　生徒が自分に合った書字方法のよさを実感し、意欲的に速く板書するための手立ては適切であったか。【環境・活動】

（イ）　生徒が漢字の読み書きを正確に理解するための手立ては適切であったか。【言葉・活動】

B校「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ図」

学部・学年	中学部
障害の種類・程度や状態等	視覚障害（弱視）
指導の概要	自己理解を進めながら、自分で学習環境を整える力、単眼鏡で効果的に情報収集する力を育む指導。

実態把握

①　障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題等について情報収集

ア　遠距離視力　右：０．０７（０．０８）、左：０。近距離視力　右：０．１（０．１）、左：０。
　最大視認力：０．５／２ｃｍ、右
イ　単眼鏡を用いて授業に臨む習慣が身に付いている。ルーペの使用は面倒だと感じているが、資料集等の細かい文字はルーペを使って学習に臨んでいる。
ウ　整理整頓が苦手で、必要なときに物が取り出せなかったり、物を紛失したりしやすい。
エ　板書書写に非常に時間がかかるため、学習進度に影響をきたすこともある。さらに、漢字や英単語等、文字の間違いが多く、その都度確認が必要である。
オ　読み速度：文字ポイント１６Ｐ、２７０文字／分。小学校４～５年生程度の速度である。
カ　大学ノートに書字することができるが、字が小さいと自身の書いた文字が読めず困っていることもある。
キ　通常の教科書に移行し、学習に取り組んでいる。
ク　読書が好きで、時間を見つけて文庫本等を読んでいる。
ケ　好奇心旺盛で、新奇なことを見たい、知りたい気持ちが強い。また、何事にも積極的に取り組むことができる。
コ　周囲の大人の意見や助言を素直に受け入れ、取り入れることができる。
サ　周囲の会話に気を取られ、集中力が途切れることが多くある。
シ　思いつくままに話し、そのまま関心が他にそれたり、話題が急に変わることがある。
ス　中学部卒業後の進路は未定だが、高等部普通科または一般高校進学を考えている。
セ　休日は友達と遊びたいと考えているが、公共交通機関利用の経験が少なく利用できないこと、保護者が忙しいことから、外出する機会は少ない。
ソ　自宅からスクールバス乗り場までの歩行は白杖を用い、一人で通学できる。保有する視覚だけでなく、音を頼りにしながら歩くことができる。
タ　視覚障害のない人と自分の見え方の違いに気付き始めている。

②－１　収集した情報（①）を自立活動の区分に即して整理する段階

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
タ　視覚障害のない人と自分の見え方の違いに気付き始めている。	ク　読書が好きで、時間を見つけて文庫本を読んでいる。 ス　中学部卒業後の進路は未定だが、高等部普通科または高校進学を考えている。	コ　周囲の大人の意見や助言を素直に受け入れ、取り入れることができる。	イ　単眼鏡を用いて授業に臨む習慣が身に付いている。ルーペの使用は面倒だと感じているが、必要に応じて取り入れ学習に臨んでいる。 ウ　整理整頓が苦手で、必要なときに物が取り出せなかったり、物を紛失したりしやすい。 エ　板書書写に非常に時間がかかるため、学習進度に影響をきたすこともある。さらに漢字や英単語等の文字の間違いが多く、その都度確認が必要である。 オ　読み速度：文字ポイント１６Ｐ、２７０文字／分。小学校４～５年生程度の速度である。 カ　大学ノートに書字することができるが、字が小さいと自身の書いた文字が読めず困っていることもある。 ケ　好奇心旺盛で、新奇なことを見たい知りたい気持ちが強い。また、何事にも積極的に取り組むことができる。 セ　休日は友達と遊びたいと考えているが、公共交通機関利用の経験が少なく利用できないこと、保護者が忙しいことから、外出する機会は少ない。 ソ　自宅からスクールバス乗り場までの歩行は、白杖を用い、一人で通学できる。保有する視覚だけでなく、音を頼りにしながら歩くことができる。	ソ　自宅からスクールバス乗り場までの歩行は白杖を用い、一人で通学できる。保有する視覚だけでなく、音を頼りにしながら歩くことができる。	サ　周囲の会話に気を取られ集中力が途切れることが多くある。 シ　思いつくままに話し、そのまま関心が他にそれたり、話題が急に変わることがある。

②－２　収集した情報（①）を学習上又は生活上の困難や、これまでの学習の習得状況の視点から整理する段階

【できていること】
・人前で弱視レンズを使うことに抵抗はなく、助言を素直に聞くことができるため、弱視レンズの基本的な操作法を身に付けている。（心）
・好奇心旺盛なため、新しいことに対しては、弱視レンズを使って積極的に物を見ようとする気持ちが強い。（環）
【困難さがあること】
・机周辺や棚が散らかっており、見えにくいことで、必要な物を取り出すことに非常に時間がかかる。（環）
・外出経験が少なく、建物や施設の構造や公共交通機関の表示の読み取り方などの情報を得る力が育っていない。（環）
・視覚活用の困難さからくる線や形の読み取りにくさ、明確な文字情報に接する経験の不足などの要因から、漢字の正確な部品を覚えにくく、漢字学習を苦手としている。（環）
・小１より単眼鏡を小６よりルーペを使用しているが、単眼鏡の訓練プログラムは小３まで実施、ルーペの訓練プログラムは未実施である。（環）

②－３　収集した情報（①）を３年後の姿の観点から整理する段階

・自分からルーペや単眼鏡を活用して身の回りの情報を正確に入手する。（健、環）
・自分に合った漢字の学習方法を身に付け、文字の読み書きの力を高める。（心、環）
・歩行技術を身に付け、校外で積極的に情報収集をする。（心、環）
・物の置き場所を決めたり、整理整頓をしたりする等、自分で学習しやすい環境に整える。（健、環）

指導すべき課題の整理

③　①をもとに②－１、②－２、②－３で整理した情報から課題を抽出する段階

・弱視レンズを使用して、速く正確に文字を読み書きするスキルが身に付いていない。
・公共施設を利用する際の、弱視レンズを使用して情報を得る経験が不足している。
・自分の見え方から、必要な物を探したり、すぐに取り出したりすることが難しいことに気付いているが、それに対応した行動をとるまでに至っていない。
・見えにくさによって文字の読み書きの間違いが多く、漢字学習を苦手としている。

④　③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階

授業では、積極的に単眼鏡を活用しているが、板書書写に時間がかかったり、漢字の書き取りが不正確だったりすることが多い。本生徒もこのことに課題意識をもっているが、改善方法を見いだせずにいる。また、外出したい気持ちはあるが経験が少なく、公共施設や建物の構造、交通機関の利用の仕方を理解していないため、積極的に外出するには至っていない。そこで、小３まで実施していた弱視レンズ訓練プログラムを再開し、単眼鏡の効果的な使い方を習得することで、各教科等の授業における活用状況の改善を図るとともに、校外での活用を促す。中学部卒業後の進路として、高等学校への進学も視野に入れていることから、通学や学習への適応として、③の課題を早期に解決することが必要である。

視覚障害のない人と自分の見え方の違いにも気付き始めている。見えにくさによって、物を探したり、取り出したりすることが不得手であることも自覚しているが、状況の改善には至っていない。整理整頓や物の配置の工夫などを通して、自分で学習や生活しやすい環境を整備する力を育むこと、あわせて、漢字の読み書きなど、見えにくさに起因して苦手な学習を、自分に合った方法で習得する力を育む必要がある。

⑤　④に基づき設定した指導目標を記す段階

課題同士の関係を整理する中で今指導すべき指導目標として	・単眼鏡を用いてスムーズに板書を読み取ったり、書き取ったりする。 ・単眼鏡を用いて周囲の環境の情報を取り入れ、公共施設や公共交通機関を利用することにつなげる。 ・自分の見えにくさを補う学習方法や環境整備のよさが分かり、実行する。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

⑥　⑤を達成するために必要な項目を選定する段階

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
（２）病気の状態の理解と生活管理に関すること。 （４）障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること。	（２）状況の理解と変化への対応に関すること。 （３）障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。	（３）自己の理解と行動の調整に関すること。	（２）感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること。 （３）感覚の補助及び代行手段の活用に関すること。 （４）感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること。 （５）認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。	（４）身体の移動能力に関すること。 （５）作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること。	

⑦　項目と項目を関連付ける際のポイント

単眼鏡の効果的な操作技術を身に付け、授業において活用することができるようになるために心（２）（３）、環（３）（５）、身（５）とを関連付けて設定した具体的な指導内容が⑧アである。

事前に歩行環境や歩行ルート（全体像）をおおまかに把握できるようになるために、心（２）（３）、環（５）を関連付けて設定した指導内容が⑧イである。

イの学習をもとに、単眼鏡を用いて周囲の情報を読み取り、実際の目的地への移動に役立てることができるようになるために、心（２）、環（４）（５）、身（４）を関連付けて設定した具体的な指導内容が⑧ウである。

自分の見え方にあった環境整備や学習の方法をとることができるようになるために、健（２）（４）、人（３）、環（２）とを関連付けて設定した具体的な指導内容が⑧エである。

⑧　具体的な指導内容を設定する段階

	ア	イ	ウ	エ
選定した項目を関連付けて具体的な指導内容を設定	ア　単眼鏡を動かして、見ようとするものを継時的に認知し、全体像をとらえること。（単眼鏡の基本訓練プログラムと広視野空間探索プログラムの実施） 単眼鏡の使用技術を他の学習の場面でも積極的に取り入れること。	イ　公共施設の建物内の地図や公共交通機関の路線図等の見方を理解すること。	ウ　単眼鏡で公共施設や公共交通機関に掲示されている標識・表示に記載された情報を読み取ること。 利用した公共施設や公共交通機関の地図や標識、表示について、実際の地理的環境と照合しながら言葉や図で説明すること。	エ　自分にとって効果がある学習用品の整理整頓方法や漢字の習得方法を見いだし、実行すること。

B校　個別の指導計画

※「流れ図」の考え方を活用して、中心課題の導き出しを行ったことにより、後期の短期目標に対して、生徒自身の必要感や主体性、教員間の共通理解を重視した手立てが加えられました。

学部・科、学年	中学部○年	生徒氏名	
領域・教科・科目等	自立活動		
年間目標	・自分の見え方に応じた視覚支援機器を使用し、活用することができる。 ・安全に歩行するための白杖の基本的な技術を身に付ける。 ・自分の持ち物を管理したり、身の回りの清潔を心掛け実践したりする。		

	短期目標	手立て	評　価
前期	・白杖の持ち方や基本的な操作技術を覚え、学校周辺や通学路を安全に歩行する。 ・視覚補助具（単眼鏡、ルーペ）を使用し、遠方や近方の視対象がよく見える経験を重ね、積極的に使用する。 ・整理整頓をし、自分の持ち物を管理する。	・白杖を使用することの良さや安全性を実感できるように、持ち方や操作だけでなく、段差や起伏のある道での歩行場面を設定する。 ・弱視レンズ基本訓練プログラムの内容に沿って、単眼鏡やルーペの操作の練習を行う。目標をもって取り組むことができるように、記録表を掲示し、毎回タイムを記録する。 ・学習しやすい環境を一緒に考え、学習用品等の置き場を決めるようにする。	・通学時の歩行指導により、白杖を使用することの良さや安全性を実感することができ、外出時に進んで使用できた。階段や起伏のある道では、自主的に歩行の仕方を質問し、疑問をすぐに解消する姿が見られた。 ・単眼鏡の基本訓練プログラムでは、初めはゲーム感覚で楽しんで取り組んでいたが、タイムが伸び悩んだことや苦手な漢字が対象であることから、モチベーションが低下した。 ・プリント等の整理をするための仕分けトレーに項目をつけて配置したが、項目にそって置くことが難しかった。その都度、ファイルに綴じるよう心掛けたときは、プリントの紛失は少なくなった。
後期	・視覚補助具（単眼鏡）を使用し、遠方の視対象がよく見える経験を重ね、積極的に使用する。 ・速やかに必要な物を取り出せるよう、授業後、文房具、教科書、プリント等の整理整頓をする。	・単眼鏡は、前期に引き続き訓練プログラムに沿って練習する。訓練に見通しがもてるように、段階ごとに示した学習計画表を提示し、訓練の意義、有用性について説明する。また、生徒が意欲的に取り組めるよう、関心のある題材を準備する。 ・各教科等の場面で生かすことができるよう、訓練プログラムでの実施状況を各教科担当と共有し、板書量や板書の仕方を統一できるようにする。 ・学習しやすい環境を一緒に考え、学習用品等の置き場を決めるようにする。 ・環境を整えることの必要性を実感できるように、整理整頓の効果を確認する場面を設定する。	

担当者氏名〔　　　　　〕

〔資料Ⅰ－２③〕　Ｃ校「授業改善プロジェクト」授業研究会関係資料

Ｃ校　中学部作業学習（エコグループ）学習指導案

日　時：１１月２８日（木）３，４校時
場　所：中学部〇年教室
生　徒：中学部生徒

１　題材名　　「油スイトールン♪」の製作～いとく販売会に向けて～

２　題材の目標

・販売会で販売するという製作の目的を意識して，全体または個別の目標数を目指し，達成感を積み重ねながら協力して意欲的に取り組む。（主体的）
・工程の区切りや仕上がりを判断して報告に向かったり，自分で確認してから報告に向かったりする。（思判表）
・自分の工程と次の工程とのつながりや，次の工程に見合った部材の基準が分かる。（知識・技能）

３　生徒と題材

（１）　生徒について

１年生から３年生までの男子〇名，女子〇名，計〇名で取り組む作業学習である。指示や支援がなくてもある程度一人で作業を遂行できる生徒がいる一方で，教師と一緒に確認しながら作業に取り組む生徒もいるなど，生徒の実態は様々である。３年前から学部全員で一つの作業種として，継続して油吸い取りパック（以下「油スイトールン♪」と表記）作りをしている。そのため，自分の工程を理解し，一定時間続けて取り組むことができるようになってきたり，複数の工程のつながりが分かって担当以外の工程ができるようになったりする生徒が増えてきている。また，何に向けて製作しているのか，どのくらいできたかを意識し意欲的に取り組む姿が見られるようになってきている。報告で，次の工程に渡す部材としてどんなことに気を付けていくかを教師と一緒に確認しながら，より丁寧な製品作りを目指して取り組んでいる。

（２）　題材について

本題材で製作する「油スイトールン♪」は，給食に出る牛乳パックを再利用して作っている。フィルムを剥がし，ミキサーで撹拌して乾かした「パルプ」をミルミキサーにかけて綿状にし，計量してパックに詰める，という工程を，協働しながら製作している。ＰＴＡに合わせて校内販売をしたり，高等部の地域での販売活動に依頼したりすることで，保護者を中心に，販売を楽しみに待つお客さんが増えてきている。実習で，目標数を超えて製作できた喜びを皆で共有したことで，製作への意欲が高まり，学校祭の販売では，頑張って作った製品が売れ，お客さんに喜んでもらうことで達成感を得る経験をし，次の販売へ向けての意欲も高まっている。このような活動を通して，皆で協力して目的を達成すること，また，働いてお金を得ることの理解や，働くことへの意欲を培うことができると考え，本題材を設定した。販売会で扱うより丁寧な製品を作るという目的意識をもつことにより，担当する部材の基準に対する理解を深め，仕上がりや品質を考える力を育てていきたい。

（３）　指導に当たって

〈学習活動〉

・製作の目的や目標数に見通しをもったり，応援が必要な工程があることに気付いたりすることができるよう，これまでに完成した製品を出来高表に掲示し，繰り返し確認する。（主・深）
・生徒の実態や手順，数や量に合わせて各工程で何がどうなれば報告なのかという具体的な区切りを決める。また，報告の必要性が分かるように，報告時の確認の仕方を具体的に決めて提示する。報告を受けた教師は，報告の区切りについて振り返られるよう，「頑張ったところや気を付けたところはどんなことか」と発問したり，一緒に品質を確認する時間を設けたりする。（主・対・深）

・何をどのように頑張ったかが分かるように，個人の目標を教師と一緒に振り返る時間を設けたり，友達の頑張りや，どのくらい製作したかを知る場面を設けたりする。（対・深）
・目標数を意識して協力して製作に取り組むことができるように，手が空いた時に他の工程を手伝ったり，依頼を受けて協力したりする機会を設ける。（主・対・深）

〈場の設定，教材・教具〉
・皆で協働して取り組む意識を高めることができるように，工程ごとに並び，互いの様子が見えるように机を配置する。（対・深）
・自分の役割や分担していることが分かりやすいように，次の工程の友達や教師に受け渡す場面を設ける。（対）
・全体の場で作業することが難しい生徒がいる場合は，作業場所を別室に設定する。自分の工程ができたら，全体の場にいるＴ１に報告することで，頑張りを共有する。（主）
・作業時間が分かるように，タイムタイマーを提示したり，製作の目的や目標数を見て確認することができるように，視覚的に分かりやすく板書したりする。（主・深）
・手順を自然に覚えやすいように手順表を提示したり，道具等を置く位置を固定して，準備から作業，片付け，掃除までの動きを一定にしたりして，繰り返し取り組む。（主）

〈教師の働き掛け〉
・生徒が自分から取り掛かったり考えたりできるように，手掛かりを用意して見守り，必要に応じて手掛かりに気付かせたり，質問を促したり，発問の工夫によって考えを引き出したりする。
・やるべきことに集中できるように，視覚的に分かりやすい提示を工夫したり，見通しをもって取り組めるように順番や，時間の提示等をしたりする。

４　指導計画（総時数　７，８時間／４０時間）

学習活動	ねらい	時数	主となる教科
○オリエンテーション（前題材の振り返り含む）	・販売を振り返り，頑張りを認め合ったり，次の販売に見通しをもち目標数を皆で決めたりする。（主）	２時間	職業・家庭
○「油スイトールン♪」の製作	・自分の担当する工程や何に向けて作っているのかが分かり，意欲的に取り組む。（主） ・工程の区切りや仕上がりを判断したり，自分で確認したりしてから報告する。（思判表） ・次の工程に渡すための基準が分かる。（知・技）	３２時間 本時 5, 6／32 時間	職業・家庭
○販売準備	・製品や袋詰めの丁寧さで気を付けることが分かって，販売することを意識して準備をする。（思判表）	４時間	社会
★（絆ショップ準備） （いとく販売会）	（販売の係分担や，販売で心掛けることが分かり，お客さんに喜んでもらうことを意識して，皆で協力して販売する。）	（生単４） （生単４）	
○振り返り	・お互いの頑張りに気付いて認め合ったり，頑張ったことを整理してまとめたりする。（主）	２時間	国語 数学

★絆ショップの準備といとく販売会当日は，生活単元学習として行う。

５　本時の計画（総時数　７，８時間／４０時間）

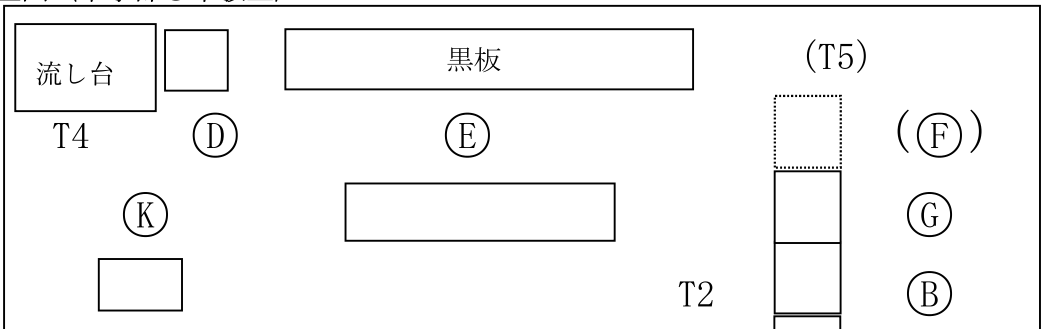
（１）全体の目標
・担当する工程の目標個数や回数の達成を目指して取り組み，自分の工程の完了を判断して報告する。

（２）個別の目標　※対象生徒（A　○年）

個別の指導計画の目標（年間　作業学習）	個別の指導計画の目標（年間　自立活動）
・~~自分から手を伸ばして牛乳パックのフィルムを剥がす回数を増やしていく。~~ ・活動の流れに沿って，道具を手掛かりにして行うことが分かり，自分から取り掛かる。（Ｒ１．10 月改訂） ・自分から報告の場所へ向かい（Ｒ１．10 月改訂），発声をしたり，両手でできたものを手渡したりして報告を行う。	・教師とやり取りしながら，自分から活動に取り掛かったり，気持ちを切り替えたりして活動に取り組む。 〈具体的な指導内容〉 ・情報を受け止めやすい落ち着いた環境で，必要なことに意識を向けて課題に取り組み，できたことに対する達成感をもつ。 ・教師とのやり取りを通して，理解できる言葉を増やしたり，身振りやカードの選択等で意思を表出したりする。 ・場所や人の名前，手に持っている物を手掛かりにして，目的の位置へ移動する。 ・いろいろな教師と活動を通じて同じコミュニケーション手段でやり取りをする。 （Ｒ１．10 月改訂）

氏名	生徒の様子	本時の目標
A（○年） 綿作り （ミルミキサー）	前期実習までは，自分から作業に気持ちを向けて取り組んだり，長時間の作業に向かったりすることが難しかった。できた時に称賛を得ることで自信を付け，繰り返し取り組む中でやることが分かって，自分から取り掛かることが増えてきている。友達の顔と名前を結び付ける，手元を見て小さなものをつまむ，指先に力を入れてボタンなどを押す，などの個別の自立活動の学習で取り組んでいることを活動に取り入れて行い，少しずつできることが増えてきている。歩行の不安定さがあるため，報告時の動線には注意が必要だが，報告の際の動きが分かってきている。	・自分からパルプをつまんで瓶に入れたり，ミキサーのボタンを押したりしながら，３セット以上取り組む。 ・報告の区切りが分かり，自分から立って友達のところへ向かい，道具を渡したり，受け取るまで待ったりする。

（３）配置図〈中学部○年教室〉



（４）－①学習過程（全体）

時間（分）	学　習　活　動	教師の働き掛け，手立て	準備物等
(10)	1　はじめの会 （1）日誌記入 （2）点呼 （3）先生の話 （めあての確認） （4）挨拶	・机の配置等が済んだ生徒から，日誌記入を始めることとし，自分で取り掛かることができるように，日誌を所定の位置に準備する。 ・担当する工程の目標個数や回数を決めることができるように，教師と相談しながら日誌に目標を記入する時間を設ける。 ・製作の目的や，いつまで完成させるのかが分かるように出来高表を提示する。 ・できたことを確かめてから報告をする意識を高めるようにめあてを提示し，何をどのように報告するかを担当の先生と確認するように伝える。(T1)	目標や活動の流れのカード 日誌 工程表 顔写真 出来高表
(65)	2「油スイトールン♪」製作 （1）道具の準備 （2）製作 ・フィルム剥がし　H，I，J ・パルプ作り　D ・綿作り　A，B，C，F，G ・計量　K ・袋詰め　E （4）道具の片付け 掃除 日誌記入	・必要な道具を準備することができるように，道具・材料置き場を一定にし，名前を付ける。 ・Fが落ち着いて作業に取り組むことができるように，活動の場所や時間等を選択する場面を設ける。(T5) ・作業時間が分かりやすいように，タイムタイマーで示す。 ・できるだけ自分から作業に取り掛かることができるように，手順表や，道具等への注目を促したり，きっかけを与えて見守りながら近くで一緒に作業したりする。 ・報告のタイミングが分かりやすいように，量が分かるような印を付けたり，回数を把握できるように手順を示したりする。 ・報告を受けた際には，生徒の仕上がりについての判断を確認し，丁寧な製品作りに対する気持ちを高められるようにする。 ・皆で取り組む意識を高めることができるように，次の工程への報告や，必要に応じて他の工程へ依頼や手伝いの申し出を行う場面を設ける。 ・片付けの仕方や掃除の分担が分かって自分から取り掛かることができるように，片付ける場所を固定したり，分担を板書したりする。 ・頑張りや課題を振り返り，本時の目標について評価できるように，教師と話しながら日誌を記入する。	牛乳パック ミキサー タオル ミルミキサー 延長コード パルプ バケツ タイマー ケース はかり パック 手順表 補助具 タイムタイマー 掃除用具 洗濯道具
(15)	3　おわりの会 （1）頑張り紹介 （2）先生の話 （めあての評価） （3）挨拶	・お互いの頑張りに目を向けることができるように，数名の頑張りを紹介する。 ・達成感や次時への意欲を高めることができるように，完成した個数を出来高表で確認する。	出来高表 日誌

（４）－②学習過程（対象生徒）

時間（分）	学　習　活　動	対象生徒についての支援の工夫	準備物等
(10)	1　はじめの会 （1）日誌記入 （2）点呼 （3）先生の話 （めあての確認） （4）挨拶	・教師とのやり取りが分かりやすいように机を配置する。 ・日付，作業内容，目標等を写真や実物，前回の日誌等で確認し，教師が日誌に記入する。 ・挨拶や返事で声を出そうとすることができるように，手を口元に添えて発声のタイミングを促す。	目標や活動の流れのカード 日誌 工程表 顔写真 出来高表

(65)	2「油スイトールン♪」製作 （1）道具の準備 （2）製作 ・綿作り （3）道具の片付け 掃除 日誌記入	・自分の活動に集中して取り組んだり,安全に移動したりできるように,同じ工程の生徒から少し離れた位置に机を配置する。 ・安全に自分から道具を取りに向かうことができるように，道具置き場の位置までの動線が空いてから移動を促す。 ・工程の流れが分かりやすいように，机上に左から右へ手順に沿って道具を配置する。 ・瓶に入れるパルプの数や，終わりが分かりやすいように教師が数唱し，「終わり」を手振り等で一緒に確認する。 ・動きと言葉，身振りと結び付きに気付くことができるように，ミキサーを止める時に「終わり」の言葉と身振りを添える。 ・報告の場所に自分で移動することができるように,報告相手の写真や持っていく容器を手掛かりとして確認する。 ・報告で渡した容器を受け取るまで待っていることが分かるように,身振りに添えて言葉を掛ける。 ・報告を終えて席に戻る際は，必要に応じて写真や言葉で移動先を確認し，安全なタイミングで移動を促す。 ・ミキサーにかけるパルプを受け取りに行く活動については,まだ不慣れであるため,T２の写真や持っていく容器を手掛かりとするほかに，必要に応じてT２が声を掛ける。 ・活動の区切りが分かるように，１セット終了するごとに，日誌に回数を記録するシールを一緒に貼り，できたことを称賛する。 ・作業に向かう気持ちを持続させることができるように，集中が途切れてきた場合には，他教室まで牛乳パックを取りに行く活動を写真で提示し，意思を確認する。 ・道具を片付ける位置が分かりやすいように，色の印を付けておく。 ・掃除では，洗濯かごを手渡すことで移動先が分かるようにし,洗濯機までの動線が安全であるか確認しながら,友達と一緒に移動する様子を側で見守る。 ・作業の様子を教師が話をして伝えながら振り返り，教師が日誌を記入する。	牛乳パック ミキサー タオル ミルミキサー 延長コード パルプ バケツ タイマー ケース はかり パック 手順表 補助具 タイムタイマー 掃除用具 洗濯道具
(15)	3　おわりの会 （1）頑張り紹介 （2）先生の話 （めあての評価） （3）挨拶	・おわりの会の内容を分かりやすい言葉で伝える。 ・製作時の活動状況によっては,「頑張り紹介」で取り上げることで,多くの友達や教師から賞賛される機会とする。	出来高表 日誌

（5）評価

〈生徒〉・いつ，誰に，どのように報告するかが分かって自分から報告へ向かったり,担当工程の目標を達成したりできたか。

〈教師〉・生徒が報告に向かう区切りが分かりやすく，報告の内容が分かるような言葉掛けや,判断材料となる教材・教具などが適切であったか。

〈対象生徒〉・自分から担当工程に取り掛かり目標回数を達成したり,報告の区切りが分かって目的の位置に向かったりできたか。

〈教師〉・生徒が自分から担当工程に取り組んだり，報告を行ったりするための言葉掛けや，教材・教具などは適切であったか。

C校 「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ図」

学部・学年	中学部
障害の種類・程度や状態等	精神運動発達遅滞
事例の概要	活動への意欲を喚起することを目指した指導

実態把握

① 障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題等について情報収集

ア　選択肢から好きな方や，発問に応じて分かっているものを選ぶことがある。
イ　歌ってほしい，遊んでほしい時など，サインや身振りで伝える。音楽やリズミカルな言葉遊びが好きである。
ウ　定時排せつで成功が増え，排尿の間隔も空いてきている。トレーニングパットで排尿の不快感に気付いて訴えることが見られた。
エ　挨拶や返事の場面で，教師の声に合わせて発声することが増えてきている。
オ　歩行は安定してきており，歩き続ける距離が伸びてきた。障害物に気付いてよけようとする。かごなどの物を両手で抱えて歩いたり，落とした物を拾ったりする。
カ　床や椅子に座った姿勢から一人で立ち上がる。同じ位置に安定して立ち続けていることが難しいが，音楽に聴き入っている時などは安定して起立している。
キ　繰り返しの学習で，単語と実物が結び付くものが増えてきた。簡単な指示を理解できているが，行動の途中で途切れてしまうことがある。繰り返し行っていることは，自分から行うことが増えてきた。
ク　手元に注目せずに手探りで物の位置を確認していることがあり，視野の狭さや見え方で少々不便があるようにも見受けられる。
ケ　手元に注目することで，細かいものをつまんだり，スプーンを自分から握って固形の物をすくったりできるようになってきている。
コ　要求が通らない時や眠い時，活動に気持ちが向かない時などに声を出したり，自分の頭を叩いたりする。褒められたり関わったりすることで気持ちを切り替えることが多く，交渉に応じて少しずつ気持ちに折り合いを付けることができるようになってきている。
サ　特定の人との関係を築き過ぎると固執してしまうことがある。いろいろな人との関わりが広がってきている。

②−１　収集した情報(①)を自立活動の区分に即して整理する段階

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
ウ　定時排せつで成功が増え，排尿の間隔も空いてきている。トレーニングパットで排尿の不快感に気付いて訴えることが見られた。	イ　歌ってほしい時や遊んでほしい時など，サインや身振り等で伝える。音楽やリズミカルな言葉遊びが好きである。 コ　要求が通らない時や眠い時，活動に気持ちが向かない時など声を出したり，自分の頭を叩いたりする。 褒められたり，関わったりすることで気持ちを切り替えることが多く，交渉に応じて，少しずつ気持ちに折り合いを付けることができるようになってきている。	エ　挨拶や返事の場面で，教師の声に合わせて発声することが増えてきている。 サ　特定の人との関係を築き過ぎると固執してしまうことがあるが、いろいろな人との関わりが広がってきている。	キ　繰り返しの学習で，単語と実物で結び付くものが増えてきた。簡単な指示を理解できているが，行動の途中で途切れてしまうことがある。繰り返し行っていることは，自分から行うことが増えてきた。 ク　手探りで物の位置を確認していることがあり視野の狭さや見え方で少々不便があるように見受けられる。 ケ　手元に注目することで，細かいものをつまんだり，スプーンを自分から握って固形の物をすくったりできるようになってきている。	オ　歩行は安定してきており，歩き続ける距離が伸びてきた。障害物に気付いてよけようとしたりする。かごなどの物を両手で抱えて歩いたり落とした物を拾ったりする。 カ　床や椅子等座った姿勢から一人で立ち上がる。同じ位置に安定して立ち続けることが難しいが，音楽に聴き入っている時などは安定して起立している。	ア　選択肢から好きな方や，発問に応じて分かっているものを選ぶことがある。 イ　歌ってほしい時や遊んでほしい時など，サインや身振り等で伝える。音楽やリズミカルな言葉遊びが好きである。

②−２ 収集した情報(①)を学習上又は生活上の困難や、これまでの学習の習得状況の視点から整理する段階

- 要求や拒否を自分から伝えようとするが，思い通りにならない時に，やり取りに応じて切り替えるまでに時間を要することが多い。（人，コ）
- 気持ちが向かない時や，見通しをもつことができない時などに，声を出したり，頭を叩いたりなどの自己刺激をすることがある。（心）
- 活動への意欲が，人とのやり取りによる気持ちの高揚に左右されることが多い。（心，人，コ）
- 特定の人との密な関わりから，少しずつ人との関わりが広がってきている。（心，人，コ）
- 段差などのない場所での移動等は，安全に移動できることが増えてきている。手元を注視することで道具等をうまく使うことが増えてきているが，活動の途中で気が逸れたり，注視せず手探りで行おうとしたりすることがある。（環，身）

②−３ 収集した情報(①)を3年後の姿の観点から整理する段階

- 関わる相手が変わっても，同じやり取りの仕方で気持ちを伝えたり応じたりしてほしい。（心，人，コ）
- 聞いて理解することができる言葉や，使い方が分かって操作できる道具を増やし，見通しをもって自分から活動に取り組めるようになってほしい。（環，身）
- 安全に一人で移動できる範囲を広げたい。（環，身）

指導すべき課題の整理

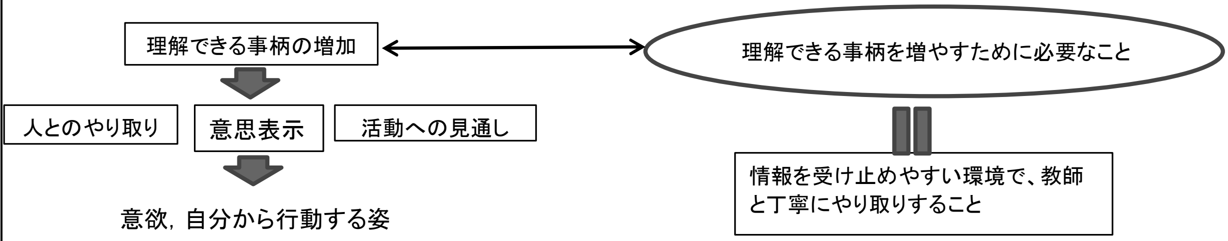
③　①をもとに②－１、②－２、②－３で整理した情報から課題を抽出する段階

・意思表示の方法を増やしたり，教師からの働き掛けを受け止めたりするために，体験を通して言葉の意味を具体的に理解する。（心，人，コ）
・今何をするかが分かって自分から取り掛かったり，必要なことに意識を向けて課題に取り組んだりする経験によって達成感を得ることを積み重ねて，活動に対する意欲を高める必要がある。（環，身）
・目的地や行き先が分かって自分から向かい，安全に気を付けて移動する。（環，身）

④　③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階

人との関わりが好きであるが，歌ってほしい，言葉遊びをしてほしいという気持ちが強く，その要求が通らない状況で気持ちを切り替えることが難しい。身近な教師とのやり取りを楽しみながら活動に取り組むが，活動そのものの理解が不十分なため，意欲をもって取り組んだり，達成感を得たりした経験が少ない。また，個別に言葉掛けや支援を受けて活動に向かうことが多く，自分自身で判断したり切り替えたりすることが少なかったため，受け身になってしまっている。

そこで，意欲をもって自分から行動することができるようになるために，自分で行うことが分かって活動に取り組み，自分でできたという達成感を積み重ねることが必要だと考えた。自分で行うことが分かるようになるために、情報を受け止めやすい環境で教師と丁寧にやり取りすることを重視し，その中で言葉の理解や意思表示方法の習得を促していく。



⑤　④に基づき指導目標を設定

課題同士の関係を整理する中で今指導すべき指導目標として	教師とやり取りしながら，自分から活動に取り掛かったり，気持ちを切り替えたりして活動に取り組む。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

⑥　⑤を達成するために必要な項目を選定する段階

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	（１）情緒の安定に関すること （２）状況の理解と変化への対応に関すること （３）障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること	（２）他者の意図や感情の理解に関すること （３）自己の理解と行動の調整に関すること	（２）感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること （４）感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること	（４）身体の移動能力に関すること （５）作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること	（１）コミュニケーションの基礎的能力に関すること （３）言語の形成と活用に関すること

⑦　項目と項目を関連付ける際のポイント

・〈活動に気持ちを向けて，自分から取り掛かるために〉〈一人でできることを増やすために〉
（心）（１）（２）と（人）（３）と（環）（２）（４）と（身）（５）を関連付けて設定した具体的な指導内容が⑧アである。

・〈言葉と，身振りや動きとの結び付きに気付いて，やり取りをすることができるように〉
（人）（２）と（コ）（１）（３）とを関連付けて設定した具体的な指導内容が⑧イである。

・〈目的に応じて，移動をスムーズに行えるようにするために〉
（心）（３）と（身）（４）とを関連付けて設定した具体的な指導内容が⑧ウである。

これらを一緒に行う教師が替わっても，同じように行うことができるようにするために設定した指導内容が⑧エである。

⑧　具体的な指導内容を設定する段階

選定した項目を関連づけて具体的な指導内容を設定	ア　情報を受け止めやすい落ち着いた環境で，必要なことに意識を向けて課題に取り組み，できたことに対する達成感をもつ。	イ　教師とのやり取りを通して，理解できる言葉を増やしたり，身振りやカードの選択等で意思を表出したりする。	ウ　場所や人の名前，手に持っている物を手掛かりにして，目的の位置へ移動する。	エ　いろいろな教師と活動を通じて同じコミュニケーション手段でやり取りをする。

Ｃ校　個別の指導計画　　年間計画　〔中学部　氏名　　　　　〕

※「流れ図」を活用して中心的な課題を整理したことによって、自立活動の指導の重点として取り組むことが明確になり、各教科等の目標の見直しにもつながりました。

前年度の 評価と課題	・自分のやりたい活動を選んで伝えたり，自分の気持ちを示したりするサインや行動が多く見られるようになってきた。挨拶や返事などでは，教師の声に合わせて発声することが増えてきており，礼や挙手，サインに合わせて発声することに継続して取り組んでいきたい。 ・着替えのかごや椅子などの大きな物を持って歩いたり，落とした物を立ったまま拾ったりすることができるようになった。また，単語で目的の場所を伝えることで，場所が分かって一人でも歩いて向かうことができるようになってきた。 ・友達からの誘いを受け，友達と一緒に制作に取り組んだ。今後は，友達と一緒に活動に取り組む場面だけでなく，一人でも活動に手を伸ばして取り組む力も身に付けていきたい。
学校生活上 学習上の保護者 ・本人の希望等	・友達や先生に歌ってもらうなどして楽しく関わりたい。 ・好きな音楽を聴いたり，好きな本を読んでもらったりしたい。（本人） ・自分でできることが，今よりステップアップできるようになってほしい。 ・集団の中で言葉や周りの様子を手掛かりに行動したり，流れが分かって取り掛かったりしてほしい。（保護者）
年間の目標	・自分から行動したり，周りの様子に合わせて行動したりすることを増やす。 ・自分の気持ちを伝えたり，相手の言葉に応じたりしながら，見通しをもって活動に向かう気持ちを高める。 ・足元や進行する方へ注意を向けて，安全に歩行する距離を延ばす。
評価と課題	

教科等	これまでの学習の様子	年間目標	評価
自立活動	・行く場所を言葉掛けしたり，道具を渡したりすることで，目的の場所に向かって歩くことができる。 ・食べ物や動物，身近な道具などのカードを１０枚程度の中から，かるた形式でマッチングすることができる。 ・鉛筆などの細いものも持ち続けられる時間が長くなり，縁取りをすることで枠を意識して色塗りができるようになってきた。 ・教師の近くまで歩いて，肩を叩いて話し掛けたり，サインや手を伸ばして自分の気持ちを伝えたりすることが増えてきた。 ・教師と一緒に椅子を持って教室移動をしたり，ファイルや帽子を落としたときに自分で拾ったりすることができるようになってきた。 ・２０ｃｍのバーをまたぐ，階段を上り下りするなどの練習に取り組んだ。段差があることが分かって足を動かすが，足元を見ないことが多く，バーに足が引っかかったり，段差を飛ばしたりすることがある。	・教師とやり取りしながら、自分から活動に取り掛かったり、気持ちを切り替えたりして活動に取り組む。 〈具体的な指導内容〉 ・情報を受け止めやすい落ち着いた環境で，必要なことに意識を向けて課題に取り組み，できたことに対する達成感をもつ。 ・教師とのやり取りを通して，理解できる言葉を増やしたり，身振りやカードの選択等で意思を表出したりする。 ・場所や人の名前，手に持っている物を手掛かりにして，目的の位置へ移動する。 ・いろいろな教師と活動を通じて同じコミュニケーション手段でやり取りをする。 （R１.10月　改訂）	
作業学習	・端を剥がすと，自分から手を伸ばして牛乳パックのラベルを剥がし，ゴミとしてかごに入れることができる。 ・つかむ場所を示すと，そこを引っ張るようにしてパルプを両手でちぎることができる。 ・教師の言葉掛けを受けて，報告先の教師の近くまで作った物を持って行き，肩を叩いて呼び掛けた後に手渡すことができるようになってきた。	〈作業Ⅰ：エコグループ〉 ・~~自分から手を伸ばして牛乳パックのフィルムを剥がす回数を増やしていく。~~ ・活動の流れに沿って，道具を手掛かりにして行うことが分かり，自分から取り掛かる。 （R１.10月改訂） ・自分から報告の場所へ向かい（R１.10月改訂），発声をしたり，両手でできた物を手渡したりして報告を行う。 〈作業Ⅱ：農作業〉 ・自分の役割が分かり，時間いっぱい安全に，教師と一緒に取り組む。 ・教師や友達の近くまで歩き，発声したり，両手でできた物を手渡したりして報告を行う。	

〔資料Ⅰ－３〕　自立活動の指導　各担当者の実践記録

令和元年度の「授業改善プロジェクト」担当者が実践した、自立活動の指導の記録を紹介します。担当者の記録から、各校において、自立活動の指導の改善を目指した取組が始まっていることを確認することができます。

自立活動の指導の改善・充実を確実に進めていく上で、実践の記録を残すことは、非常に効果的です。「授業改善プロジェクト」の実践記録の様式を用いる際には、次の視点で記録をまとめることや記録を読み返すことが、実践そのものの評価にもつながります。

・「１　個別の指導計画の作成」の経緯を、記入上の留意点に示された内容を入れながら、分かりやすく示しているか。
・「１　個別の指導計画の作成」との関連が明確な「２　対象単元（題材）の計画」になっているか。
・「３　評価」が、自立活動の指導目標・内容の改善や修正等につながるものになっているか。

（様式）

自立活動の指導　実践記録（記入上の留意点）

対象児童生徒	学部	障害の種類・程度や状態等	
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔　　〕各教科等における自立活動の指導（　　　　　　　　　　） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元（題材）名			
１　個別の指導計画の作成			
どのような考え方で自立活動の目標や指導内容を設定したのかが分かるように、次のような内容を入れて作成してください。 ・対象児童生徒の学習上・生活上の困難 ・困難の背景要因として考えられること ・既にできていること、支援があればできること ・対象児童生徒に望む、〇年後の姿 ・困難を改善・克服するために、現段階で中心となる課題			
２　対象単元（題材）の計画			
自立活動の目標や指導内容を踏まえて、対象とした授業をどのように計画したかが分かるように、次のような内容を入れて作成してください。 ・単元（題材）の目標 ・対象児童生徒の学習活動 ・指導方法、手立て			
３　評価			
単元（題材）における対象児童生徒の学習状況や変容、それに基づいた指導の評価について記載してください。			

自立活動の指導　実践記録①

対象児童生徒	小学部	障害の種類・程度や状態等	弱視
対象授業	〔 ○ 〕自立活動の時間における指導 〔　　〕各教科等における自立活動の指導（　　　　　　　　　　） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	○○○出版　読み聞かせ会にようこそ！		

1　個別の指導計画の作成

対象児童は、興味・関心や必要感をもてる制作活動などには意欲的に取り組む。また、身近な教師や友達と話すことを好み、周りの様子を見て友達を気遣う場面などがよく見られる。一方で、学習上・生活上の困難として、「興味・関心の有無によって、集中力や学習意欲の低下が見られること」、「学習用具を思うように使えないこと」、「場面や相手によっては、声が小さかったり、反応がなかったりするため、意思疎通が難しいこと」等がある。これらの背景要因としては、「手指の巧緻性の低さ、弱視による情報不足、視覚認知の弱さ」、「自信のなさや集団活動の経験不足、語彙の少なさ」等が考えられた。このような実態を踏まえ、小学部卒業時までに望む姿として、「学習用具の効率的な使い方及び日常生活動作での手指の動かし方を身に付けること」、「挨拶や意思の伝え方などコミュニケーションの基礎的な能力を身に付け、学習や生活の中で実践すること」を想定した。

以上のことから、「自分を肯定的に捉え、学習や人との関わりに積極的に臨むことができるようになるために、見えにくさや視覚認知の弱さ、手先の不器用さを補うための方法を知り、身に付け、自信をもつこと」を中心的な課題として導き出した。

よって自立活動の目標を「手指の動かし方や力加減が分かり、定規やコンパス、はさみなどの学習用具の使い方、ひもの結び方等の日常生活動作を身に付ける」等とし、指導内容を、「定規やはさみの使い方やひもの結び方などを、スモールステップで覚え、課題に取り組んだり、作品を作ったりする」と設定した。

2　対象単元の計画

単元の目標は、「手指の動かし方や力加減を自分で考えながら、定規やのりなどの学習用具の使い方を身に付ける」、「相手が聞きやすい声の大きさや読むスピードを意識して読み聞かせをする」、「絵本づくりや読み聞かせなどを通して、自分でできることが増えたり、様々な人に称賛されたりすることで自己肯定感を高め、活動に意欲的に取り組む」である。主な学習活動としては、「定規で線を引いたり、写真を切ったり張ったりしながら絵本を制作すること」、「読み聞かせ会をすること」の二つとした。

絵を描くことを好む児童が、意欲をもって活動するために、定規で線を引くことでイラストが完成する課題を設定した。その中で、定規のよりよい使い方を考えたり練習したりする場面を設けた。また、主体的に絵本づくりを進めていけるように、必要な道具を取り出しやすい環境調整を行う場面を設定したり、絵本の台紙のページ番号を自分で確認することができるように絵本の見本を準備したりした。

3　評価

児童が学習用具の効率的でやりやすい使い方を考える場面を設定したことで、自分自身でよりよい使い方に気付くことができた。学習用具の操作のしやすさを実感したことで、定規を使って直線を引くことに自信をもち、定規を使うことへの抵抗感がなくなった。教科の授業の中で、ノートテイクの際にも、自ら定規で線を引く姿が見られた。また、活動ごとに使う物をケースに入れることで、必要な物を準備したり、机上を整理したりすることが定着してきた。整理整頓されていると物の出し入れがしやすいこと、活動しやすいことを実感したことで、日常生活の中でも、机上や教室のロッカーを整理整頓し、整理整頓された状態を保とうとする姿が見られる。

今後は、はさみなど効率的に使える学習用具を増やすなど、児童が様々な活動に自信をもてるように自立活動の指導を継続していきたい。

自立活動の指導　実践記録②

対象児童生徒	小学部	障害の種類・程度や状態等	聴覚障害
対象授業	〔 ○ 〕自立活動の時間における指導 〔　　〕各教科等における自立活動の指導（　　　　　　　　　　　　） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
題材名	トランプ遊びをしよう		

1　個別の指導計画の作成

対象児童は、高学年という自覚をもち、落ち着いて行動したり、相手に合わせたコミュニケーションの仕方を考えたりする態度が身に付いてきている。一方、学習上・生活上の困難として、「手話で話したことを文章で適切に書き表すことが難しい。」「深い内容までやり取りできる相手が限られている。」等がある。背景要因としては、「日本語と手話の力に差があり、読み書きの学習に消極的である。」「聞こえにくさにより音韻意識が十分でなく、手話を日本語に言い換えると母音の口形や音数が合わず、話の内容が分かりにくいことがある。」等が考えられた。この現状を踏まえ、小学部卒業時の姿としては、「手話でのやり取りにより言語の概念や思考が育つこと」「読み書きの力の大切さを理解し、経験したことや考えたことを日本語で表現できること」「身近な人との信頼関係をベースに、周囲の人と適切な関わりができること」を想定した。

以上のことから、課題同士の関連を「人間関係」「コミュニケーション」の視点で整理し、現段階での中心的な課題として、「自分が伝えたいことを伝え、相手の話を理解できる日本語の力の育成」を導き出した。

よって、自立活動の目標を「日本語の読み書きを使用したやり取りを楽しむ。」「身近な人とのやり取りや学習場面で経験したこと、気持ちを３～５文節文で話したり書いたりする。」、主な指導内容を、「語彙を拡充し、３～５文節文で表現する。」、「本人の手話表現について、教師が日本語に置き換えたものを話したり書いたりする。」と設定した。

2　対象題材の計画

題材の主な目標は、「遊び方の文章を読み取って、行動に移す。」「家族や友達に遊び方を説明して一緒に遊ぶ。」である。対象児童がこの目標を達成するために、「遊び方の文章を読み取る。」「『カードをめくります。』等、声に出しながらゲームをする。」の二つを、主な学習活動とした。

文章を読み取る際は、読みへの苦手意識を感じないよう、初めにトランプで遊んだ経験を話す活動を盛り込んだ。「何種類のカードがあるか。」「何枚ずつあるか。」等のやり取りをしながら、マークや枚数、ゲームの名前を板書して手掛かりになるようにした。また、児童の手話での話を聞きながら「きる」「配る」「めくる」等の適切な言葉を用いて、「カードをきったら、２枚ずつ配る。」のように板書し、児童にも復唱を求めることで、神経衰弱等の遊び方のイメージと言葉を結び付けた。その上で、一文の長さを４～５文節程度とした文章を提示した。

ゲームをする活動では、家族に遊び方を説明した上で一緒にゲームをする宿題を出し、意欲付けを図った。文章に合わせて遊びながら、日本語での表現が定着できるように、自分の行動に関する文を声に出したり、書く活動を設けたりした。また、勝敗が決まった際などの心情の動きを表現しやすいように、表情のイラストや吹き出しを使用した。

3　評価

初めは、学習時間にトランプをすることへの戸惑いを感じていたが、指導を通し読み取りへの意欲、そのとおりに遊んで言葉と行動を対応させること、他の人にも説明して一緒に楽しむことに結び付いた。今後も、児童の興味・関心に即した教材を用いて、楽しみながら文章を読んだり書いたりするとともに、日本語を介して周囲との関わりを広げていくことを目指した指導を検討していく。

自立活動の指導　実践記録③

対象児童生徒	中学部	障害の種類・程度や状態等	未熟児網膜症
対象授業	〔 ○ 〕自立活動の時間における指導 〔　　〕各教科等における自立活動の指導（　　　　　　　　　　　　　） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	単独帰省に向けて		

１　個別の指導計画の作成

対象生徒は、中学部より本校に入学し、その際に初めて白杖を所持している。１年生の時は通学生でスクールバスを利用しており、自宅からバス乗降場所までを単独歩行できるようになりたいという希望に基づき白杖を使った歩行指導を行い、３００ｍほどではあるが、一人で通学できるようになった。２年生になってからは寄宿舎生になり、寄宿舎から自宅まで、公共交通機関を利用し単独帰省したいという本人と保護者の希望に基づき歩行指導を行い、意欲的に取り組んでいる。生徒はこれまで外出時は、保護者の送迎や家族の手引きで移動しており、公共交通機関の利用が非常に少なく、弱視レンズを利用して情報を得る経験が不足している。また常に誰かと行動を共にしているため、自分で環境を把握する力や自分で判断する力の弱さが見られる。そのため、休日等に一人で公共交通機関を用いて外出することはほとんどなく、外出に不安を感じている。さらに、中学部卒業時は一般高校進学も視野に入れている。このような状況を踏まえ、中学部卒業時の姿として、「歩行技術を身に付け、校外で積極的に情報収集すること」を想定した。

以上のことから、現段階で中心となる課題として、「公共交通機関の利用の仕方を身に付けること」「自分の見え方を理解し、対応した行動をとることができるようになること」「弱視レンズを用いて、公共施設等の構造や交通機関利用の仕方の理解を促し歩行への自信につなげ、外出したい気持ちを育てること」を導き出した。

よって自立活動の目標を、「単独帰省の際の移動に必要な知識・技術・マナー等を身に付ける。」とし、指導内容を「路線バス、電車の利用の仕方を覚え、自分で判断して安全に、『学校～Ａ駅～Ｂ駅間』を移動する。」と設定した。

２　対象単元の計画

単元の目標は、「単独帰省するための安全な歩行技術や公共交通機関の利用の仕方を身に付ける。」である。対象生徒がこの目標を達成するために「学校から最寄りのバス停までを安全に歩行する。」、「路線バスを利用し安全に移動する。」、「Ａ駅からＢ駅まで電車を利用し、安全に移動する。」の三つを主な学習活動とした。

始めに自分の見え方を理解する学習を行った。信号の表示が見えているか、時間帯によって見え方はどう変わるか、バス停の所在にどの程度の距離で気付くかなどを、生徒自身が理解できるようにした。また、学校からＢ駅までの歩行について、ランドマークの確認の仕方やルート周辺にある公共施設の地図理解も行い、自分の言葉で説明できるようにした。さらに、公共施設や公共交通機関利用時のマナーや援助依頼の方法、電車やバスの不通時など、緊急時の対応等の学習も行った。

３　評価

安全に移動するスキルが身に付いただけでなく、自分の苦手なことが分かり、その際にどのようなことに気を付ければよいかを意識して行動する様子が見られた。帰省前に、単独帰省することを待ちわびていたり、寄宿舎では自分で計画を立てて外食したりする様子も見られた。また、公共交通機関の時刻表の読み方を理解したことで、兄弟と駅で待ち合わせをしたり、バス時刻に間に合うように事前に持ち物を準備したりする様子も見られた。休日には友達とＡ駅で待ち合わせをして遊ぶこともできた。

今後は、「単独で移動できる場所を増やすこと」、「積雪時の歩行の仕方を身に付けること」に関する指導を行い、生徒の行動範囲の拡大を図っていきたい。

自立活動の指導　実践記録④

対象児童生徒	小学部	障害の種類・程度や状態等	自閉症
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（　国語　） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	はなしてみよう		

1　個別の指導計画の作成

対象児童は、学校生活にも慣れ、一日の流れに見通しをもって過ごしている。一方、学習上・生活上の困難として、「独り言を小さい声で話したり、オウム返しをしたりすることが多く、言葉でのやり取りはあまり成立しない」、「自分の気持ちを相手にうまく伝えられず、怒ったり、泣いたりする」、「うまくできなかったり、間違えたりすると物を投げたり、机を叩いたりする」等がある。これらの背景要因としては、「これまで、泣く・大きな声を出す・物を投げる・叩くなどの表現をすることで、相手が対応してくれていたこと」、「依頼や相談の仕方が分からないこと」、「できないことや間違うことが失敗だと思っていること」等が考えられた。現状を踏まえ、小学部高学年時の姿としては、周囲と関わる経験を重ね、自分の要求が相手に伝わる嬉しさを味わったり、失敗や間違ってもやり直し、成功体験を積み重ねたりすることで、「困ったときは、困ったことを言葉で相手に伝える」を想定した。

以上のことから、現段階で中心的課題として、「困ったときやうまくできないときに、相手に言葉（二語文）で伝えること」、「身の周りにある物や日常生活で使う物などの名前や動作を表す言葉（単語）を覚えること（分かる言葉を増やすこと）」、「たくさんの人と関わり、言葉でやり取りする経験をすること」を導き出した。

よって、自立活動の目標を「困ったとき、教師に　『○○やって』と言葉で伝える（依頼する）。」、指導内容を「事前に依頼の仕方を一緒に練習したり、場面を捉えて相手に困っていることを言葉で伝えたりすること」、「日常生活で使う物の名前や動作を表す言葉（単語）を覚えること」、「日常の場面で、体験したことを言葉で伝えること」と設定した。

2　対象単元の計画

単元の主な目標は、「自分から話す」である。対象児童がこの目標を達成するために、児童の興味・関心の高いイラストや、日常生活でよく目にしたり、使ったりする物を用いて、繰り返し学習活動を行った。単元の初めや学習の流れに慣れるまでは、不安な気持ちを軽減するために、教師が見本を見せたり、一緒に行ったりしてから活動を展開した。また、教材は間違えてもやり直しができるものを準備した。

「日常生活で使う物の名前をはなしてみよう」では、イラストカードと実物を一緒に提示した。実物に実際に触ったり、使ったりしながら言葉を覚えるような学習を行った。動作を表す言葉の学習では、動作のイラストの他に体験した活動の写真を見せて、「これなあんだ」とクイズ形式にして、楽しみながら児童の言葉を引き出す学習を行った。

3　評価

最初は教師と一緒に時間をかけて活動を行い、段階的に難易度を上げていくようにした。学習活動を繰り返し行うことで、国語の授業だけでなく、学校生活全般で自分から相手に、言葉（単語）で伝えようとする姿が見られるようになってきた。また、イラストや写真に写っているものが分からない場合には指さし、「これ何」と質問するようになった。間違えたときは、教師がやり直し（書き直し、貼り直しなど）の仕方を見せ、一緒に行うことで、やり直せることが分かってきた。このような学習活動を通して、情緒面が安定し、学校生活全般で落ち着いて過ごす時間が多くなった。

自立活動の指導　実践記録⑤

対象児童生徒	小学部	障害の種類・程度や状態等	知的障害、自閉症
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（こくご・さんすう） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	どっちかな？なんだろう？		

１　個別の指導計画の作成

対象児童は、担任を中心とした大人と簡単な言葉を用いてコミュニケーションを図れるようになってきている。また、短い時間であれば、着席して課題に取り組むこともできる。一方、学習上・生活上の困難として、「課題に取り掛かるまでに時間が掛かる」「手元や対象物への集中を持続することが難しい」「言葉でのやり取りの前に行動してしまう」などがある。これらの背景要因としては、「取り組むべきことが明確に理解できていない」「課題に取り組むための姿勢（体の向き、机との距離、足の位置）が整っていない」「言葉での伝え方や伝えるタイミングが分からない」等が考えられた。現状を踏まえ、小学部卒業時の姿としては、「活動に見通しをもち、自ら課題に取り組む」「４５分間、着席して課題に取り組む」「言葉でやり取りしてから行動に移す」「周囲と関わる経験を重ね、教師や友達との関わりを楽しむ」を想定した。

以上のことから、現段階で中心となる課題として、「課題に見通しをもち、最後までできることや分かることを増やすこと」「学習活動を通して教師と関わり、気持ちを共有する楽しさを経験すること」を導き出した。

よって、自立活動の目標を「人とのやり取りを通して、コミュニケーションの力を高められるようにする」、指導内容を「絵本などを介して教師と様々なやり取り（模倣、質問応答、選択等）をすること」「流れに見通しをもち、課題に着目して三つの課題に取り組むこと」と設定した。

２　対象単元の計画

単元の主な目標は、「手元や対象物に着目しながら手指を使った活動に２０分間程度取り組む」「身近な人や物と関わりながら、話したり、覚えたことを答えたりする」である。対象児童がこの目標を達成するために、「やり取りをしながら二つの対象物から一つを選択する」「読み聞かせの中で教師の模倣をしたり、簡単なやり取りをしたりする」の二つを主な学習活動とした。

「やり取りをしながら二つの対象物から一つを選択する」については、対象の絵カードに集中できるよう、児童が興味のある物のイラスト（動物、食べ物等）を用いた。初めは、二つを示してから「○○はこっちだね。」と片方を渡し、二つから選ぶということに慣れるようにした。また、教師が示したカードや自分の手元に着目できるように、提示する位置をいくつか試した。

「読み聞かせの中で教師の模倣をしたり、簡単なやり取りをしたりする」では、児童の生活に身近な絵本（あいさつ、きがえ等）を介し、児童になじみのある擬音語や擬態語を用いることで模倣しやすくなるようにした。また、カードを受け取るときには、ゆっくり受け取ることができるよう「どうぞ」「ありがとう」などのやり取りを交えることを繰り返すこととした。

３　評価

児童の興味に基づいた課題を用意し、それらの活動を繰り返すことで、示された二つの絵カードから正しい一つを選択できることが増えた。また、教師の模倣をすることで、選ぶときに「こっち」と言い添えられるようにもなってきている。今後は、担当教師と行っているやり取りを他の大人や友達とのやり取りにも広げていきたい。

課題に取り組む際の姿勢を整えることで、絵カードを貼ったり選んだりするときに、対象物や手元に着目できることが多くなった。着目したり集中したりできる時間をさらに増やしたい。

自立活動の指導　実践記録⑥

対象児童生徒	小学部	障害の種類・程度や状態等	知的障害
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ◯ 〕各教科等における自立活動の指導（生活単元学習） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	うどんやⅡ～お客さんにおいしいうどんを振る舞おう～		

1　個別の指導計画の作成

対象児童は、前籍校で集団学習に参加できることが少なかった。学習上・生活上の困難として、音、触感などの過敏性や関わりの困難さから不快を感じると、表情が険しくなる、視線が定まらなくなる、奇声をあげる、学習活動から逸脱するなどの様子が見られた。その背景要因として、過敏性とともに、不快に感じた場面で学習から逸脱しても良いという誤学習の積み重ねが考えられた。転入してから逸脱行動があった際に理由を問うと、不快な原因を話すことができ、一緒に解決策を考えることで、本人も納得して学習に参加することができた。現状を踏まえ、小学部３年修了段階の姿として「不快な気持ちを言葉にして教師に伝え、解決方法を一緒に考えること」を想定した。

以上のことから現段階で中心となる課題として「不快な気持ちになったときに、言葉で表現できること」、「表現したことが伝わったという経験を積み重ねること」を導き出した。

よって、自立活動の目標を「不快な感情を言葉にして教師に伝え、解決方法を一緒に考える。」、指導内容を①学習内容をイラストや写真で伝え、苦手と思われる場面を一緒に考える、②どうすれば解決できるのか、具体案を挙げて一緒に解決方法を考える、③選択した方法で試してみてどうだったのか振り返ると設定した。

2　対象単元の計画

単元の目標は「身振りや言葉で自分の気持ちを表現したり、相手に依頼したりして、友達と協力して活動する」である。対象児童は①粉と水を混ぜる、②生地を踏む、③生地を量る工程を担当した。教師と一対一で学習することが多く、友達と協力して取り組むという経験が少ないため、今回の授業の中では、友達と順番を交代しながら生地を踏む、生地を量り終えたら次の工程の友達に「お願いします。」と言って渡す活動を設定した。

対象児童が苦手と想定できる活動・場面（友達と肌と肌が触れ合う活動や、自分の意図に沿わないこと等）があるとき、イラストや写真を活用して、具体的に活動内容を伝えた。生地を踏む活動では、顔写真のカードを活用し、踏む順番と友達と交互に活動することを伝えた。また、生地を量り友達に渡す場面で、どのように伝えればよいか分かりやすいように「フレーズカード」を準備した。意図に沿わないことがあり、不適切な行動などが見られた場面では、教師から問い掛け、自分の気持ちをイラスト等で描くよう促し、不快であったことを共有した上で、一緒に解決方法を考えた。

3　評価

単元が始まったころは一人でやりたいと主張していたが、友達とグループで活動すること、順番や活動の仕方などのルールを伝えると学習に向かうことができた。生地を踏む活動では、順番を意識し、前の友達が終わると、すぐに生地のところに移動して踏むことができた。また、順番を忘れている友達の肩を叩いて教えてあげるという場面もあった。生地を量って、次の工程の友達に渡す場面では、友達に直接渡すことに抵抗が見られたが、生地を入れる容器が分かると、小さい声で「お願いします」と伝えて、容器にゆっくりと置いて渡すことができるようになった。

意図にそぐわない場面として、うどんを踏むときの曲が踏みたい曲ではないということで離脱することがあったが、教師と話し合い、次の時間には好きな曲を流すことを約束すると納得して参加することができた。

自立活動の指導　実践記録⑦

対象児童生徒	小学部	障害の種類・程度や状態等	知的障害
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（生活単元学習） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	劇団すごろくパート２～１２月公演「のらねこぐんだんパンこうじょう」～		

１　個別の指導計画の作成

対象児童は、人との関わりがとても好きで、自分のことや友達の様子を周りの人に指差しや言葉で伝え、自分の思いを認めてもらったり共有したりしたい児童である。

学習上・生活上の困難として、「友達と関わりたい気持ちが強いため、相手の状況に関わらず話したり、自分へ注目させようとしたりする」「様々な活動に意欲的であるが、早く次の活動に移ろうとする」「周りの様子が気になり、活動に集中できない」等がある。これらの背景要因として、「友達との適切な関わり方が分からず、必要以上にアピールをしてしまう」「本人の体調や疲れ具合によって過剰な関わり方をする」「活動のゴール（完成形）は理解できるが、活動の過程を理解することが難しい」「一緒に活動する友達（グループ）や場所によって、集中できる時間等が違う」等が考えられた。

現在、「相手の名前を呼んでから、話し始めたり関わったりすること」「細分化された活動の手順に従って、集中して活動に取り組むこと」「手をつないだり、並んで歩いたりすることで相手のペースに合わせること」ができつつある。

現状を踏まえ、小学部卒業段階で「友達との適切な関わり方を覚え、自分の気持ちや要求を相手に伝える」「自分のやるべき活動に集中できる時間を伸ばしたり、場面を増やしたりする」ことを目指している。以上のことから、現段階で中心となる課題として、「話し方や関わり方を覚え、相手に伝わっていることが分かること」「本人が集中できる活動の終わりまでの手順を理解すること」を導き出した。

よって、自立活動の目標を、「自分の気持ちや経験を、相手に伝わるように２～３語文で話す」「一連の学習活動に見通しをもち、５分以上集中して取り組む」と設定した。

２　対象単元の計画

単元目標は、「劇の発表や招待することを楽しみに、自分の役割が分かって取り組んだり、進んで制作活動や劇の練習をしたりする」「学習用具や材料を選んだり、作り方について教師や友達に相談したりしながら、友達と協力して小道具やチケットなどを制作する」「役になりきり、相手に伝わるようにせりふを話したり、声や身振りなどで表したりする」とした。

主な学習活動として、劇に必要な小道具の制作や劇の練習、友達や教師を招待する活動、発表の本番とお客様へのおもてなしを設定した。

「みんなに向けて話したい」「友達や先生に見てもらい喜んでほしい」という気持ちを尊重し、お知らせ係や、発表を見にきてくれたお客様へ自分たちで作ったクッキーを渡す等のおもてなし係を役割とした。また、本人に分かる手順を提示したり、毎時間がんばり発表を設けたりした。

３　評価

お面や小道具等を制作する活動では、本人が理解して取り組めるように手順を細分化して伝えたり、見本と同じように作る時間と自分のアイディアを入れて自由に作る時間を設けたりすることで、活動自体に集中して取り組める時間が伸びた。また、相手が喜んでいる様子を見て自分の話したことが伝わったことが分かり、笑顔になったり嬉しい気持ちを教師に伝えたりした。

今回の生活単元学習の授業の中でできるようになったことが、今後自然な関わりの中でできるように、本人の気持ちに添いながら、実践する場面を休み時間や遊びの指導の時間へ、伝える相手を学級の友達から学部の友達へなど、段階的に実践する場面を広げていきたい。

自立活動の指導　実践記録⑧

対象児童生徒	小学部	障害の種類・程度や状態等	精神遅滞、自閉傾向、ADHD
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（生活単元学習） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	１０才おめでとうパーティーがんばるぞ～ぼくらどらやきつくり隊～		

１　個別の指導計画の作成

対象児童は、繰り返し取り組むと活動ややり方が分かり、一定時間一人で取り組むことができる。一方、学習上・生活上の困難として、「初めて、または通常と違うことには不安定になる」「じっとしていること、話を聞く活動は苦手で、１０分程度で離席することが多い」等がある。これらの背景要因としては、本児の障害特性である多動傾向や自閉傾向、衝動性が強いこと等を踏まえ、「興味が限られ、それ以外の事柄や言葉が広がりにくい」「パターン化した発言や反応を好む」「たくさんの人の刺激が入ると、活動に取り組みにくい」等が挙げられる。現状を踏まえ、３年後（小学部卒業まで）の姿としては、「活動に集中する時間が増える」つまり、「座学で活動する時間が増えている」ことを想定した。

以上のことから、現段階で中心となる課題として、「言葉や絵カードを手掛かりにして見通しをもてるようになること」「興味・関心のあるものから徐々に注意を向ける対象を広げ、注意を持続すること」を導き出した。

よって自立活動の目標を、「気持ちを安定させて一定時間友達と一緒の活動に取り組む」とし、指導内容を「興味・関心のあることや体験したことを言葉やイラストで伝えたり、やり取りしたりすること」「友達と一緒の場所で、好きな活動、繰り返し行える活動に一定時間持続して取り組むこと」と設定した。

２　対象単元の計画

単元の主な目標は、「パーティーの準備を通して、保護者に喜んでほしいという気持ちをもち、協力して調理や製作活動に取り組む」「担当する工程や材料・道具の名称や使い方が分かり、進んで取り組み、自分の役割をやり遂げる」である。対象児童がこの目標を達成するために、どらやき作りでは、「一人で必要な道具を持ってきて、どらやきの皮作りをする」「教師や友達と確認して机のカバーを外したり、皿を持ってきたりする」の二つを、主な学習活動とした。

生地作りでは、必要な材料や道具を一か所にまとめておき、自分で必要なもの、または足りないものに気付いて取りに行くようにした。皮をホットプレートで焼くときは、「ポツポツしてきたね」を合言葉にし、すぐにひっくり返そうするときは「まだポツポツしてないね」と言葉を掛けながら、次々ひっくり返そうと急ぐ気持ちをなだめるようにした。机のカバーを外したり、皿をセッティングしたりするときは、その場から離れないように教師主導で言葉を掛け、「○○してください」と明確に役割を伝えるようにした。

３　評価

対象児童の好きな工程（生地を作る、焼く）を担当にした結果、「待ちの時間」が減り、いらいらしたり、混乱したりすることがなくなり、自分の覚えた経験を生かして、一人で活動するようになった。また、曖昧だった材料の名前を覚え、足りないものがあるときは自分で探しに行ったり、レシピを指さして教師に聞いたりするようになった。

自分の役割を明確にすることで、最後まで自分で取り組もうとする気持ちが表れ、過度に調理中に教室内を動き回ったり、ズックやマスクを取ろうとしたりすることが減り、気持ちを向けて持続して取り組む上で効果的だった。今後も一定時間持続して取り組めるように、本人の得意な活動を取り入れ、明確な役割のある活動を検討していく。

自立活動の指導　実践記録⑨

<table>
<tr><td>対象児童生徒</td><td>小学部</td><td>障害の種類・程度や状態等</td><td>ADHD、挑戦性反抗障害、適応障害</td></tr>
<tr><td rowspan="3">対象授業</td><td colspan="3">〔　　〕自立活動の時間における指導</td></tr>
<tr><td colspan="3">〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（生活単元学習）</td></tr>
<tr><td colspan="3">〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導</td></tr>
<tr><td>単元名</td><td colspan="3">ぼくらのカフェ～おとうさん、おかあさんを招待するぞ！～</td></tr>
</table>

1　個別の指導計画の作成

学習面において「注意散漫なことや自分の思い通りにできないことがあると短時間で活動から逸脱してしまうこと」や「予定変更や初めての活動に不安を感じること」などの様子が見られる。その背景要因としては、障害特性だけではなく、様々な経験の不足や成功体験の少なさなどが考えられる。

生活面において「生理的な欲求が満たされなかったり、自分の意見が通らなかったりした場合などに不安定となり、逸脱したり物に当たってしまったりすること」などの様子が見られる。その背景要因としては、相手の気持ちを推し量ることの苦手さから、自分中心に話してしまうことなどが考えられる。

そこで中学部卒業までの姿として「多様な活動経験を通し興味・関心を広げ、得意な活動から成功体験を積み重ねていること」や「学校生活の中でたくさんの人と楽しく関わりながら、様々な考えがあることを受け入れていること」を想定した。

現在の中心課題として「興味のある活動や本児が得意な活動から成功経験を積み重ねること」や「自分の考えや意見を教師や友達に伝え、簡単な決まりを守って楽しく人と関わること」を導き出した。よって自立活動の目標を「楽しかったことや自分の伝えたいことを教師に伝える」「教師からの問い掛けに応じて自分の気持ちを話し、クールダウンに向かったり、気持ちを切り替えたりする」「学級の簡単なルールを守って学校生活を送る」とした。

2　対象単元の計画

単元の主な目標は「主体的に自分の役割に取り組み、Tシャツのイラストやコースター、エプロンの刺繍などの完成やカフェの成功から自信を積み重ね、自分から活動に向かう」である。対象児童が目標を達成するための活動として、エプロンに刺繍を施す活動とオリジナルメニューを考える活動とした。エプロンの色を学級の児童一人一人に合わせて決めたり、メニューを自分で考えたりするなど、相談しながら自己決定する場面を増やした。また、刺繍では型をなぞるだけで下絵が写る補助具や縫い幅の見本を用意し、一人でできるような環境設定を工夫した。

カフェの開店に向け、盛り付けと接客に分け、繰り返し練習を行った。対象児童は、自分が考えたお菓子の盛り付けと盛り付けの最終確認を担当した。盛り付けから接客担当が運ぶまでの動線を工夫し、最終確認したものを接客係に渡すようにし、達成感につながるようにした。

3　評価

刺繍の活動を繰り返したことで、丁寧さが増したり自信をもって活動に取り組もうしたりとする姿が増えた。調理においては、他学部の教師にも作りたいと自分から積極的に取り組んだ。また、カフェの中で他の友達を手伝う姿も見られた。さらに、興味のある活動や得意な活動を中心に繰り返したことで自信を積み重ね、制作の過程で分からないことや迷うことがあった場合に、自分から教師に相談して解決しようとするなど、自分から伝えようとする様子が見られた。

「興味のある活動や得意な活動を中心に活動設定すること」で、自分から活動に向かおうとしたり、その活動を通して他人にも関わろうとしたりする姿につながった。今後はこれらのできるようになってきている事柄からさらに成功体験を重ね、たくさんの人と関わることができる活動を設定していきたい。

自立活動の指導　実践記録⑩

<table>
<tr><td>対象児童生徒</td><td>中学部</td><td>障害の種類・程度や状態等</td><td>精神運動発達遅滞　　脳性まひ</td></tr>
<tr><td rowspan="3">対象授業</td><td colspan="3">〔　　〕自立活動の時間における指導</td></tr>
<tr><td colspan="3">〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（作業学習）</td></tr>
<tr><td colspan="3">〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導</td></tr>
<tr><td>題材名</td><td colspan="3">「油スイトールン♪」の製作～いとく販売会に向けて</td></tr>
</table>

1　個別の指導計画の作成

対象生徒は、人との関わりを好み、身振りやサインで歌ってほしいという要求を伝えたり、やり取りを楽しみながら言葉掛けに応じて活動に取り組んだりしている。一方、学習上・生活上の困難として「要求に応じてほしい気持ちが強く、気持ちを切り替えることが難しいこと」、「活動に受け身で教師の言葉掛けや支援が必要であること」等がある。これらの背景要因としては、「見通しがもてないことで自己刺激をし、教師の言葉が十分に届かなくなること」、「見通しをもつために理解できる事柄が少ないこと」、「自分で判断したり切り替えたりする経験が少ないこと」等が考えられた。中学部卒業時の姿として、「活動に見通しをもち、自ら取り組むようになること」、「理解できる事柄を増やすこと」、「やり取りする経験を重ねること」を想定した。

以上のことから、現段階で中心となる課題として、「意思表示の方法や、理解できる事柄を増やすこと」、「自分で行うことが分かって活動に取り組み、自分でできたという達成感を積むこと」を導き出した。

よって、自立活動の目標を「教師とやり取りしながら、自分から活動に取り掛かったり、気持ちを切り替えたりして活動を進める。」、指導内容を「情報を受け止めやすい落ち着いた環境で、必要なことに意識を向けて課題に取り組み、できたことに対する達成感をもつこと」、「教師とのやり取りを通して、理解できる言葉を増やしたり、身振りやカードの選択等で意思を表出したりすること」と設定した。

2　対象題材の計画

題材の主な目標は、「販売会で販売するという製作の目的を意識して、全体または個別の目標数を目指し、達成感を積み重ねながら協力して意欲的に取り組む。」である。対象生徒がこの目標を達成するために、「綿作りの工程で自分からパルプをつまんでミキサーの瓶に入れたり、ミキサーのボタンを押したりする。」、「友達のところへ報告に向かい、部材を渡したり、部材を入れていたトレイを受け取るまで待ったりする。」の二つを、主な学習活動とした。

袋に詰めるパルプの綿作りの工程については、取り組む順番が分かりやすいように、机上に左から右へ手順に沿って道具を並べて配置し、瓶に入れるパルプの数や、ミキサーをかける時間の長さが分かるように数唱し、「終わり」の言葉に合わせてサインで示すようにした。報告については、相手の顔写真で確認したり、声を掛けてもらったりすることで行き先を判断できるようにした。友達が検品を行う間、「待つ」ことを身振りと言葉で示し、席に戻る際には写真や「椅子」の言葉で判断できるようにした。途中、集中が途切れてきた時に、他の活動に切り替えて作業を継続できるように、選択肢の写真を準備した。

3　評価

活動を繰り返すことで、自分から取り掛かったり、次の手順に移ったりすることが増え、自己刺激をすることがなくなった。手順ごとのペースが速まり、作業量が増えた。工程の区切りで評価し、回数をシールで示して称賛することで、時間いっぱい作業を続けることができた。

今できること、できるようになりそうなことを組み合わせた工程や手順にしたこと、教師と一対一で十分なやり取りができる配置の工夫をしたことが効果的であったと考える。

自立活動の指導　実践記録⑪

対象児童生徒	中学部	障害の種類・程度や状態等	広汎性発達障害
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（保健体育） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
題材名	○○甲子園！ベースボール大会をしよう		

１　個別の指導計画の作成

対象生徒は、中学部の学習に大まかな見通しをもち、簡単な約束を守りながら、友達や教師と一緒に落ち着いて学習に参加できるようになってきている。一方、学習上・生活上の困難として「自分の意に添わない場面で、衝動的に大声を出す等、不安定になり、落ち着くまでしばらく学習に参加できないこと」等がある。これらの背景要因としては、「初めての活動や見通しと違った状況が苦手なこと」や、「自分の状態の分析や理解ができないこと」、「衝動が抑えられず、気持ちの切り替え方が分からないこと」、「寝不足などによる体調不良」等が考えられた。現状を踏まえ、中学部卒業時の姿としては、「自分の得意・不得意を理解すること」、「自分の気持ちを相手に伝えること」、「経験や人との関わりを少しずつ広げながら、成功体験を増やして仲間と学習する楽しさを感じること」を想定した。

以上のことから、現段階で中心となる課題として、「『うれしいね、いらいらするんだね』等、気持ちを代弁したり、『どう思う？』と考える機会を設定したりすることで、今の自分の状態に気付くこと」、「安心して休憩できる環境を設定することで、苦手な場面では休憩を申し出てもよいことことが分かり、クールダウンする方法を知ること」を導き出した。

よって、自立活動の目標を「自分の気持ちに気付き、気持ちを伝えたり、コントロールしたりする意識をもつ」、指導内容を「予定されていることや予想されることをあらかじめ確認し、頑張る場面を決めたり、事前に体験できる機会を設定したりすること」、「友達と気持ちの共有を図る体験を積み重ねること」に設定した。

２　対象題材の計画

題材の目標の一つは、「目標を決め、上達のポイントを意識して、お互いに教え合ったり、認め合ったりする」である。対象生徒の学習活動は、「チームミーティング①～③」、「練習（攻撃、守備）」、「ミニゲーム」である。

ルールの理解や動きのイメージがもてるように、教師や何人かの生徒で、授業の始めにミニゲームを行った。その中で段階的にルールを増やしたり、簡略化したり、環境を整えたりし、スムーズに取り組めるようにした。このことで、やってみたいという動機付けにもつながった。チームミーティングでは、チームの仲間意識を高めるため、友達のよかった点等も取り上げ、話し合うようにした。また、目標意識を高めるため、自分の頑張るところを選択肢から選んだり、意見を出し合って頑張るポイントを決めたり、次回に向けて課題を確認したりした。練習では、３チームの運動量が確保できるように、学習活動をチーム毎に割り振ったり、前半後半でメンバーを変えて少人数制にしたり、場所を区切ったりし、安全やトラブル防止も心掛けた。うまくできるポイントを視覚的にイラストや映像で示すことで、技術の向上にもつながった。

３　評価

授業前に、具体的に活動内容を伝え、頑張れる活動以外は無理に誘わず、安心して取り組めるようにしたことで、「苦手なので休みます」と言ってから休めるようになった。一度ミニゲームで試合に負け、パニックになったことはあったが、ルールを分かりやすくしたり、例示したりすることで興味をもち、チームの友達と一緒にゲームに参加できるようになった。

自立活動の指導　実践記録⑫

対象児童生徒	中学部	障害の種類・程度や状態等	ダウン症候群
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（国語・数学） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	数えてみよう～１００までの数唱～		

１　個別の指導計画の作成

対象生徒は、積極的で明るく、友達や教師とも良好な関係を築いている。学校生活上の目立った困難はないが、自分の思いが言葉で伝わらないとき、周囲の理解が得られないまま、待ちきれずに行動してしまい、制止されたり誤解を受けたりすることが多い。また、本当は分かっている事でも、失敗経験から臆してしまい、「分からない」「できない」と言うため、学習活動でも力を十分に評価されない部分がある。障害特性からくる発音の拙さが一次的な要因であるが、これまで発音の誤学習からコミュニケーション面で失敗経験を繰り返し、自信を失ったことが二次的な要因と考えられる。

本生徒は平仮名の読み方が十分に習得できていないため、文を読むのは困難だが、朝や帰りの会の司会のように毎日繰り返すことは、聞き覚えた言葉の流れで対応できている。慣れない相手や複雑なやり取りへの対応は難しいが、会話は好きである。クラスメイトとの関わりでは身振りや具体物を使ってあきらめずに伝えようとする。これまでに数字や平仮名をいくつか読めるようになり、文字情報を理解することを楽しんでいる。

本生徒が中学部を卒業する頃には、平仮名や数字を読み書きする力が付き、絵本を黙読したり、友達と文字でのやり取りを楽しんだりして、自分の世界を更に広げる姿を期待している。

従って、中学部卒業時を見据えた中心課題の一つを「文字や言葉を覚えて、コミュニケーションの力を広げる」とし、自立活動の目標を「相手に伝わる言葉や動きを工夫して、言いたいことを確実に伝える」「経験の幅を広げ、苦手なことに自信をもって取り組む」と設定し、各教科等に反映した。

２　対象単元の計画

本生徒の中心課題は、指導全般にわたって意識され、全ての学習活動で意図的に組み込まれることで身に付くと考えるが、ここでは主に「国語・数学」における指導例を記述する。

国語では「読んでみよう、書いてみよう」、数学では「１００までの数」という単元を設定し、平仮名の読み書きや１００までの数唱に取り組むこととした。平仮名５０音や１００までの数を正しく読んだり聞き分けたりすることを年間目標とした。

国語では、始めに文字カードの穴埋めによって単語を完成させる活動を行った。次に友達との「しりとりゲーム」に発展させ、つながる単語を考えながら文字カードを一つずつ並べ、しりとりを完成させる活動を繰り返し行った。

数学では、数唱を「数え歌」として音楽にのせて歌う活動を行った。対象生徒の自立活動の目標に即し、手にした文字カードをその都度発音したり、数唱を「始まりの歌」として毎回歌ったりして、発語の機会を多く設定した。さらに、対象生徒が飽きずに繰り返しできるように、しりとりの内容を毎回変えたり、数唱を「３０まで」「６０まで」のように少しずつ増やしたりした。

３　評価

「国語・数学」は２名の教師で指導しており、指導内容の定期的な改善の際、評価も併せて行った。評価は、本生徒の観察による質的なものとし、学習理解度は高まったか、発言が増えたか、またその対象は広がったか、確実に伝わる場面は増えたか、という観点で行った。

対象生徒は「しりとりゲーム」を繰り返すことで理解し、次につながる言葉を考える楽しみを覚えた。文字カードを並べて言葉を作り、次の言葉とつながったとき、友達の称賛を受けながら喜び、「できた」と発言した。対象生徒は「しりとり」を言葉だけで楽しむこともでき、「国語・数学」グループの生徒だけでなく、クラスメイトや教師ともゲームを楽しむことから、対象生徒のコミュニケーションはその範囲を広げ、これからも拡大していく力を蓄えたと言える。また、一文字一文字発音する学習は、結果として発音の誤りの改善につながり、これまで「言葉で伝わらなかった」理由が、対象生徒の中で腑に落ちる様子が見て取れた。

数学の４月当初の目標は「１０までの数の理解」であったが、「数え歌」の取り組みを続けた結果、数唱に関しては「２０～３０」程度まで、目や手で追いながら読めるようになった。目と手の協応が進み、読むべき数字をとばしたり見失ったりすることが減った。また、数字の順列が分かりかけており、抜けた数字を穴埋めする課題も、「１、２、・・」と声に出して読むことで自ら正答を導くことができるようになってきた。具体物は「１０」以上を数えることが難しい段階だが、数唱に対する自信を基盤にして、数える学習に進むことができると考える。

自立活動の指導　実践記録⑬

対象児童生徒	中学部	障害の種類・程度や状態等	自閉症　発達遅滞
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（ 生活単元学習 ） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	中○サプライズ～オリジナルカレーを作ろう～		

1　個別の指導計画の作成

対象生徒は、繰り返し経験したことについては、段取りを理解して必要な物を準備して活動に取り組んでいる。また、新しい活動にも手順を演示したり視覚的な手掛かりを提示したりすると、模倣したり手掛かりをもとに次時からは一人で進めたりできる。集団の活動では、周囲の状況を見て行動したり、個別に教師からの言葉掛けを受けたりして取り組むことできる。一方で学習上、生活上の困難として、学習の約束や取り組み方を徐々に自己流に変えて行ったり、助言や言葉掛けを受けると急に不安定になり「いや」「やりません」と言うなどして、活動に気が向くまで時間を要したりすることがある。これらの背景要因としては、「活動に対する見通しがもてず不安があることで、助言や言葉掛けを受け入れにくいこと」、「やりたいことを優先したい気持ちがあり、やっていることを止められることで気持ちが不安定になること」、「指示や助言を受け入れて、みんなと一緒に活動に取り組む経験が不足していること」等が考えられた。現状を踏まえ、中学部卒業時の姿としては、「活動に見通しをもち、指示や助言を受け入れて活動に取り組むようになること」「気持ちが不安定になった場合の適切な伝え方や、自らクールダウンをして気持ちに折り合いを付ける方法を身に付けること」「みんなと一緒に行動すること」を想定した。

以上のことから、現段階で中心となる課題として、「活動に見通しをもって、友達や教師と一緒に活動することの楽しさを十分に経験すること」、「不安なときの表現方法やクールダウンの仕方を教師と一緒に考えること」、「全体指示を聞き行動に移す経験を重ねること」を導き出した。

よって、自立活動の目標を「不安な気持ちや要求を相手に受け止めてもらいながら、気持ちに折り合いをつけて行動する。」、指導内容を「言葉掛けを受けて、見通しをもって取り組むこと」、「気持ちを言葉で表現したり、クールダウンしたりしてみんなと一緒に活動すること」と設定した。

2　対象単元の計画

単元の主な目標は、「制作用の道具や調理器具を安全に正しく使って制作や調理をし、手順表を見たり友達と確認し合ったりしながら、準備や制作、調理、片付けをする。」である。対象生徒がこの目標を達成するために、「道具を安全に正しく使い、実物の野菜と見比べながら、紙粘土で野菜の食品サンプル（人参）を作る。」、「自分の活動内容が分かり、進んで制作や調理を行ったり、友達の様子に関心をもってまねたり、友達や教師からの言葉掛けを受けたりしてみんなと一緒に活動する。」の二つを、主な学習活動とした。

食品サンプル作りでは、これまでの調理でなじみの深い人参を作ることにし、実物の野菜に近い成形をしやすいように、芯材や２色の紙粘土を用意した。また、活動に見通しがもてるように様々な道具の使用経験を基に制作をする段取りにし、食品サンプルの見本も手元に置くようにした。併せて、実物の人参とサンプルの大きさや色を見比べることを約束した。

「活動内容が分かり、みんなと一緒に活動する」については、友達の様子に関心をもち、言葉掛けや提案を受けて一緒に活動しやすいように、道具や素材置きの長机をはさんで友達を一覧できる配置にし、隣で教師が言葉掛けをするようにした。

3　評価

人参の食品サンプルを紙粘土と道具を使って制作することが分かり、進んで取り組んでいたが、自分のイメージ通りに制作することに集中し、実物との十分な比較までは至らなかった。友達の様子（彩色）を見て興味が湧き、芯材分のサンプル作りを「やらない」と断ったが、教師が要求を受け止めて「絵の具でやろうか？」と提案したことに応じて、最後まで食品サンプル作りができた。「制作時の配置を工夫すること」や、「必要に応じて教師が言葉掛けをすること」は、友達に関心をもってまねをしたり、一緒に活動したりする上で効果的だった。今後は、興味をもった活動を選択して取り組む機会を保障し、相手への適切な表現方法や依頼の仕方を身に付ける活動を検討していく。

自立活動の指導　実践記録⑭

対象児童生徒	中学部	障害の種類・程度や状態等	自閉症
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（　　　　生活単元学習　　　　） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	スマイル中○～中学部の友達や地域の方々にゲーム屋で楽しんでもらおう～		

1　個別の指導計画の作成

対象生徒は繰り返し取り組んできた活動であれば見通しをもって進んで取り組めるようになった。また、身近な教師には要求を言葉で伝える場面が多く見られるようになってきた。一方、学習上・生活上の困難として、「一つ一つの活動への取り掛かりに時間を要する」「特定の友達に対して、抱きつくなどの関わりが見られる」等がある。これらの背景要因として「常同行動により活動への取り掛かりに時間を要し、言葉掛けが届かない」「未経験の事柄や活動を全体的に捉えることが苦手で、活動に取り組むまでに時間が掛かる」「小学校までは特別支援学級で学習しており、友達と関わる経験が少なかったこと」等が考えられた。

現状を踏まえ、中学部卒業時の姿としては、「やるべきことが分かり、集中できる時間が長くなることで、活動量が増えている」「身近な人を介して周囲と関わる経験を重ね、関わりの楽しさを知ることで、必要なときに自分から周りに働き掛けている」ことを想定した。

以上のことから、現段階で中心となる課題として、「活動内容、活動量が分かり見通しをもって自分から取り組む姿を増やすこと」「教師を介して友達と関わることで、決まった言葉のやり取りや、共に活動する楽しさを経験すること」「人との関わりの経験を積むことで周囲の事柄に興味・関心が向き、状況を理解し、自分から行動すること」を導き出した。

よって、自立活動の目標を「教師を介して周囲と関わる経験を通して、自分から関わろうとする気持ちをもち、自分から行動する」、指導内容を「小集団の活動で、友達からの誘いかけ等に応じて役割の活動を繰り返すこと」「自分の活動と周囲の活動とのつながりを理解して取り組むこと」と設定した。

2　対象単元の計画

単元の主な目標は、「一人一人が自分の役割を果たしたり協力し合ったりして、ゲーム屋の開店を成し遂げる達成感を味わう」である。内容は、友達や地域の方々に楽しんでもらうために「的当て屋」「輪投げ屋」「ボウリング屋」を生徒たちで行い、受付やルール説明、全体進行など、一人一人が係を担当することとした。

準備と片付けでは、活動内容や物品を置く位置が分かるように、移動させる物品の担当を固定したり、置く位置に絵カードを掲示したりした。始めは教師と共に確認しながら活動に取り組み、少しずつ見守る場面を増やすなど、段階的に支援を減らし、一人で活動することができるようにした。

対象生徒は「的当て屋」を担当し、「的当て屋の準備と片付けをする」「的当て屋の判定係として、○×の札を上げて判定を客に知らせる」の二つを主な学習活動とした。また、友達の合図を受けて対象生徒が判定をし、判定がなければゲームが進まないという流れにした。対象生徒が楽しみながら判定し、自分の判断が合っている確認と達成感を得て活動できるように、判定後にブザー音（「ピンポン」「ブー」）を準備した。

3　評価

活動を繰り返すことで、個別の言葉掛けは必要であるが、準備では机や椅子を所定の位置に運ぶことができた。また、教師の働き掛けを受けて、友達とテーブルを運ぶ共同作業にも取り組めるようになった。

判定係の活動では、始めは判定カードの上げ方が分かりにくかったり、カードで遊んだりすることがあったが、ゲーム進行の一連の流れの中で友達の「判定は？」の問い掛けを聞き、判定カードを正しく上げる役割を、ゲーム終了まで続けることができた。

今後は、本単元のような「自分が行動する必要性がより高い活動内容」を設定し、周囲との関わりをさらに広げていきたい。また、一人で活動できる場の設定や、より分かりやすい活動内容や活動量を提示する手立てなどを検討していく。

自立活動の指導　実践記録⑮

対象児童生徒	高等部	障害の種類・程度や状態等	自閉症スペクトラム障害
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（生活単元学習） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	高○バンド結成！　～音で感謝を届けよう～		

１　個別の指導計画の作成

対象生徒は、意思疎通や言葉での理解は問題なくできる。一方、学習上・生活上の困難として、「自分の思い込みが強く、自分の考えを伝えられなかったり、悩みを相談できなかったりする。」「周りの状況から自分のやることを理解できない。」「自分が決めた人とだけ関わろうとする。」等がある。これらの背景要因としては、「中学校時代までに、不適切な行動での注目獲得や意思表出を繰り返してきたこと」「特別支援学級において、限定的な人間関係の中で生活してきたこと」等が考えられた。現状を踏まえ、１年後の姿として「適切な行動を理解し、集団の中で一緒に活動する。」、「周囲と関わる経験を重ね、人と関わることに慣れる。」ことを想定した。

以上のことから、現段階で中心となる課題として、「適切な行動や価値基準を知り、それを守って活動すること」、「人と関わる経験を積むことで、状況の理解や適切な意思表出をできる事柄を増やすこと」を導き出した。

よって、自立活動の目標を「一般的な価値基準について知り、適切な行動のバリエーションを増やす。」、指導内容を「行動として正しい方法を具体的に示し、価値基準について説明したり一緒に考えたりすること」、「周りの人の反応が期待しないものであっても落ち着いた対応ができるように方法を事前に伝えたり、一緒に考えたりすること」と設定した。

２　対象単元の計画

単元の主な目標は、「音で感謝を伝えるために友達と協力し、役割を果たしたり、意見をまとめたりしながら高○のライブを作り上げる。」である。対象生徒がこの目標を達成するために「決められた役割（意見を最初に出す、時間計測）で話合い活動に参加する。」を主な学習活動とした。

生徒たちはこれまで学部合同の生活単元学習で寸劇の内容を考えたり、役割分担で演技や音響機器の操作等を行ったりしてきた。本単元は、この経験を生かして学級で楽器の演奏やパフォーマンスをしたいという生徒の願いと、卒業を迎える三年生に感謝の気持ちを伝えることを基に設定した。このことで、目的（目標）を意識して積極的に意見を出し合い、自分たちで実行できる活動内容を決定していくことができると考えた。対象生徒にとっては、少人数での活動であること、慣れた環境であること、また、これまでの学習で音響機器の担当であったことや、自分の興味・関心の高い活動であることから、意見を出しやすい状況になると考えた。実際の活動では、「１番さん」という最初に意見を出す係とし、意見を出す必然性をもたせた。さらに、思い込み過ぎて意見を出すことをやめてしまったり、物事を悪い方向に捉えてしまったりすることが多い現状を踏まえ、事前に興味をもっている衣装を着てパフォーマンスをしてもよいことを伝え、併せてそれをどのように自分の意見として話すか等について一緒に考えるようにした。

３　評価

これまでは、関わる機会を極端に嫌い、みんながいる場から離れようとすることが増え、授業に参加していても形式的にその場にいるだけになっていた。本人がやりたいと思えること、自分が意見を出さないと実現しない役割を設定していくことによって活動に必要性が生じ、対象生徒が主体的に取り組むきっかけになった。また、このことで意欲的に授業へ参加し、達成感を得ることにつながったと考える。

対象生徒からは「認められるとうれしい。」、「自分が積極的に伝えれば周りは応えてくれる。」という感想が聞かれ、自分の意見を積極的に話す状況をつくることは、適切な行動を増やすために効果的であると考える。一方で、意見を全て受け入れられることを求める傾向があるため、今後は、認められる経験を引き続き積み重ねつつ、折り合いの付け方や自分から困った状況を伝えることができるように、活動の工夫点や支援の方法等を検討していく。

自立活動の指導　実践記録⑯

対象児童生徒	高等部	障害の種類・程度や状態等	脳性まひ
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔 ○ 〕各教科等における自立活動の指導（現代社会） 〔　　〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	民主社会の原理と日本国憲法		

１　個別の指導計画の作成

対象生徒は昨年度不登校の時期があり、学習上・生活上の困難として、「不満を吐き出せずに心理的な不調が腹痛や過呼吸などにつながる」ことが挙げられる。これらの背景要因としては、「経験不足による自己肯定感の低さ」や、「自己の障害理解と自立へ向けた気持ちのコントロールの難しさ」が考えられた。現状を踏まえて、高等部卒業時の姿としては、「役割をやり遂げることで自信をつけ、自己肯定感をもって生活する」「排せつ、衣服の着脱などの基本的生活スキルを身に付け、身辺自立する」「自分から意見を出したり、周りの人に支援を求めたりする」を想定した。

以上のことから現段階で中心となる課題として、「身近な人から面識のない人までを含むたくさんの人と一緒に活動することや、話合い活動をすること」「将来を見据えた自己の障害理解」を導き出した。

よって自立活動の目標を「体調と気持ちを自己コントロールする方法を考えて実行する」、指導内容を「紹介したいことや自分のことを相手に分かりやすく伝えたり、必要な場で依頼や報告をしたりする」「自分の意見を文章化して発表したり、友達や教師と討論したりする」と設定した。

２　対象単元の計画

単元の主な目標は「民主主義を基本的人権に結び付けて考える」「日本国憲法の権利の保障と現状における課題を考える」である。２人の生徒がこの目標を達成するために、例えば「表現の自由」と「名誉権」の立場に基づく権利の主張の問題については、実際のインターネットのグルメレビューサイトの口コミページなど、身近でイメージしやすく、授業以外の場でも振り返ることができる事例を取り上げた。また、こうした具体的な事例を題材に、自分の考えを文章化して発表することや、「表現の自由」の立場と「名誉権」の立場に役割分担して討論することを主な学習活動とした。

生徒それぞれが学習内容を理解したり、考える時間を確保、整理したりできるように、情報や課題を精選した自作のワークシート（Ａ４用紙表裏１枚）を毎回の授業で用意したほか、主にフラッシュカードで板書を構成し、生徒の考えや教師の評価を板書する形で授業を進めた。同様に討論場面では、生徒それぞれの考え方を、生徒同士で評価、共有できるように、発言されたキーワードを整理して板書するように心掛けた。

３　評価

毎回、具体的事例を取り上げて自分の考えを文章化して発表したり、意見交換や役割分担の上で討論したりする活動を繰り返すことによって、考えを整理してプリントに記入する時間が短時間で済んだり、積極的に発表する場面が増えたりした。また、授業で触れるキーワードについて「ニュースで聞いたことがある」と発言する等、余暇時間にも時事問題に興味をもって接していると随所で感じられるようになった。学習内容の理解についても、定期考査の論述問題について、ほぼ正答の条件の論述ができる等、理解の深まりが見られる。

討論機会を設定して教師が討論者に加わったとしても、「人間関係の形成」や「コミュニケーション」の目標達成を踏まえ、「賛成派対反対派」といった討論形式の工夫などを一層配慮していく必要があると考える。また議論を深めるための集団の保障の観点で、時には他の学習グループ（同学部もしくは他学部）との同教科・同題材による学習機会を設けることも一つの方法と考える。そのためには、準ずる教育課程の指導者間で共通理解を図り、そのためのツールとして自立活動の流れ図を活用していくべきと考える。

自立活動の指導　実践記録⑰

<table>
<tr><td>対象児童生徒</td><td>小学部</td><td>障害の種類・程度や状態等</td><td>肢体不自由、重度知的障害、呼吸器障害</td></tr>
<tr><td rowspan="3">対象授業</td><td colspan="3">〔　　〕自立活動の時間における指導</td></tr>
<tr><td colspan="3">〔　　〕各教科等における自立活動の指導（　　　　　　　　　　　　　　）</td></tr>
<tr><td colspan="3">〔 ○ 〕自立活動を主とする教育課程における指導</td></tr>
<tr><td>題材名</td><td colspan="3">みんな　なかよし　～みんなのパプリカは、大きくなったかな～</td></tr>
</table>

１　個別の指導計画の作成

対象児童は、体調が安定し、訪問指導回数や学校行事、授業へのスクーリングの回数が増えてきている。音楽的活動を好み、楽器の音や友達の歌声などの好きな音が聞こえると笑顔が見られる。また、通信電話で友達が呼びかける声が聞こえると、視力は弱いと思われるが、タブレットに注目する様子が見られる。スクーリング時には、初めは友達や教師からの語り掛けに緊張したり、視線をそらしたりする様子が見られるが、友達と一緒に学習に参加しているうちに、周囲を見渡したり、友達に注目したり、呼び掛けや周囲の音を聞いて笑顔が見られたりなどの反応が見られる。これまで集団を経験する機会が少なかった対象児童にとって、友達と関わり、にぎやかで楽しい雰囲気の中で過ごす時間は、良い刺激であり、保護者のニーズでもある。現状を踏まえ、小学部卒業時の姿としては、「体調を整えて生活し，いろいろな刺激を感じ取って気持ちを表情や体の動きで表現する。」と想定した。

以上のことから、現段階で中心となる課題として、「好きなこと、興味のあることでの活動を通して、集団で活動することの楽しさを体験すること」「友達や担任以外の教師とリラックスして活動をしたり、教師の顔を見て語り掛けを聞いたりすること」「視線や表情で気持ちを表現すること」を導き出した。よって、自立活動の目標を「友達や担任以外の教師と関わったり、活動の雰囲気を感じたりし、視線や表情で気持ちを表す。」、指導内容を「スクーリングや通信電話を通して、友達と楽しく関わること」と設定した。

２　対象題材の計画

題材の主な目標は、「スクーリングで、友達や担任以外の教師と握手をしたり、語り掛けられた相手を見たりする。」「通信電話やビデオレターで、タブレットの画面に注目しながら、語り掛けを聞く。」である。対象児童がこの目標を達成するために、訪問指導時の学習題材「おはなしだいすき」を設定し、「畑」「野菜」「パプリカ」など、友達と共有できる学習内容を取り入れ、対象児童へ関わる友達や教師が共通の話題で積極的に話し掛けられるようにした。主な学習活動として、野菜が登場する絵本を見たり、パプリカを苗から育てたり、実物のパプリカの感触や香りを味わったりした。

３　評価

同学年の学習内容を部分的に取り入れて、対象児童の学習内容を設定することで、共通の話題ができ、スクーリングや通信電話では、同学年の児童からの自発的な関わりが見られた。また、既習内容での語り掛けがあることで安心でき、対象児童が目を大きくして反応したり、タブレットの画面に視線を動かしたり、友達の様子に注目したりする様子が見られた。保護者は、スクーリングが増えたこと、関連する学習が繰り返しできたことで、友達や教師からの関わりに対する反応が多くなり、分かりやすくなったように感じると話していた。学習の関連性や連続性を意識したことは、対象児童が周囲に関心を向け、他者と安心して関わる上で効果的だった。今後も経験や関わりの広がり等につながる充実した学習活動となるよう、学部職員の協力、連携を得ながら、検討していきたい。

自立活動の指導　実践記録⑱

対象児童生徒	小学部	障害の種類・程度や状態等	低酸素脳症後遺症　てんかん
対象授業	〔　　〕自立活動の時間における指導 〔　　〕各教科等における自立活動の指導（　　　　　　　　　　　　　　） 〔 ○ 〕自立活動を主とする教育課程における指導		
単元名	マリオカートツアー		

1　個別の指導計画の作成

対象児童は、車椅子に乗ったままの授業が多く、姿勢変換をする機会が少ない。また、楽しすぎて興奮すると、全身に力が入りすぎて自分で姿勢をコントロールすることが難しい。コミュニケーション面では、身近な教師や学級の特定の友達の問い掛けに、表情の変化や右手の動きで「ＹＥＳ、ＮＯ」や快、不快を伝えることができるが、場面や相手が限定されている。これらの背景要因としては、興味の範囲が狭い、学級以外の教師や友達と楽しさを共有したことが少ない等が考えられる。

現状を踏まえ、３年後の姿としては、「他者からの働き掛けに、誰にでも分かるように応えること」「自分の意思で身体をゆるめたり、力を入れたりすること」を想定した。

以上のことから、現段階で中心となる課題として、「色々な教師や友達と楽しさを共有する中で、自分の気持ちが伝わる喜びの経験を積み重ねること」「教師の言葉掛けに合わせて自分で力を入れたり、抜いたりする学習を通して姿勢保持する力を付けること」を導き出した。

よって、自立活動の目標を「担任以外の教師や学級以外の友達に表情の変化や注視や追視、右手を上にあげることで自分の気持ちを伝える。」「身近な教師の働きかけを受け入れ、座位、両側臥位の姿勢をとったり、身体の緊張をゆるめたりする。」と設定した。

2　対象題材の計画

題材の主な目標は、「端座位やあぐら座位、またはうつぶせでバランスボードに乗り、左右の傾きを感じて身体を垂直に戻そうと首を動かしたり、手をボードについたりする。」である。対象児童の個別目標を「教師の後方支援を受けた端座位でバランスボードに乗ること」「左右の傾きに応じて首を傾きと反対方向に動かし、バランスをとろうとすること」とし、学習活動を進めた。また、担任以外の教師にも自分の気持ちを伝えられるように、「最初に乗りたい人はいますか？」「ピーチ姫をやりたい人は？」等と発問を精選し、答えやすくした。

端座位をとれるように、活動前には、骨盤揺らし（腰のゆるめ）の後、右下側臥位で側湾部分を伸ばしたり、膝の曲げ伸ばしや足首のゆるめの後、膝を立てて足の踏みしめを行ったりした。

バランスボードに乗ってからの目標に対して、本人がバランスをとろうと意識して首を動かすのは難しいため、自分から首を動かしたくなるように、興味のあるマリオカートのレースの映像をタブレットに映し、動かしてほしい方向に提示することにした。

3　評価

児童の興味・関心に基づいた教材を提示することで、「見たい」という気持ちが高まって、自然に垂直方向に首を動かすことができた。

また、担任以外の教師からの問い掛けには、２回繰り返してゆっくり話すと、右手を上に動かしてやりたいという気持ちを伝えることができた。楽しい活動で質問の内容も答えやすいものであれば、担任以外の教師にも気持ちを伝えられるようになってきた。どちらの変容にも共通していることは、児童の「やりたい」と感じられる内容を取り入れたことが効果的だったことである。

今後は、認知面を高めるために、複数の物から正しいものを選ぶ活動を取り入れる、自分である程度姿勢を保持できるように、教師の言葉掛けや支援で身体を緩めたり、力を入れたりすることができた際に即時に称賛する、などを繰り返して行っていくことで、ステップアップにつなげていきたい。

〔資料２－１〕　県立視覚支援学校　研究関係資料

実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ（流れ図）　記入の仕方

令和〇年〇月〇〇日

〇〇学部	〇年	氏名　〇子	作成者　〇　〇

実態把握

（１）情報収集

ア　視　力

遠距離視力	近距離視力	最大視認力	備　考

イ　実　態

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

実態表を参考にして記入します。
課題に加えて長所やできていることも記入します。

（２）学習上又は生活上の困難の視点これまでの学習の習得状況の視点から整理

ア　学習面

「できていること（学習の蓄積）」「困難さに関わること」を簡潔に記入します。

イ　生活面

【背景要因】

※　それぞれの困っている事柄の背景にある要因を書きます。背景要因を推測するに当たっては、障害特性や発達に関する諸検査等の結果、自立活動の内容の６区分の視点等を参考にしましょう。

中心的な課題

（３）（１）、（２）で整理した課題同士の関連の整理

次のことに留意して課題を導き出します。

①　卒業後（〇〇年後）の姿を想定し、達成可能なものか検討する。

②　幼児児童生徒にとって必要な課題、幼児児童生徒の生活を豊かにするものを選ぶ。

③　本人の「こうなりたい」という気持ちをくみ取り生かす。

④　「できていること」「できるようになってきたこと」を生かす。

⑤　幼児児童生徒が「できない」要因や背景を考え、必要に応じて代替手段も検討する。

（4）目標設定

長期目標	ア イ ウ
短期目標	ア イ ウ

長期目標は３年後（または卒業後）の姿を想定して設定します。途中で目標を修正・追加するなど、柔軟に捉えて目標を改善することも必要となります。
小１～小３、小４～小６、中１～中３、高１～高３を区分とする長期目標とします。

短期目標は１年後の姿を想定して具体的に設定します。

（5）個々の指導目標を達成するために必要な「項目の選定」

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
（1）、（2）					

項目番号を記入します。具体的な指導内容を考えるときに参考になる視点が「自立活動の内容」の６区分２７項目です。（詳しくは「学習指導要領解説・自立活動編」を一読しましょう。）どの項目が関係しているか多面的に捉えていきます。

（6）選定された項目を関連付け具体的な指導内容を設定

	ア	イ	ウ	エ
具体的な指導内容	例： 漢字検定合格の目標を設定し、既習漢字（小２、３年程度）の漢字の部品を言語化したり空書きしたりして、正しく漢字を読み書きする。			
	例： ２　心理的な安定（３） ５　身体の動き（３）			
指導場面	例： 国語 自立活動 その他の各教科等			
評価	漢字の部品が定着することで、漢字を習得するスピードも速くなった。漢字検定８、９級にも合格し、自信をもつことができた。			

具体的な指導内容には短期目標の記号ア～エに対応させて、手立ても含めた、具体的な指導内容を記入します。

指導内容に関連する自立活動の６区分２７項目を記入します。

自立活動は学校の教育活動全体を通じて行うことが基本になります。具体的な指導内容を，どの場面でどんな方法で指導するか考えます。
各教科等の指導を行う場合にも，幼児児童生徒の困難に配慮することが必要です。優先度の高い指導場面を記入することで複数の教員で共通理解し、一貫した指導を行うことができます。

各教科担当との話合いを受けて、「各教科等における自立活動の指導」も含めた、総括的な評価を記入します。

〔資料２－２〕　県立支援学校天王みどり学園　研究関係資料

「子ども理解シート」記入の仕方

部　　年　　氏名（　　　）

障害の種類・程度や状態等	

1　実態把握

〇学習や生活のなかで見られる長所やよさ　　△困難さ、苦手としていること
☆その他（障害の状態、発達や経験の程度、特性、興味・関心等）
【健】健康の保持　【心】心理的な安定　【人】人間関係の形成【環】環境の把握　【身】身体の動き　【コ】コミュニケーション

子ども理解ミーティングから項目を整理して記載。
☆：黄付箋　〇：青付箋　△：赤付箋
【　】は6区分。

2　背景要因

～があれば、～できる。～のため、困難が生じている。（または）～できる。

1　実態把握　の項目を関連付け、多面的に背景を考える。
〇なぜできるようになったのか？どうしてできつつあるのか？
△困難はどこからきているか？どうしてそのような行動が表れているのか？

3　課題

〇年後の姿

長期目標。〇年後、こうした姿が見られると学習や生活に取り組みやすくなる。

中心課題～この課題が改善されると、他の課題の改善につながる

今取り組む必要がある課題。〇年後の姿につながる課題。
目標設定や指導内容を考えるために必要となる課題。
「今、なぜこの指導目標、指導内容なのか」の根拠。

4　目標

３に基づき設定した目標　【関連する６区分（項目）】

短期目標。長期目標達成に至るためのステップ。達成可能で具体的な目標。

5　指導内容

教育活動全体を通した具体的な指導内容～配慮、環境設定、手立て（～できるように～する）

配慮や環境設定の他、児童生徒が自分から困難に対応できる手立ても記述する。

【引用・参考文献】

・特別支援学校幼稚部教育要領　平成29年４月　文部科学省
・特別支援学校小学部・中学部学習指導要領　平成29年４月　文部科学省
・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）
平成30年３月　文部科学省
・特別支援学校高等部学習指導要領　平成31年２月　文部科学省
・知的障害特別支援学校の自立活動の指導
平成30年11月　全国特別支援学校知的障害教育校長会
・肢体不自由教育実践授業力向上シリーズNo.７　新学習指導要領に基づく授業づくりⅡ
令和元年11月　全国特別支援学校肢体不自由教育校長会
・特別支援学校学習指導要領等を踏まえた病気の子どものための教育必携
令和２年１月　全国特別支援学校病弱教育校長会

特別支援学校　自立活動ガイド
令和２年３月発行　秋田県教育委員会

〒010-8580　秋田市山王三丁目１－１
秋田県教育庁特別支援教育課
電 話　018-860-5135
FAX　018-860-5136